

正信偈講話

下卷

正信偈講話

第30

求念

院藤枝令道師陳述



勸學 島地嘿雷師題辭

正信偈講話

全三冊

京都

興教書院出版

正信偈講話下

故求念院 藤枝令道 陳述

印度西天之論家

中夏日域之高祖

顯大聖興世正意

明如來本誓應機

上來釋迦彌陀二尊遺喚の正意を明し。已下は三朝淨土の七高祖。各々此一宗を興行し玉ふことを論釋に就て知識の傳持を示し玉ふなり。夫れに就て我眞宗に於て。三國の諸師の中特更に龍樹。天親。曇鸞。道綽。善導。源信。源空の七高祖を簡び玉ふことを辨すべし。今家に於て此七祖を選んで相承の師としたまふには。三つの理由が存せねばならぬ。一には自身往生。二には在世化導。三に滅後の利益。この三つの徳が具はらねば相承の人師とは云はれぬなり。即ち顯大聖興出正意。明如來本誓應機の二句に於て別選の意。明らかなり。

扱印度とは天竺のこと、其中に南北東西中央の五國にわかる。是れを五天竺
 と云ふ。此印度國は西天にあたるゆへに、印度即西天なり。論家とは龍樹天親
 の二大士を云ふ。中夏とは唐土のこと。日域とは日本國のこと。高祖とさした
 のは、曇鸞道綽善導源信源空の五師なり。大聖興世の正意と云ふは、即ち釋
 迦出世の本懷たる。唯說彌陀の本願海にして、弘願他力の一法なり。次に如來
 の本誓とは、彌陀如來の本願弘誓をさす。是れ總じては四十八願なれども、別
 しては第十八願を云ふなり。顯と明とは七高祖の御手柄なり。隠れたるを顯
 はし、玄幽なるを明かにし、玉ふ即ち末世相應の要法は、この彌陀の本弘誓
 なることを顯明し、玉ふなり。應機とは根機に相應すると云ふこと。彌陀の本
 願は即ち修しやすく行じやすく證りやすくして、實に末世相應の要法な
 り。先づ世間に於ひても、何事に就けても相應と不相應がある。飢へたる時は
 食が相應し、渴したるものには水が相應し、寒さには衣服が相應し、病ひには藥
 りが相應し、闇夜には燈が相應し、渡りには船が相應す。又不相應とは、是れに

反して飢へたる時に衣服がありても相應せず、寒さには水が相應せず、病に
 は毒が相應せぬ如く、出世間の法に於ても先づ時機教の三つが相應せねば
 利益がない。如何はと教が勝れてたりても、時と根機が是れに相應せねば所
 詮がなひ。花は折りたし、梢は高し、聖道自力の教法は如何に殊勝な謂れでも、
 今日今時の我れ人には、根機を尋ねれば、下根最劣時をたうぬれば、末法濁世
 「何事も時ぞと思へ、夏來ては錦にまさる麻のささるも、時が相應せずば夏の
 綿入、教へが相應せねば、盲目の垣のぞき、根機が不相應なら、幼兒の河渡りも
 同じこと。相應せねば利益は無い。依て御和讃に「像法の時の智人も自力の諸
 教さしねきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいらたまふ」と仰せられて、像
 法の時の智人とは、正しく今の龍樹天親の如き、智恵もあり、修行もつとまる
 歷々の人でさへ、聖道門は不相應と知りて、時機相應の要法たる念佛門に入
 せられた。故に道綽禪師の安樂集には「若教起時機、易修易悟、若機教時乖難
 修難入」と仰せられ、何程聖道門の教へは有難ふても、時機が相應せねば、其益

がない。圓い器には圓い蓋方な物には方な蓋末世の我等には行儀作法の入り善人も悪人も男子も女人も簡びなく。懇め助けてやるぞよの他力本願の御教より外になひ。御文章には「阿彌陀如來の他力本願と申すは。すでに未代いまのときの罪深き機を本として。すくひ給ふが故に在家止住の我等ととも。のためには相應したる他方の本願なり。あらありがたの彌陀如來の誓願や。あらありがたの釋迦如來の金言やあふぐべし。信すべし」と仰せらる。昔し法照禪師は善導の後身とも云はるゝ人ぢやが。出離を大事と思召し無常念念に逼れば後生菩提をいかゞと。五臺山に於て生身の文殊菩薩に遇ひたてまつりて。たづねたまふときに三世諸佛の覺母といはるゝ程の文殊菩薩禪師の頭上をなでて。汝ぢまさに念佛すべし。正に今はこの時なりと告げ玉ふ。又世俗の教へでも時失ふべからずと云ふて。時は大切なるものぢや。後生の一大事は猶ほ更以て時が肝要なり。依て相應不相應を能くくわきまへねばならぬ。喩へば醫師が病人を治療するにも。若し藥りが相應せねば何日迄

立てても全快はせぬ。藥り違ひで人を殺すことは澤山ある。是故に相應不相應は大切ぢや。これは藥りは教法と同じことで。法門は迷ひの衆生の病氣を治する藥りぢや。然るに今日の我れらは御開山の御言にも難化の三機難治の三病とありて。實に九死一生の大病人なれば。本願醍醐の妙藥でなければ。逆ても本腹はならぬ。又百姓農夫が種蒔をするに。其時節がある時を失ふては。折角時き付けても益にたゝぬ。又病人が養生をせなんだり。毒なものを喰べたりしては。藥りはさかぬ。丁度いまも其如く持た病ひは難治の業病十惡五逆の毒絶ちもせず。剩へ藥りさらひの我れ人に相應の御教へは。手にも晴れにも念佛の一法。彌陀の本願より外にないぞと。三國七祖の御化導を知らせたまふが正信偈の御文。依て龍祖は難行易行の道れしへ。天親菩薩は一心皈命の御案内曇鸞大師は報土の因果誓願をあらはして。往還の回向は他力に由り正定の因は唯信心なりと知らせ玉ふ。道綽禪師は聖道淨土の二門を判じて。三不三信を誨へ。像末五濁を悲引し玉ふ。善導大師は佛の正意を明らか

にして定散と逆惡を矜哀し。正雜二行を知らせ玉ひ。横川の源信僧都は報化二土を辨立して。極重惡人唯稱佛と勸め玉ひ。法然聖人は選擇の本願を惡世に弘めて。信疑の決判を明らかにし玉ふ。一器の水を一器に寫すが如く。師資相承の御哀愍。極惡最下の機のため。極善最上の彌陀本願時に叶ひ。機に叶ひ凡夫往生の時節到來。彌陀の悲願ひるまゝりて念佛往生さかりなり。扱も尊とや南無阿彌陀佛。

釋迦如來楞伽山 爲衆告命南天竺 龍樹大士出於世

悉能摧破有无見 宣說大乘无上法 証歡喜地生安樂

扱此釋迦如來の句より。應報大悲弘誓恩までは。七高僧の初祖龍樹菩薩の自行化他の徳を擧ぐる中に於て。今は先づ楞伽經の懸記として。釋迦如來さまが天竺楞伽山に於て。大惠等の大衆に對して。後々のことを記して。佛滅后南天竺に龍樹大士出世のことを告げ玉ふ。其文に云く「我乘内証智。妄覺非二境界。

如來滅度後誰持爲我說。未來當有レ人。大惠汝。諦聽有レ人持我法。於南天國中。有大德比丘一名龍樹菩薩。能破有无見。爲レ人說我乘大乘無上法。証得歡喜地。往生安樂國」とあり。今御開山が此文に依りて六句の偈を作り。龍樹菩薩は釋迦の懸記によりて出世し。佛化を繼ぎたまふことを顯はして。其徳の尊ぶべく其説の信すべきことを知らせ玉ふなり。釋迦如來とは具さには釋迦牟尼如來と云ふ。即ち婆娑の化主應身の佛けなり。此釋迦如來が懸記の主にして。所謂豫言者なり。楞伽山とは懸記の場所にして。楞伽經を説れし山の名なり。扱彼の經では大慧菩薩に告げ玉へども一人に告るは一切衆生に告ぐるなり。故に爲衆告命との玉ふ。扱龍樹菩薩は五天竺の中。南天竺憍薩羅國に出世し玉ふなり。次に龍樹大士出於世とは。先づ龍樹とは。或は龍猛とも龍勝とも云ふ。傳に云く此人阿周陀那と云ふ樹の下にて生れたまひ。龍宮に至りて方等深奥の經典を受持して。道を成じたまふゆへに龍樹と名けられたまふ。即ち南天竺に降誕したまひて。化導あまねく五印度に被ひる。次に此の龍

樹大士の出世の年時に就ては異説あり或は佛滅后二百年の後ちとも云ひ
 又は五百三十年の頃ちとも云ひ又九百年と云ひ或は七百年とも云ふ如し是
 異説あれども今は七百年の説による佛滅后七百年像法のはじめにあたり
 て出世し玉ふと知るべし大士と云ふは菩薩のこと梵語に摩伽薩埵と云ふ
 に翻譯して大士と云ふ自利を他の行なきものを下士と名け自利ありて利
 他なきを中士と云ひ自利々他の行を具するを上士と云ふ又は開士と云ひ
 正士と云ふ何れも心廣大にして能く菩提を求むるに勇猛精進なる人の事
 なり次に悉能摧破有無見とは有無の二見は前に十三光の下無邊光を辨ず
 るときに述べたれば今は略す即ち斷無の見常有の見と云ふて共に邪見
 のことなり御和讃に有無の邪見との玉ふ龍樹菩薩出世の時外道さかんに
 して有無の二見を諍ひ佛法を破壊す此時にあたりて龍樹出世して委く彼
 の外道を説破し玉ふて佛法大乘無上の妙法を取り立て弘通し玉ふゆへに
 悉能摧破有無見と云ふ次に大乘とは小乘に對するの言小人の所乗を小乘

と云ひ大人の所乗を大乘と云ふ小人とは聲聞緣覺なり是れ智惠淺少なる
 が故に小人と云ふ次に大人とは菩薩のことこれ智惠深大なるかゆへに大
 人と云ふ乗とは運載を義とするとあり是れに能乗所乗あり即ち乗り物
 と乗り人なり扱此の大乘の名義は諸家に通すれども今は簡んで大乘無上
 の法と云ふて彌陀の本願他力念佛の謂れとす何となれば楞迦經の本文に
 往生安樂國と云ふて是れを釋迦佛我乗の法との玉ふ此の大乘無上の彌陀
 法を弘通し玉ふ龍樹なるゆへに自身先づ彌陀の本願に乗り込んで他を化
 導し玉ふ故に易行品には「乘彼八道船能度難度海自度亦度彼」どの玉ふ元
 上法とは大乘中に於ても特に勝れたる法なるゆへに无上法との玉ふ即ち
 ち彌陀の本願は一念大無上功德の法なるゆへに无上法と云ふ即ち大
 利无上は一乘整願眞實の利益なり小利有上は則ち是れ八万四千の假門
 なりと仰せられた此大乘无上の四字に就て大乘即无上と云ふ義と又大乘
 中の无上と云ふ義との二義あり之れに與奪の二門を以て辨せば暫く與へ

て云へば大乘の名目は花天密禪にも許すといへども奪ふて彌陀教より之れを見れば大乘无上の名は他へは與へぬ高祖行の卷に「一乗者大乘なり大乘者佛乘なり至唯是れ誓願一佛乘なり」とのたまふ然れば彌陀の本願は乘りものにして一切善惡大小凡聖ごとく乗せて生死海を渡したまふ法なるゆへに大乘无上の法と云ふなり扱歡喜地とば先づ通途に約して申さば初地のこと此位ひは界内界外の煩惱を斷じ中道實相の理をさとり當來作佛を知て自利々利を行するゆへに心に歡喜多し故に歡喜地と云ふ又別途今家の意に約せば一念皈命の立處るに他力廻向の大信心をうれば心多歡喜の利益あり然れば念佛の信者は他力の法徳によりて修したることもなく行じたるればへもなきに入正定聚不退轉の益を蒙り往生治定の身になれば所聞をよるこび所獲をよるこび身にあまるうれしさの日暮しは即ち歡喜地に住するなり今龍祖は通相の上にて已でに能く歡喜地をさとり初地の菩薩なるに捨聖皈淨と聖道の自力門をさしたきて易行淨土

の他力門に入り彌陀の弘誓に乗じ玉ふ初地不退の菩薩でさへも自力のかぶとをぬぎすて彌陀の本願に皈し玉ふ況んや今時の我れ人は底下薄地の凡夫にて智目行足の欠けたる身上自力の計ひ無益なり時は未法機は下劣懦弱怯劣の腰拔が聖道門を詠めても及ばぬ鯉の淵のぼり無益な願ひを致さうより其機の儘で彌陀のため生安樂の道連は龍樹が先達の案内者偏へに本願他力の弘誓の舟に乗り往生すべきことなりと知らせ玉ふなり

顯示難行陸路苦 信樂易行水道樂

扱この二句は龍樹菩薩が念佛を勸めんがために難行易行の二道を開ひて難行道の苦しさを捨て易行道の修し易をすよめ玉ふ其次に云く「佛法に無量の門あり世間の道に難あり易あり陸路の歩行はすなはち若しく水道の乗船はすなはち樂しきが如し」と述べ玉ひ自力聖道の修行を陸路の歩行に喩へ信方便の易行を水道の乗船になぞらへて知らせ玉ふなり御和讃に「龍

樹大士世に出で難行易行のみられしへ。流轉輪廻のわれらとば弘誓の船にのせたまふと仰せられた。去れば自力聖道の修行は修し難く行し難し出家發心捨家棄欲して修行戒行の功を積み三大阿僧祇劫とある長の年月かゝりて佛果に到るは言語にたへたる難行ぢや先づ世間に於ても奥州南部のはてから京へ登ることにして陸地の歩行は在處を出てより山を越へ河を渡り容易ならざる莫大の辛勞をして十日廿日の日數を経て一日歩けば一日丈一里行けば一里段々に都へ登る如く誠に難澁ぢやこれも足の達者な体だの丈夫な人ならば一度は京へ往き付きもするが足弱の其上に体だの不自由な者であつたら逆も往かれぬ纒が百里か二百里の道でさへ其通り今聖道門の修行で云へば底下薄地の凡夫から妙覺果滿の佛けの証果五十三段の遠方へ自力で往かうとするならば十信の初めより十住十行十回向の山阪を越へ十地の大河を渡り等覺補處の峰に登りて夫れからでなければ佛果の都へは往かれぬ是れも修行のつとまる戒行のたもてる智

目行足に不自由のなひ勇猛精進の達者な者なら彌勒菩薩の如く五十六億七千万龍華三會の曉さには法性の都入りも出來やふが智慧の眼こはつふれた盲目修行の足の立たぬ腰抜け逆ても一足も歩み出すことは叶はぬぞと聖道自力の難行を顯示して易行淨土に皈せしめ玉ふ次に信樂とは深信愛樂なり高祖信卷の御釋に「信樂と云ふは則ち是れ如來大悲圓融無碍の信心海なり是の故に疑蓋あることなし問雜あることなし故に信樂と名く」とあれば本願を信受して疑ふ心の露ちりほどもなきを信樂と云ふ此信樂は行者の心より起るにあらず信樂を獲得することは如來選擇の信心より發起するとあれば即ち他力至極の金剛心をさして信樂と云ふ易行とは前の難行に對して信佛因緣願生淨土の謂にして修し易すく行じやすくさとりやすき彌陀他力本願の信心をさして易行と云ふ是れ自力の計ひ少しも用らかさず尤々彌陀他力の弘誓によりて速やかに疾く佛果に到るがゆへに水路の乗船に喩へたまふ去れば世間に於ても筑紫西國のはてより京へ

登るに漫々たる大海を船に乗りて渡れば眼は見へずとも足は不自由でも
 持たれ荷物は何程重くとも自身の力からは少しも要らぬ舟の仕掛けの働ら
 きでやすく大海を渡る如く彌陀弘誓の願船は智慧の眼をば見へずとも
 修行の足腰は立たずとも十惡五逆の荷物は重くとも生死大海の船筏なり
 罪障なれしとなげかさば一念皈命の約束一つで易々生死の大海を超へ
 臨終捨命の夕には西岸上の彼岸へ到着し大般涅槃の妙果を証る船も楫も
 我れとはとらじ法の舟たゞ舟入にまかせてぞゆく弘誓の舟に乗りぬれば
 大悲の風にまかせたり扱また舟の徳として達者な人も弱ひ人も肥れたる
 人もやせたる人も足よあもいさりも乗り込んだら同事に渡す彌陀の弘誓
 は五乘齋入一味平等に渡し玉ふ分け隔てのなひ本願ぢや扱こそ信樂易行
 水道樂とは知らせ玉ふなり夫れに就て龍祖の論の上では易行と云ふに諸
 佛の易行と彌陀易行とがある故今五義を以て略して其分齊を辨ずれば一
 に自力他力の異これに諸佛の易行は自力の稱名なれども彌陀易行は純他

力の行にして少しも自力の計ひは難らぬ二に機類に就て堪不堪の異ひが
 ある諸佛の易行では鈍根无智造惡不善のものは助からず然るに彌陀他力
 の易行は相手の衆生に隔てなし一切善惡智愚貴賤凡聖逆勝洩るることな
 し三に萬善具不具の異諸佛易行の稱名は是れ萬行中の一行なれども彌陀
 易行は萬行圓備の嘉号にしていはゆる萬善萬行の總体なり四には信行即
 離の異諸佛の稱名は信と行とが各別なれども彌陀易行の他力念佛は信行
 相即して不離不二の妙行なり五に成佛遠近の異とて諸佛易行は成佛に望
 むれば遙かに無量遠劫の積植功徳を用いざれば佛果には到らず是れに引
 きかへ彌陀易行法はたとひ十惡五逆の機なりとも一念頓極のいはれにし
 て初生即極証大涅槃佛果満足の易行なり然れば與奪の二門を以て分別す
 れば與へて諸佛に易行の名を許すといへども是れ難行中の易行たるのみ
 彌陀易行に望むれば尙は難行なり彌陀他力本願の一法こそ易行中の易行
 法なり扱又此易行に就てゆきやすしと行じやすしとの二意を存す即ち

信心易行と稱名易行なり。左りながら彌陀易行は元と信行相即にして更らに別なるに非ず。信心をうれば報土往生の正因なるが故に淨土へはゆきやすし。密師之れを開見して信佛因縁の義をあらはし。生後之極致不退の風航と知らせ玉ふ。然れば自力他力聖道淨土を以て難易の二道を分別すれば。自力聖道は難なり。他力淨土は易行なり。依て高祖は「此界に於て入聖得果するを難行道と名け。安養の淨刹に於て入聖得果するを易行道と名く」と知らせ玉ふなり。行じやすしとは彌陀の名号稱するに行住坐臥もねらばれず。時所諸縁もさはりなし。寐てもさめてもへだてなく。南无阿彌陀佛をとなふべし。彌陀易行の念佛を行するには作法もいらねば威儀もなし。終日能行すれば所行海を出でず。法体行の其儘が衆生の能行となりて働くゆへに不行而行と云ふ是れ易行の至極あり。

憶念彌陀佛本願 自然即時入必定 唯能常稱如來號

應報大悲弘誓恩

扱この四句は正しく易行の至極を顯はす。易行品に於ては廣く諸佛易行彌陀易行を説くといへども龍樹菩薩の本意偏へに彌陀易行に在る。其の意を今の四句に顯はし玉ふなり。即ち論文に「憶念阿彌陀佛本願。如是若人念我稱名自皈即入必定」の文に依る。念我の念を憶念と知らせ我を顯はして彌陀佛本願と云ふ。扱この憶念の言は信行に通ずれども。今は論文に「人能念是佛無量功德。若人願作佛心念阿彌陀」とある。心念のとなれば是れすなはち本願の三信を成就文の一念に合したる。信樂愛持をさして憶念と云ふ。元來憶念の名は憶持不忘と云ふて。相續が持ち前なれども。后續が必ず初起の一念より生ずる初起の一念には必ず後々相續を具するゆへに。今は直ちに初起の信を呼んで憶念と云ふ。御開山信の卷の御釋に「憶念即是眞實一心也」と示されたも此意なり。扱また此憶念に能念と所念を分別すれば。

衆生は能念阿彌陀如來は所念なり。自然と云ふはこれに二義ありて。一には法爾の義これ法の然らしむるにして更らに機(はたら)の計(はか)ひに非らず。御和讃に「信は願より生ずれば念佛成佛自然なり。自然はすなはち報土なり。証(まこと)大涅槃(だいねはん)うたがはず」とも。自然の淨土にいたるなりとも仰せられて他(ほか)方(かた)本願(ほんがん)の約束(やくそく)阿彌陀如來(あみだにょらい)の御計(ごけい)らひと自然と云ふ二に因果(いんぐわ)自然(じぜん)の義(ぎ)形(かたち)あれば影(かげ)あり音(ね)あれば響(こ)きあり因(いん)あれば果(ぐわ)ありの道理(どうり)にして憶念(おくねん)彌陀佛(あみだぶつ)の因(いん)あれば即時(じつじ)入(い)り必定(ひつじやう)は理(り)として自然(じぜん)にあるべきなり。即時(じつじ)とは其時(そのとき)と云ふこと。時(とき)を隔(へ)てす處(ところ)をさらす。一念(いっぴん)皈命(きへい)の其時(そのとき)其處(そのところ)立處(たつち)と云ふ意(い)なるなり。依(よ)て高祖(こうそ)行卷(ぎやうまき)の御釋(ごしゃく)には即(すなは)ちの言(ことば)は願力(ねんりき)を聞くによりてひろく報土(ほうど)の真因(しんいん)決定(けつじやう)する。時刻(じこく)の極促(ごくそく)をのぶる」との玉ふ。又六要鈔(りくようしやう)の御釋(ごしゃく)には「即(すなは)ちの言(ことば)は願(ねん)の義(ぎ)なり。命終(めいしゆう)を待たず。ひとかに信心(しんしん)開發(かいはつ)の時分(じきぶん)。正定聚(しやうぢやうしゆ)に入(い)ることをおらはす」と示(し)し玉ふ。入(い)り必定(ひつじやう)とは入定正聚(にやうぢやうしやう)のこと。又は不退轉(ふたいてん)とも云ふ。此文(このぶん)正(ただ)しく正定現益(しやうぢやうげんぎやく)の明證(めいしやう)なり。次に唯能常稱(いひのつねにたがふ)等の二句(ふたご)は報恩(ほうおん)の義(ぎ)を示(し)し玉ふ。是迄(こゝまで)にて龍樹菩薩(りやうじゆぼさつ)の自行化(じぎやうけ)の

他の徳化(とくけ)を結び玉ふなり。實(じつ)に彌陀佛(あみだぶつ)の本願(ほんがん)を憶念(おくねん)するの行者(ぎやうじや)は信(しん)ずる一念(いっぴん)の立處(たつち)に正定不退(しやうぢやうふたい)の聚(しゆ)に入りて。必ず滅度(めつた)に至(いた)るに定(ま)まること。偏(ひと)へには是れ佛恩(ぶつおん)なり。此(こゝ)廣大(くわんだい)の恩(おん)を身に得(え)て。之(これ)を報(むか)へざるの理(り)あらん。智恩(ちおん)報徳(ほうとく)は人間の大本(だほん)なり。故(ゆゑ)に世教(せきけう)に於(お)ても報恩(ほうおん)を教(おし)へざるなし。況(いは)んや念佛(ねんぶつ)の人に於(お)ておや。先(まづ)偈文(げもん)を解(げ)せば。唯(ただ)とは簡持(かんぢ)決定(けつじやう)の言(ことば)なれば。他の行(ぎやう)に簡(かん)んでたゞ念佛(ねんぶつ)をとる。能(よ)くとは堪能(たんのう)と申(まを)して。我(われ)等(ら)の機(はたら)にたへあたふ。凡(およ)そ報恩(ほうおん)の行(ぎやう)にも種々(しゆしゆ)ありて。聖道淨土(しやうだうじやうど)また同(おな)じからず。聖道(しやうだう)に於(お)ては夫(それ)々(それぞれ)作法(さくぱ)がありて。先(まづ)「流轉(りゆうてん)三界(さんがい)中(ちゆう)恩愛不能(おんあいふたへん)斷棄(たんとく)恩入(おんにゅう)無爲(むゐ)眞實(しんじつ)報恩(ほうおん)者(しや)」とて。仲(な)々(それぞれ)我(われ)ら(ら)の根(ね)機(はたら)にたへあたはざるなり。今(いま)稱名報恩(しやうめいほうおん)の義(ぎ)は能(よ)く我(われ)ら(ら)が機(はたら)に堪能(たんのう)し。しかも能(よ)く佛意(ぶつぎ)に契當(けいとう)す。常稱(じやうしやう)とは日夜(にじや)不斷(ふたふた)に行住坐臥(ぎやうぢゆうざが)をわらばず。寤(さ)ても寐(ね)めてもへたてなく。南無阿彌陀佛(なむあみだぶつ)を稱(たが)ふべし。即(すなは)ち憶念(おくねん)の心(こゝろ)つねにして御恩報(ごおんほう)するたもひあり。如來号(にょらいごう)とは如來(にょらい)の御名(ごな)にして。南無阿彌陀佛(なむあみだぶつ)これに至徳(しやうとく)の尊号(そんごう)と云ふ。大悲弘誓(だいひくけいせい)恩(おん)とは阿彌陀如來(あみだにょらい)無窮(むきゆう)の大悲(だいひ)を以(もつ)て。我(われ)ら(ら)を濟度(さいた)し

たまふ御和讃に「弘誓の力らをかふらすばいづれのとさにか婆婆をいでん。佛恩ふかくたもひつゝ常に彌陀を念すべし」惡業煩惱の身でありながら婆婆永劫の苦をすて淨土無爲を期すること彌陀大悲の極まり扱此二句を四修に配すれば唯能とは無餘修無間修なり唯の字は餘縁をからず唯稱名念佛の一行にして別に餘行の間雜することなし御開山は化土卷に「專修者唯稱念佛名離自力之心」と仰せらる常稱は命のあらんはざりは稱名念佛すべきものなり長時に慈恩を報ずるは長時修なり次に報恩は恭敬修にして恩をれもふゆへに恭敬なり人を知らざれば人に非ず鳥に反哺の孝ありとは訓蒙の語にして三才の童子も是れを知る畜類なは恩を報ずるの例古今澤山あり昔し晋の代に郭文と云ふ人ありけるが或日山中にて一匹の虎に遇ふ口を開ひて郭文に向ひ哀願するものゝ如し郭文乃ち見るに口中に骨横はる此故に苦しむとしられたるゆへ手を以て彼の骨を抜き取ければ虎喜んで去る翌日彼の虎一つ鹿を持ち來りて郭文に與へて飯へる又漢の

武帝は混明池に御幸ありしが池中に一匹の大鯉ありて釣を呑んで苦しむ武帝之れを見たまひ從者に命じて其釣を抜きて放たしむ其夜武帝の夢に鯉魚來りて恩を謝す次の日帝又御幸ありければ彼の鯉魚明月珠を脚み岸に置ひて去る是れを御消息の中には混明の鯉魚は寶珠を武帝にささぐとあり又近くは播磨國清水寺觀音堂の後に犬寺と唱ふる一字あり主の恩を知りて難を救ひたる由來元享釋書に委しく出たり畜類なは如是況んや人間に於てたやこれに依て龍祖智度論の中に「知恩者大悲之本乃至不知恩者其畜生」と云へり今念佛の行者佛の大恩を蒙むる報じても報すべきは大悲の佛恩身を粉にしても骨を摧きても信心すでにぬんひとはつねに佛恩報すべし扱この稱名報恩の義は大悲傳普化具成報佛恩のいはれにして自信教人信の自力々他満足して佛化助成の用らさとなる御和讃に「佛惠功德をほめしめて十方の有縁にさかしめん信心すでにぬんひとはつねに佛恩報すべし」又「信心の智恵にいりてこそ佛恩報ずる身とはなれ」常行大悲の徳なれ

ば功徳は十方にみづるなり。今信後の稱名に就て略して十義を辨せば一に佛化助揚の徳。これ行者の稱名なれどもしらすく佛化を助成することになる。蓮如上人の御言に「愚夫愚婦のうれしやありがたやとよるこぶを閉て人が信をとるなり」との玉ふ。二に咨嗟同等の徳。これは十七願におひて十方恒沙の諸佛如來が皆共讚嘆无量壽佛とて阿彌陀如來の威神功徳の不可思議なることをひろく讚め玉ふ。念佛の行者が口に唱ふる稱名も此諸佛の咨嗟讚嘆と同等なりとある。銘文の御言に「南無阿彌陀佛をととなふればはめれたまつることばになるなり」と仰せられた。三に罪障懺悔の徳とは同じく銘文に「南無阿彌陀佛をととなふればすなはち無始よりこのかたの罪障を懺悔するになるなりと申すなり」と仰せられた。即ち念々稱名常懺悔なり。四に發願廻向の徳とは南無阿彌陀佛をととなふれば即ち安樂淨土に往生せんと思ふになるとなり。五に莊嚴淨土の徳とは阿彌陀の三字に一切善根をれさめたまへるゆへに名号をととなふれば淨土を莊嚴するになるとしるべし。

となり。即ち御和讃に「兆載永劫の修行は阿彌陀の三字にれさまれり」此積徳の大行を稱念するは淨土莊嚴の徳にそなはるなり。六に諸佛護念の徳とは御和讃に「南無阿彌陀佛をととなふれば十方無量の諸佛は百重千重圍繞してよろこびまもりたまふなり」七に消除災害の徳とは御和讃に「南無阿彌陀佛をととなふればこの世の利益さはもなし。流轉輪廻のつみさへて定業中天のぞこりぬ」八に轉重輕微の徳とは御和讃に「一切の功徳にすぐれたる南無阿彌陀佛をととなふれば三世の重障みなながら必らず轉じて輕微なり」九に聖衆護持の徳とは御和讃に「南無阿彌陀佛をととなふれば梵王帝釋四天王天神地祇も悉くよるひるつねにまもるなり」十に諸魔恐怖の徳「南無阿彌陀佛をととなふれば他化天の大魔王守護のちかひを立てれば眷屬の諸魔は勿論のこと天地にみてる惡鬼神みなことごとくくたをるなり。これ願力不思議の信海より流出するの稱名なれば其實无量不可思議の徳あり。此稱名修し易しく行しやすし。機に相應したる易行なれば行住坐臥に間斷なく。夜の寐

覺の内からも念報すべきものなり。一日も娑婆に逗留の間たは報恩の心掛
け大切に喜ぶべきことなり。

天親菩薩造論説

是よりは七高僧の第二祖天親菩薩の自行化他の徳化を明したまふ。其中今
の一句は淨土論と云ふ書物を御製作あそばされ。御自身も无碍光如來に歸
命し他力廣大の無碍の一心を顯はして御座の我らが先達をなされた菩薩
なるゆへに御和讃にも釋迦の教法ははけれど天親菩薩はねんごろに煩惱
成就のわれらには彌陀の弘誓をすくめしむと仰せられて他力往生の深義
をひらひて煩惱成就のいたづらものが御淨土参りの道筋を御念頃に御示
しなされた高僧ぢや。扱この天親菩薩は龍樹菩薩の後なれば佛滅後凡そ九
百年の頃に北天竺の丈夫國と云ふ處に御誕生あそばされた。御壽命は八十
年とある。此天親菩薩は地前の菩薩にして十回向滿位四善根の頂上にて初

地の隣りあり。元來菩薩方は衆生濟度の爲めに御出世なさるゝ故に其機に
のぞみ時に隨ふて地位を示したるもふなり。故に内証にいたりては凡夫の思
義すべきことにあらず。先づ天親とは梵に婆藪盤頭と云ふ。翻譯には天親と
譯し。新譯には世親と譯す。是れ親達が天に祈りて求められた御子なれば天
を親とすと云ふ意ろで天親といふ。扱この天親菩薩に一人の兄公がましま
す。卽はち無着菩薩と云ふ。此兄の無着菩薩は初めから大乘を學んで御座る
に天親菩薩の方は小乗の法を學んで常に大乘を誇らせられた。然るに兄の
無着菩薩大いに心配なされて。態々天親の處へ使を立てて仰せらるゝには
此頃兄の無着大病にかゝり本服も如何と思ふ程に生前は一度逢ひたく大
儀ながら急に來て呉れよとありければ天親菩薩も兄の大病と聞て取りあ
はす使ひの者と同道して本國へ來飯りあされて兄公に面會しさて此度は
御大病の由承り飯國いたしました。が御容子は如何と御尋ねなされると無
着菩薩の仰せには能くも戻りて下された。此頃中は大病で難漚つかまつる

其病根は其方ゆへに起りた病ひで斯くは煩ふと仰せられたれば天親菩薩
 それを聞て扱ては御氣の毒に存する次第私しゆへの御病氣とは恐れ多き
 ことぢやが全体何故に私しの爲め御煩ひなさると申し上げたれば無着菩
 薩は形を改めさればなり外でもなひが汝が多年小乗を學んで大乘の妙理
 を知らず刺へ大乘を誹謗す其惡業によりて永く地獄の苦を受くるに間違
 ひなし夫れが不便に思はれてかくの次第ぢやゆへに何卒今日より回心懺
 悔して大乘の妙理を聞きわけ之れを信じてくれよと涙ながらに仰せられ
 ければ天親菩薩これ聞て根が利功發明なる御方ゆへに大ひに驚ろかせ
 られたると無着菩薩念頃に大乘の妙理を御説明なさると天親菩薩も大
 切に耳傾けて聽聞あらせられ立處に大乘甚深の妙理をあきらめさせ玉ひ
 斯程有難法門を今迄知らざることの惜しや殘念や刺へ此法を誇りしこと
 の淺間しよと先非を悔んで回心懺悔し恐れ多い謗法の大罪を造りし申
 譯とて御自身の舌を切うとなさると無着菩薩の仰せにはたとひ千

枚の舌を切りたりとも謗法の大罪はつくなひがたし是迄誇りたことが恐
 ろしくば其舌を切るよりも今迄誇りし其舌で是より大乘の法を讚嘆しこ
 の大乘の妙理を弘通せられしならば反りて滅罪の懺悔に叶ひ自利を他滿
 足なるべしと御親切なる仰により夫より大乘の妙理を自からも信じ人に
 も教へ種々の論を造りて讚嘆し玉ふ初め小乗にありしとき五百部の論を
 造り今又大乘に入りて五百部の論を御製作なされしにより世に千部の論
 師と申し奉るかくの如く數多の論部を御製作ありたれども最後に淨土に
 皈して淨土論を造りて一心皈命の旨をあらはし彌陀の本願を讚嘆し玉ふ
 今造論説と云ふは正しくこの淨土論のことなり

歸命無礙光如來

前にも述ぶる如く天親菩薩は千部の論師と云はるゝほどの御方にして御
 製作あらせられた論部も澤山なることぢやが今は正しく往生淨土論のこ

とにして御自身も往生を願はせられ。又他をも御化導なされ。末世に至る今
 日迄も御製作の論によりて御化益を蒙る。誠に難有仕合である。扱今の一
 句は浄土論の最初に「世尊我一心皈命盡十方無礙光如來願生安樂國」と御自
 身自督の詞を以て世尊に敬白したまひたる御文なり。夫れは如何と云ふに
 世尊とは釋迦如來をさすの言。何故釋迦如來を世尊と申したてまつると云
 ふに娑婆の化主にして世間の爲めに尊重恭敬せらるゝゆへに。如來を世尊
 と名けたてまつるなり。皈命無碍光如來とは。即ち天親菩薩の御自督の御
 詞にして無礙光如來とは阿彌陀如來のこと。私しは阿彌陀如來に皈命した
 てまつりて。極樂の往生を願ひますると云ふ御意なり。時に此浄土論は一
 心より開ひて五念門をあらはし。この五念門の行に依りて五果を得ると云
 ふことを明し玉ふが一論の始終ぢや。其五念門とは禮拜讚嘆作願觀察廻向
 の五念門。これほもと一心の具徳にして合すれば一心開けば五念。丁度にさ
 れば一つのこふし。開けば五本の指となるごとく。一心も五念も別なもので

はなひ。扱かくの如く一部の始終が五因五果の明し振りぢや。故に曇鸞大師
 の御註釋から窺ふと。今の世尊我一心の文にも三念門が具はると御意あら
 せられた。即ち皈命は禮拜門。盡十方無礙光如來は讚嘆門。願生安樂國は作
 願門。この御釋から云へば。歸命はすなはちこれ禮拜門にして三業に發動し
 たる五念の行相なれども。天親菩薩の御自督から云へば。矢張り初起の安心
 にして一心皈命なり。故に御和讃に「天親論主は一心に無碍光に皈命す。本願
 力に乗すれば報土にいたるとのべたまふ。盡十方の無礙光佛。一心に皈命す
 るをこそ天親論主のみことには願作佛心とのべたまへ」此願作佛の一心が
 自力。他圓滿の利他眞實の信心として。是すなはち他力なりとあらはした
 まふ。扱無碍光如來とは無碍の名義。十二光の下に辨する如し。盡十方無碍光
 とは。源と阿彌陀經に「照十方國無所障礙」とあるを觀經の「光明遍照十方
 世界念佛衆生攝取不捨」とある文に取り合せて。彌陀の御光明は。盡十方を
 遍照したまふにさはりなきがゆへに。無碍光如來と申すなり。此无碍に付て

二意あり。一には圓融无碍二に自在无碍なり。彌陀の光明には大自在の力用を具へてまします。故に自由自在に徳化をあらはす。世間に於ても障礙とてさはり邪魔のなきときは何事にも自在なるが如し。此自在のゆへに能く衆生心中に入りこみて障礙なきなり。依て銘文に「無碍光佛」と云ふはさはるることなしとなり。衆生の煩惱惡業にさほられざるなりとの玉ふ。これ自在无碍の徳なり。二に圓融无碍とは此の光明衆生心中に入りこめば即ち煩惱のこほりどけ。菩提の水となりて障り多きに徳多し。罪障其儘融即せられて功德の体となるに碍りなし。喩へば鐘を鑄る時は煙管や管しや金物細工の品々を鑄物師がたうらにかけて。其金物をとるけさせて一つの釣鐘と仕上る如し。之れを圓融无碍と云ふなり。然れば彌陀如來の光明の徳用に圓融自在の徳あるゆへに盡十方无碍光如來とは申すなり。今天親菩薩无碍光に飯食して安養淨土の往生をねがひ我れらの先達をしたまふなり。

依修多羅顯眞實

光闡横超大誓願

扱この二句は天親菩薩が往生淨土論を御製作ありて三經の眞實によく念佛横超の義を顯はし玉ふことを述べらるなり。依とは依據の義とて手なすけにすること。又因依の義とて下地にふまへること。此依について論註の御釋に三依を明し玉ふ。何れの所にか依る何の故に依る云何が依と依の一字について三通があり。何れの所に依るとは修多羅に依るなり。何の故に上るとは。如來は即ち眞實功德の相なるを以ての故に依るなり。云何が依るとは。五念門の行を修して佛と相應するがゆへに依ると仰せられたり。次に修多羅とは梵語にして爰に契經とも法本とも譯す。十二部經中の佛の直説を修多羅と云ふ。今は正しく淨土の三部妙典のことなり。此三部の妙典と即ち佛の直説。如來の金言にして大乘修多羅なれば天親菩薩はこの三部經に依り玉ふなり。扱この經と云ふ文字は全体經緯と云ふてたて糸と云ふ文字な

り布を織るとききのたて糸と同じこと。一反の布も一匹の布も皆このたてにぬき糸を以て織り上げるのちや。今も経はたて糸の如く。其中に御説きなされた。浄土参りの御謂ればぬき糸の如く御經のたてが教行信証のぬき糸を以て。獨留此經と未代まで此の浄土参りの御謂はれを相續して織上るなり。如何にもたてと云ふものは大事なものぢやたてがなければ織物は出来ぬ。今も如來の説法佛の金言が無くば我れらが往生は叶はぬなり。顯眞實とは三部經の眞實を顯示し玉ふと云ふこと。即ち御和讃に「釋迦の教法ははげれど。天親菩薩はねんごろに。煩惱成就のわれらには。彌陀の弘誓をすゝめしむ」と仰せられて。三經處説の眞實功德を浄土論に開顯して我れらに彌陀の弘誓をすゝめ玉ふなり。扱この眞實とは即ち眞實功德相なり。これ彌陀如來成就し玉ふ處の功德の眞實なることなり。此れを高祖は「眞實功德」と云ふ。誓願の尊号なり」と仰せられて。南無阿彌陀佛の名号は顛倒ならず虚偽ならず。清淨眞實より生起して法性に依りて二諦に順ず。然れば眞と云ふは偽妄

なきことゝる實と云ふは虚假を離るゝことゝるなり。其彌陀所成の眞實功德を信すれば。如來の眞實功德が行者の眞實功德となる。次に光闡とは光は廣大の義闡は開闡としてひらきあはすと云ふこと。横超は前に辨ずるが如し。三代目の善知識覺如上人の御言に「たゞ男女善惡の凡夫をはたらかさぬ本形にて。本願の不思議をもてひまらるべからざるものをひまれさせればこそ。超世の本願とも。横超の直道とも。きこへはんべれ」と仰せられたり。即ち臨終一念の夕。大般涅槃を超証し。一超彌陀安養界。一念の御約束で横超斷四流と生死の海を横に超へて。佛果に至ることを横超と云ふ。たてから見てもよこから見ても。前後左右からながめても。鰻魚節と名がついたら。首尾みななま。臭ひ如く。悪人凡夫と名の付た我れらなら。頭の頂から足の先まで尋ねても。佛けに成られる筈のなひ。永不成佛の我れ人を。若くは不生者の誓ひを立て。必ず安養へ往生を遂げさせるとある本願ゆへに。横超の大誓願と申すなり。夫れに付て。或る宗の寺に難産の御符を出す。近國遠國に其名聞へて。繁昌い

たす其初めの由來を尋ぬるに或る家の内儀が懐胎して臨月に至り二日も三日も腹痛甚しくて難儀をいたす其時彼の僧招かれて種々に加持祈禱を行へども更らに其驗しなし然るに段々婦人の容体を察して暫く工夫をこらし先づ盥へ湯を汲ませて其中へ二匹の蛙を入れさせ彼の婦人を盥の中へ入れたれば忽ち産氣催ふして産れたは三尺ばかりの蛇にてあつたと云ふこと夫より婦人も苦痛が休み助かりし由を傳へ聞く懐胎の女蛇身をはらひは能く悪業の所感なれども件の僧これを察し工夫を以て産るべからざるものを生れさせたは大なる手柄と云はねばならぬ今恐れながら阿彌陀如來の本願も智者や聖者のやうな何れの道からでも佛けに成り玉ふ衆を往生させ玉ふのなら格別の御手柄ともならぬが各々や我れらの如き十惡五逆の惡人五障三從の女人蛇蝎姦詐の毒蛇惡龍の如くもある吾人が百寶莊嚴の蓮花の上へ一念皈命の御願一つで往生遂げさせて下さる故に超世の本願とも横超の直道とも名くるなり生るべからざるものを生れさ

す阿彌陀如來の御手柄を淨土論にあらはして我人に御催促下さるゝのが今正信偈の御謂れなり。

廣由本願力回向 爲度群生彰一心

扱廣とは天親菩薩の自利々他の御心の廣大なること由とは彌陀如來一切衆生の爲めに本願を立て往還の二廻向を衆生に與へたまふ此回向力によりて天親菩薩もまた一心皈命したまふとなり御和讃に『南无阿彌陀佛の廻向の恩徳廣大不思議にて往相廻向の利益には遠相廻向に廻入せり』どの玉ふ扱この本願力とは所謂横超の大誓願力なり次に回向に就ては先づ安樂集に六種の廻向を明したまふて云く然るに回向の功六に越へず何等をか六とす一には所修の諸業を將て彌陀に回向し既に彼の國に至りて還て六通を得衆生を濟運す此即ち道に住せざるなり二に因を回して果に向ふ三には下に廻して上に向ふ四には運を回して速に向ふ此すなはち世間に

住せず。五には衆生に回施して悲然を以て善に向ふ。六には回入して分別の心を去却す。回向の功只この六を成すとの玉ふ。今四種を立て辨ん。一には自力回向。二に他力回向。三に往相回向。四に還相回向なり。一に自力の回向とは回轉趣向として自の善根功徳を回轉して向ふ處あるゆへに回向と云ふ。此時は丁度船の楫の如く。千石船に一抔積んである荷物が楫一つの働らさで西へも東へも右へも左へも思ふ處へ楫の力らで向はせる如く。自力の回向は過去より積み重ねたる功徳善根の荷物を此の回向の楫の力らで。人天にもせよ三乘にもせよ向はせて行くのちや。故に回向の二字をまはしてむかうと讀めば能く分る。二に他力の廻向と云ふは廻らし向はしむると讀ませて廻施歸向と云ふことになる。阿彌陀如來の兆載永劫に積功累徳と御成就なされた大善大功徳を衆生に廻施とはどこしたまふこと。全体御座の我れ人は証りの方へ向ふはいやがり。迷ひの方へばかり向て行く。飛で火に入る夏の虫。しかるを如來の御慈悲から極樂の方へ向はせて下さるのが向の字の

意の論証などの思召が利他の廻向を主として始終このころを御勸め下さる。仍て善導大師も「言南无者即是皈命亦是發願廻向之義」と仰せられて皈することゝるになりたのは阿彌陀如來が助けずば救はずとある大願業力の御慈悲の力らで背中を向けた我れられば極樂の方へ振り廻はして下さる。其の振り向ひた處が即ち往生廻向と云ふて極樂往生の姿たちや還相廻向のときは還て向はしむと云ふことゝるで。此の廻向の廻の字が字書の上には還なりとありてかへると云ふことになる。信の卷に論註を引て「還相廻向と云ふは已れが功徳を以て一切衆生に廻施し作願して共に往生する生死の稠林に入りて一切衆生を教化して共に佛道に向ふと仰せられた御和讃に「安樂淨土にいたるひと五濁惡世にかへりては釋迦牟尼佛のごとくにて利益衆生はきはもなし」と示し玉ひ極樂へ参りて娑婆世界の有様を見れば跡に残た妻や子や生々世々知り合ふた友達が足の下に踏へて居る火の車を何ともれもはず。地獄の因ねを待つのが不便さ。丁度小供が氷の上を

渡すのを親が見て居ると同じこと遊んで居る子供は頑是なく氷の破れる
 ことも自身が水に溺れることも前後の考へもなく夢中に成てれるが傍ら
 に見る親心では今も落るか早れするかど氣をもひが如く其あやうひ有
 様を見ては不便さに堪へられず大慈悲をねとして衆生濟度しゆじやうさいどに立ち還るを
 還相廻向くわんさうくわうと云ふ是れも吾が働らさばかりでは出来ぬが還て向はしむことよ
 むのは阿彌陀如來が廿二の願の御力ごりきらで還相の働らきをなさしめ玉ふ往
 還廻向くわんさうくわう由よし他力たうりきでゆくもかへるも如來の御力ごりきら御和讃ごわさんに彌陀あまたの廻向成就くわうじやうじゆし
 て往相還相くわんさうくわんさうふたつなりこれらの廻向くわうによりてこそ心行しんぎやうともにはしむなれ
 とあれば此の往還くわんさうの廻向くわうをなづけて他力たうりきの廻向くわうとは申すなり此本願力このほんがんりきを
 踏まへて往きつ戻りつするゆへに廣由本願力くわんさうほんがんりき廻向くわうと仰せられた即ち阿
 彌陀如來あまたにょらいの本願の御力ごりきらによりて行者ぎやうじやが往還くわんさうの働らきをなす夫つまに付て昔
 し奥州おくしゆに佐柄木さへらぎの長氏ちやうぢと云ふ角力かくりき取りがありて一度京きやうへ登り關せきになりた
 ひとて遙るばる上京じやうきやうの途中ちゆうちゆう江州えしゆ越川こしがわの邊りへらで日暮ひぐさになり宿しゆくが取りたひと

思ふて居る處へ年頃十七八の大きな女が水を一荷擔ひとかりふて行により彼の女
 に聲をかけ何卒なにとぞ今宵けふ一夜泊めて呉たままいかどたのんだれば如何いかんにも止めて
 上げましょふ私わたくしと一處いっしょにたいでなされと手を取りて脇わきの下へ挟くわみたれば
 丁度ちやうどかすがひで打ち付けられたやうに取ることも引くこともならぬ今いまの
 角力かくりき取りも大に驚おどろいて女の面おもてをじろくと詠よめながら伴たづれ立て行きたるに
 さお爰こゝが私の家うちぢや程ほどに遠慮えんりよも氣兼きかも入りませぬ上りてゆるりと休やすまつ
 しやれど今の手てを放はなしたれば角力かくりき取りの腕うでがしびれてねばへのないやうに
 なりてしもふた扱あつか暫しばく立つと御前ごぜんへは全体ぜんたい何處どこの人ひとぢやと尋たずねるゆへ私
 しは奥州おくしゆの角力かくりき取りであるが京きやうへ登りて關せきを取りたひと思ふて遙々はるか出掛
 けて参まゐりたと申したれば女は笑わらふて御前ごぜんのやうな弱よわひことでは京きやうの關取せきと
 りには逆さかもならぬによりも少し力ちからを付けて行かつしやれ夫つまれには
 私わたくしの處ところに十日程じゆっぴつほど逗留とどまりしていたら少しは力ちからも付くであらうと云ふ故ゆゑ其言そのことば
 にしたがふてまこと力ちかららの付くことなら十日が廿日でも三十日も御世話ごせわ

になりたひものど。夫より此家に居ること定めればやがて今の女が夫なる握り飯を拵へてさあ是れを喰へなされと云ふ故受け取りて喰ふとするに何が扱て大方なる女が力ら一杯に握り堅めた飯ぢやゆへ中々喰ひ付くことが出来ぬ大きな角力取りが其握り飯を今日も喰ひ付き明日も喰ひ付きして漸く七日目に喰ひ終りたれば女がサアもう宜しい京へ登らしやいと云ふゆへ早速上京して角力を取つた處がすさまじい力らに成りて大きな手柄をしたと云ふことがある。何んと大力なる女の握りた飯を喰ふたれ蔭げで長氏は大力に成つたと云ふが今恐れ多いことなれど阿彌陀如來の大願業力で握りかためた南无阿彌陀佛を御助け候へと喰ひ付き往生一定と呑み込んだ行者には阿彌陀如來の御力らを譲り與へて下さるゆへに如來の願力が吾が物になりて寂靜无爲の都まで耻かゝず皆違普賢の大悲の徳晴がましい働らきをする住合せ者は信心願解の身の上ぢや依て回向の向の字を向ふと訓すれば御座の我れらが定散自力をひるがへして回他

力に向ふこと。向化土卷の御言に定散をひるがへして報國に入ると仰せられ御和讃には「定散諸機各別の自力の三心ひるがへし。如來利他の信心に通入せんとねがふべし」と御意あらせられた。此時は自力のこゝろをひるがへして弘願他力に向ふことを廻向と云ふ如し是いろくの譯はありても何れにもせよ此度は阿彌陀如來の本願力を離れては獨り立はならぬ。彼の水の中の魚が水中なれば自由自在に動きはたらけども水を離れては大きな鯨でも往き來の働らき叶はぬ如く。今も御座の我れ人は阿彌陀如來の本願力の水を離れては后へも前へも往かれぬほどに。此度は如來の本願力回向を深く信じて淨土へ參れとあるが今の御勤めぢや天親菩薩も此本願力回向によりて廣大無碍の一心を顯はして各々や我れらを彌陀の淨土へ導き玉ふなり。

次に爲度群生彰一心とは天親菩薩の「世尊我一心皈命盡十方無礙光如來願生安樂園」と仰せられたは。即ち此一心で我れらが彌陀の報土へ往生を遂

ぐる因なりと知らせたまふ御教化ぢや此の思召で爲度群生影一心と仰せられて各々や我々が生死の海に沈みはて居る故に夫れを不便に思召して何卒助てやりたひとの御意から此一心皈命をあらはして淨土論を御製作をばし西方の往生を御勸め下されたが天親菩薩なり然るに論の上では我一心と仰せられて御自身の淨土參りを願はせらるゝ爲めに一心に彌陀に皈命すると仰せられた夫れを只今の正信偈では群生を度せんが爲とありて我れらを御濟度のために一心をあらはすとされたが如何と云ふに先輩の解釋によりて五義を辨せん元より天親菩薩の御本意が衆生濟度の御了見ぢや衆生無邊誓願度と云ふが四弘誓願の第一にして何れの菩薩でも迷ひの衆生を濟度しようとするが定法なれども是れには先づ御自身の往生が調はねば人を助けることは叶はぬ故に大經に「速成正覺」拔諸生死勤苦之本」と説かせられて御自身の正覺を成就してから衆生を御濟度なさるゝ御自身の正覺の成せぬうちに人を濟度しようとするれば三つ子が大

人を抱きかゝへする如く二人ながら倒れねばならぬ故に御經說の中にも喩を設けて人が河へ落ちたるとき水練を知らぬものが飛込で助けんとすれば二人共溺れて仕舞ふ故に速やかに舟を求め舟に乗りて救へば二人共無事に助かる今も丁度其如く人を極樂へ導きたひと思ふときは其身が弘誓の舟に乗らねば両方が沈でしまふ速如様は信なくして人に信を取れどは物を持たずしてやろうと云ふが如く人信用せぬと仰せられた此御言は大切に聽かねばならぬ説聽共に大事なり自信教人信の道理なれば天親菩薩も御座の我れらが生死の海に沈みて居るを助ける爲めにむさど飛び込むやうなことでは諸共に沈まねばならぬゆへ先づ御自身に一心皈命願生安樂國と速やかに西方の往生を願はせられ者摩多毘婆娑那方便力を成就して衆生濟度をしようと思召す所ぢや故に御自身の願往生心が取もなはさず我れらが爲めの御慈悲ゆへ爲度群生影一心と仰せられたは一義次には凡夫は愚かなもので極樂參りの正因正業を知らぬゆへに此度の淨

土參りは御助け候へど二心なく彌陀をたのむ御了解一つで必ず淨土に往生するに間違ひないと云ふことを知らせん爲めに先づ論の最初に一心皈命をあらはして往生の正因を知らせたまふ天親菩薩の一心皈命が其儘我れらの御手本となるゆへ爲度群生彰一心と仰せられた三には阿彌陀如來の第十八願に三信と御誓なされた即ち願文に「至心信樂欲生我國」とあり又觀經にも「一者至誠心二者深心三者回向發願心具三心者必生彼國」とありて三通りが説てある故に信心が三つあるやうに思ふかと思鈍の衆生に解了しやすからしめんが爲めに取り誤りのないやうに一心と仰せられた爰を御開山の御文に「阿彌陀如來三信を起し玉ふと雖も涅槃の眞因はたゞ信心を以てす此故に論主三を合して一心と知らせ玉ふ」と仰せられた是れ三信を合して一心として知らせたまふは論主の御手柄なれども元來三信即一の謂れにして至心信樂其言異なりと雖も其心るは只一なり何を以ての故に三信已に疑蓋雜はることなきがゆへに眞實の一心これを金剛心と

名くと仰せられた然れば願文には三つとあれどもたゞ御助け候への一心に疑ひはれたのが金剛の信心ちやとある四には行者の信心は全く如來の本願力からあらはるゝことを知せん爲めに一心と仰せられた故に高祖は證卷に「廣大無礙の一心を宣布して普く雜染堪忍の群萌を開化すと仰せられた廣大無礙の一心と云ふときは自力の胸から發起したのではなひ全く如來選擇の願心より發起するので此他力の願力から顯はれたのでなければ廣大無礙とは云はれぬ然れば今の一心は本願成就の信心ちやと云ふことを知らせて下さるもへに爲度群生彰一心と云ふ第五義は願生の者をして多想の念を遮せんが爲めなり論註の御釋に「心を相續無他相續」と仰せられて如來の本願を信するころが念々相續して外の想ひの雜らぬを一心と云ふ已上かくの如きの譯けがあるによりて天親菩薩願生をおさへて御座の我れらが爲めちやと仰せられた詩三百一言以是復之三百篇の詩經も「思無邪」の一言に攝まる天親論主の御教化は一心皈命の一言に治まる本

願の三信も次第していへば至心と信樂と欲生の三なれども唯行者皈命の
一心となる。

歸入功德大寶海

是より已下は往生淨土論に依りて近門大會衆門宅門屋門園林遊戯地門の
五果の相をつづめて御催促下さるのちや此五果とは禮拜讚嘆作願觀察
回向の五念門の因に依てうる果相なれども今は夫れを取り越して現在に
約して説くが御當流の平生の御勸化ちや三法展轉因果同時と云ふ如く因
の中に果の相を成就してあるが本願圓頓の御法りちや喻へば柿のたねを
割りて見れば其たねの中に柿の二葉の形ちがある如く五念門の因を成就
したときに早や五果の相たが具はりてある扱この五因五果の法相は廣門
の開ひた上での謂れにして合すれば客門一法句なり即ち一心皈命から
開けた五念なれば合した上で云へば三利圓具の一心を以て三利満足の一

果をうる此一因一果より開ひて五因五果の徳相を顯はしての御勸めが今
の偈文の意ぢや先づ皈入とは皈向趣入の義で此阿彌陀如來本願力廻向の
御慈悲を信ずることよりになりて迷ひをふりすて極樂へ向ふことよりが含ん
である歸とばかへると云ふ文字なりかへるとは古郷へ向ふことぢや今阿
彌陀如來は吾れらが爲めの親穰其親の御座る極樂なれば吾が爲めの親里
故郷ぢや其親里へ歸りたいと思ふ心のついたが願文では欲生我國とわが
成就文では願生彼國とあり歸去來魔障不可停と善導大師の御教化の如く
是れは晋の陶淵明と云ふ人が彭澤と云ふ處の代官役を勤めて居れたが上
役に無禮をしてどがめられ扱てく奉公はつらひもの緩かな俸祿の爲め
に腰を折り首を下げるは否ぢやと云ふて奉公を辭し古郷へ歸る時に歸去
來由圖方荒の賦を作りて古郷へ皈られた今御座の同行も无始より已來三
途に迷ふて三界の奴となり惡業煩惱のためにかり使はれた愚かものが皈
去來魔障不可停と今と云ふ今こそは氣が付て阿彌陀如來を信じ極樂淨土

へ飯へるこゝろになりたのが飯人ぢや。即ち極樂浄土の親里へ歸るのが
 今の歸の字の意。左りながら其歸るのが並み大體では歸へられぬにより
 て天親菩薩は廣大无碍の一心を顯はして自力を捨て、唯だ一筋に歸命盡
 十方無碍光如來の御願解に基て往生せよと仰せられた。古歌に「あしの葉を
 ふくませぬたる雁がねの啼く子は親の思ひなりけり」とある。彼の雁と云ふ
 鳥は賢い鳥で夏の曇ひ時分は北の方へ往て暑さを凌ぎ冬の寒さには南
 方へ戻りて寒氣を凌ぐ。其北國に往來する道に雁門と云ふ處がありて其處
 には鷺が多く居る故に恐しい處ぢや。仍て此雁門を夜間に通るに毎年通り
 なれた雁は鷺の寐軛を知りて居る故。其處通る間には泣きもせず羽たよき
 もせずひそかに通れども其年北國で生れた子鳥は其分けを知らぬ故。や
 もすれば聲を出して啼ては鷺に取らるゝ。依て親鳥が雁門を通る時はあし
 の葉を子鳥に喰はへさせ。これは大切のものぢや。落さぬやうに口にくわへ
 て故郷へ持て歸れと云ふ。依て子鳥が是れを落すまいとて口を開けず聲も

立てずに差なく通ることぢや。仍て啼く子は親の思ひなりけりと云ふ。此の
 意。今も丁度其如く極樂浄土へ初めて歸る子鳥と云ふは御座の同行者
 人の身の上親鳥と云ふは天親菩薩や御開山。此處と云ふ此處は鷺の住家
 りまだ恐しい。地獄の上の一足飛び衆生浄土のたゆみ渡り。御通りなされた親
 鳥は其恐しいことを能く御存じなれども初めて参る御座の君々其恐し
 さを知らぬゆへ。今は一心皈命南無阿彌陀佛のあしの葉を撒ませて御助け
 候へとくはねて参る。必ず自力の口を放してはならぬぞ。難行難證の羽たよ
 たるをせぬやうに一心にたのみ一向に信じて参れとあるが今の御教化
 や其あしの葉を撒ませて下さるが皈命盡十方无碍光如來ふくんで歸へる
 のが歸向趣入の只今の御教化他力の本願に入り込んだが入の字の意。大
 に功德大寶海とは論の偈に「願佛本願力。遇无空過者。能令速滿足。功德大寶海。」
 とあり。御和讃に「本願力にあひぬれば。びなしくすくまひとをなき。功德の實
 海みちくして。煩惱の濁水へだてなしと。仰せられた。又一念多念。離文に「身徳

とまふすは名号なり。大寶海はよるづの善根功徳みらさばまるを海にたとへたまふ。この功徳をよく信するひとのこころのうちに速かにとくみられたりぬとしらしめんとなり」とあれば功徳とは名号法のこと。寶海とは喻へなり。即ち南無阿彌陀佛の六字の名号の功徳廣大にして大海のきはまりなきが如しと喻へ玉ふなり。左りながら如何はと寶の海でも中へ入らねば其實は取れぬ。依て今歸入するとは寶の海へ入り込んだ味ひなり。喻へば大家に三十年も奉公して居る番頭は寶を唯だながりて居るばかり。吾が物とはならぬ。其家の主人なれば有り。丈の財寶を悉く自身のものとして思ふまゝに受用する如く。喻へ六字の結構なる功徳の價直は知りても覺ても自力の番頭根情では我が物とはならぬ。然るに一心歸命の御領解一つで此かすがきりもなき不可稱不可説不可思議の大善大功徳を身に得るゆへに功徳は行者の身にみてり。と仰せらるゝなり。

必獲入大會衆數

前席に於て聽聞に及ぶ如く功徳の大寶海と云ふは本願御成就の南無阿彌陀佛の名号のこと。此本願に皈入するものは必ず大會衆の數に入るとある。御言もや。扱この必と云ふは決定の言にして間違ひのないこと。大會衆の數に入ると云ふは五果の第二大會衆門で是れが大經でいへば彼佛初會聽聞之數と説かせられ。御和讃では彌陀初會の聖衆は算數のおよぶことと云ふ。淨土をねがはんひとはみな廣大會を歸命せよと仰せられて阿彌陀如來は正覺成就の初めから初會の大衆が數限りもなく御座なされた。其より後ち東方恒沙の佛國より無數の菩薩ゆきたまふ。自餘の九方の佛國も菩薩の往觀みなれたなしとある。からは十方の淨土から恒沙塵數の菩薩方が雨の降るはと往生なさるゝ。これを大會數と云ふ。此大會數のかずに入るが難有こと。で阿彌陀經には舍利弗極樂國土には衆生じまるゝものは皆是れ阿闍跋致

なり等」と説かせられて。極樂には先づ一生補處の菩薩等覺の歷々が數も限
りもないは。御座る。これを聞たものは。皆發願して。淨土參りをねがへよと
仰せられた。何故なれば。如是の諸上善人と俱に。一處に會することをする
ありて。此容なる歷々の方々。と肩をならべて居る國ぢや。は。空に往生を願へ
よと御す。めなされた。時に此句も表向きで云へば。極樂へ參りてからの事
なれども。之れを取り越して。現益とすれば。此世に居る内の利益となる。即ち
ち即得往生住不退轉が。此世の現益ぢやと仰せられて。一念の御約束のとき
阿彌陀如來の攝取の光明におさめとらるれば。娑たは有漏の穢身でも。心ろ
は淨土にすみあをぶ。光明攝取の上から云ふと。此娑婆に居るのが淨土の假
り住まひになる。此娑婆逗留の体から云へば。光明の中に居るのが淨土の假
り住ひとなる。左すれば信心獲得の當体で。爰に居ながら極樂の大會衆の數
に入りたと云ふもの。是れが難有處ぢや。惡人凡夫とさげしめられ。諸佛の御
目にあふれたものが。一心歸命の御願解一つで。善男子善女人となりて。正定

聚の位に住し。便同勸彌と讚められて。菩薩の仲間入りとは。廣大なる仕合せ
ぢや。夫に付て。後白川法皇の御宇に。千載集と云ふ書物を選ばれたが。是れは
其時分の秀歌を集めて。末代の手本にのこせと。天子様よりの勅により。五條
の三位俊成卿仰せを承けて。出來た書物ぢや。依て其秀歌を選ばる。時分丁
度源平取ひの最中で。朝日將軍義仲が都へ攻め上る。平家は悉く西國へ落ち
て行く。其中に。薩摩守忠度と云ふ人。豫ねて歌道の達人なれば。何卒一首たり
ども。其千載集の中へのせて。歌人の仲間へ入りたひと云ふ處から。生田の森
と云ふ處より。態々立ち戻りて。唯一人俊成卿の館へ行き。其事を願はれたれ
ば。如何にも歌道の達人なるにより。何卒のせてやりたひものなれども。天子
の勅に依りて。選集することなれば。私しの勝手にもまいらぬ。殊に勅勸の身
の上なれば。忠度と云ふ名は。逆もあらはせぬ。依て名を出さずに載せようと
ありて。其歌に「さいなみや志賀の都はおれにした。昔じこゝろの山櫻かな」と
云ふ一首を。讀人不知と書て載せられたれば。たとひ無名で。讀人不知として

なりとも千載集の仲間入りが出来れば嬉しい浮世に思ひ残すことなしとて打死を遂げられたとある。何と千載集にのせて歌讀みの仲間に入ることさへ夫程に大切なことで讀人不知として無名でも本望ぢやと喜ばれたとあるに今は夫れ所の譯ではなほ信心領解の身の上は何一つ取りぬはなけれども一念歸命の御約束から極樂参りの人数に加はり眞實報土の清淨大會衆の仲間入りをさせていたゞくと云ふは喜の中の喜仕合の中の仕合の中の仕合といたゞかねばならぬ。丁度宿なしの浪人が國々を流浪して居る内に或る慈悲深ひ人の目に止り引き上げられて籍をととのぬ人別に加へられたら其者の嬉しさはいかばかり。今も在坐の我れ人が其如く今迄は地獄かと思へば畜生々々かと思へば餓鬼廿五有界うるたへ廻りて六道の辻に迷ひ三界流浪の身の上。今は大悲彌陀の御目に止まり一念御助け候への其日から淨土参りの戸籍をととのぬ極樂の家内人数に加へられたことを必獲入大會衆數と御意あらせられた。直入彌陀大會中至同行人とありて遠からぬ

うちに光りかゞやく佛けになりて還相回向の働さまで阿彌陀如來の御慈悲からかゆい處へ手のまはるやうに何一つ不足のなほ身の上に仕立らる嬉しさを喜ぶべきことなり。

得至蓮華藏世界 卽証眞如法性身

此二句は論の五果の中宅門と屋門との果相をつゞめて御催促なさるゝのぢや。初めの一句は所入の土にして後の一句は所証の身を顯はすなり。もとより阿彌陀如來の淨土は身土不二の徳を具するなり。扱蓮花藏とは眞佛土にして眞實報土のこと。蓮花と云ふは卽ち正覺の花なり。藏とは含藏の義にして一切の功徳を含藏し又十方一切の刹土を含藏するとある。扱この蓮花藏世界と云ふことは本と花嚴經に説かせられて先づこの世界の下に風輪と云ふがありて幾重にも成りてある。其風輪の上に香水海と云ふがある。此香水海に種々光明葉香幢と名くる大蓮花がある。其蓮花の上にある世界

を蓮花藏世界と云ふ。其真中の香水海を無邊妙花光と名けて結縛なる摩尼法幢か。海の底になりてありて大蓮花を出す。其の蓮花の上に段々重なりて廿重の佛國ありて。其周圍に微塵數の世界がある。これを花嚴經で云ふときは毘留舍那佛の化境であると説けてあるが。全体花嚴經には見聞解行証入の三つの位ひを立てて法門にも淺深がある。今云ふ如きは見聞位と云ふて極淺い説き方なれども。若し証入に約して説くときは仲々一朝一夕の話しには行かぬ。六ヶ敷組み立てが有るのが。此花嚴界の有様ぢや。夫なれば花藏世界と云ふは毘留舍那佛の淨土かと云ふに佛各々に花嚴を莊嚴するどあれば。三世十方の諸佛が皆な花藏の莊嚴をなさる。夫れならば花藏世界が澤山ありて。釋迦の花藏世界と。樂師の花藏世界と。彌陀の花藏世界と。つかへて。京の町に立ち込めた家の如く。窮屈であるうかと云ふに。そこが佛の不思議で圓融无碍とありて。互に相ひ礙へず邪魔にもならず。喻へば一間々々の座敷へ火を燈して置くを障子を開いてあけ放す時。此方の間の燈りとあち

らの座敷の燈火と互に礙りもなく邪魔にもならず。光りと光りが一つに融して廣間を照らすが如く。今花藏世界の儀も佛力不思議の莊嚴なれば。更らに障礙は無ひ。況んや佛々平等にして主伴不二。本末無碍なれば。少しも邪魔にはならぬ。今は蓮花藏世界の名を以て。安樂淨土の別号としたまふ。是れ本を云へば。盡十方無碍光如來所領の法界にして。彌陀は法界を統御したまへは。一佛として彌陀に依らざるなく。一土として法王家に非ざるはなし。然れば阿彌陀如來の眞實報土に。往生するを得。至蓮花藏世界の玉ふ次に。即証眞如法性身とは。此の即証に二義ありて。一には即疾の義とみれば。蓮花藏世界に至れば。手早く速やかに。法性眞如を証るなりと云ふ。意る二に。休に約して不離の義とすれば。身土不二の謂れにして。得至蓮花藏世界の宅門が。其眞如法性身なりと云ふ。意るなり。然れば。此即の字に付て。往生即成佛の理を顯はすなり。扱眞如とは眞實如常と云ふて。体性虚妄ならざるを眞と云ひ。不變不改を如と云ふ。此眞如の理は一切諸法の体性なるゆへに。眞如即法性に

して即ち証の至極をわらはす名なり。身とは非天非人の虚無之身無極之體を云ふ。經に「非天非人皆受自然虚無之身無極之體」と仰せられ。論に眞實智慧無爲法身と仰せられたは是れなり。

遊煩惱林現神通 入生死園示應化

さて上來聽聞の近門大會衆門宅門屋門の四果は禮拜讚嘆作願觀察の徳果にして是れを入の四門と云ふ。只今の二句は第五の回向門の果にして出門の相を御知らせなされた御言ぢや。淨土論には「大慈悲を以て一切の苦惱の衆生を觀察して應化身を示して生死の園煩惱の林中に回入して神通を遊戯して教化地に至る。本願力の回向を以ての故に。此を出の第五門と名く」と仰せられた極樂淨土から再び娑婆世界へ立ち降りて思ひの儘に濟度利生するを遊煩惱林現神通と御意なされた時に思ふ人の料簡では極樂へ往生したらふ再び此苦みの娑婆世界へは飯へるまいぞ。百味の飯食を味ひ應

報の妙服を着て樂に七寶の林にでも遊んで居たいと思はれようが。成程今日衆生の意では此苦を遁れて淨土へ参りたら再び娑婆へ戻られざるものではないけれども。大慈悲心を以て一切苦惱の衆生を觀察してとあれば阿彌陀如來の大悲の御意ると同じ事になるゆへに振り歸て娑婆を見れば一切の衆生近くは一家一門の者共が无常迅速の世の中に足の下の火の車を忘れてほしやれしやにくやかはいやに夜を明し日を暮し地獄の因ねを拵へるのが不便さに還相廻向で立ち降り衆生濟度はするけれども。今の容に苦みはない。其衆生を濟度して諸共に淨土へ連れて歸ふと思へば却て面白く慰みになる故に。是れを園林遊戯地門と仰せられた。丁度遊戯される容なものぢやとある。切遊戯に付て論註に二義の御釋がある。一に自在之義菩薩が衆生を濟度なさるゝことは丁度獅子が鹿を搏つが如し。爲す所難からざるが如しとありて衆生濟度の自在なることを遊戯と仰せられた。二に度無所度の義菩薩が衆生を觀するに畢竟じて所有なし無量の衆生を度

すと云へども。而も實に一衆生として滅度をうるものなし。衆生を度すと示すこと遊戯するが如しとあり。然れば菩薩の衆生を度したまふことは自然無所作の濟度なるがゆへに遊戯と仰せられた。次に煩惱の林とは林は樹木の澤山に生じ茂れる所を林と云世間でも學問をするものが澤山集まり寄合ふた處を學林と云ひ又儒者の集まりたる處を儒林と云ひ書物屋は書物が澤山集まるゆへに書林と云。今は八万四千の數かぎりもなき澤山なる煩惱が丁度林の立木の如く生へ茂れるゆへに煩惱の林と云ふ。神通とは大乗義章の中に「神通と云ふは能に從ふて名を彰はす。爲すと云ふ神異なるを之れを名けて神となし作用塗ることなし之れを名けて通となす」とありて佛菩薩の作し玉ふ所の所作の不思議なるを神と云ひ其處作自在無碍なるを通と云ふ。依て御和讃に「神力自在なることは測量すべきことぞなき不思議の徳をわつめたり。無上尊を歸命せよ」と仰せられた。扱此神通に三品あり。一に運身通。二に勝解通。三に意勢通なり。初に運身通とは虚空に飛行すること鳥

の如く自由自在なるを云ふ。二に勝解通とは思惟分別して意の如く自由自在の力用をあらはすを云ふ。三に意勢通と云ふは別に作意力を起さねども自然に行き天然に到るを云ふ。此三の中初の二通は凡夫二乗の得るところの神力なれども後の一つは佛に限るの神通なり。是れに付て佛十大弟子の中神通第一に選ばれたは目連尊者なり。されば此目連或時通力を發して佛の御説法の音聲の聞へる處まで行かんとて虚空を飛行せらるる程に一大三千世界の間を自由自在に飛行して開きたまへるに尙は會座に在りて聞くが如し。夫より又別の三千界を廻りて開かんと思ひ他の三千界に至りて開きたまふに尙は會座に在りて聞くが如し。依て夫より他方の世界四十二恒河沙の國土を過ぎて光明盡世界と云ふに至りたまふ。其國の教主をば光明王如來と云ふ。此の如來の佛身は四十里。又其國の菩薩の身の長二十里なり。此國の菩薩の食時に至りて目連神通つきて落つる折節其國の菩薩達の齊を行ひ玉ふ。膳の上に落ちたれば大衆これを見て如何にも此虫は人形

ちにして而も沙門に似たりと云ひて是れを見る。此時光明王盤如來の玉はく。此れは娑婆界の中南閻浮提摩訶陀國靈鷲山に釋迦如來と云ふ佛出世したまひて其佛の弟子に神通第一とある。目連と云ふ聖者なるが佛の音聲の聞ゆる處まで行かんとて此國まで來れり。今神通盡きて爰に落つるなり。汝ち又た定に入りて釋迦を念じ通を發し一本國にかへるべしと教へたまふ依て定を修し釋迦を念じて再び通を發し本の靈鷲山に皈へり玉ふとある如し是目連は神通第一なりと雖も其通力の盡くることあり然るに今度我れらが淨土に往生すれば修せず行せずして自然に神通を得ていたらざることをなく又通力の盡くることなきは淨土の神通なり之れを三明六通皆具足すと仰せられた即ち過去未來現在の三世を徹貫して明らかなるゆへに三明と云ふ六通とは一に天眼通二に天耳通三に他心通四に宿命通五に神足通六に漏盡通なり。今念佛の行者極樂に往生すれば自然に此大神通力を得て先づ宿命通を以ては過去を徹貫し天眼通をもては現在を見

漏盡通を以ては未來を觀じ天耳通を以ては其聲を聞き他心通を以て其心を知り神足通を以て其處に往きて憶我聞得同行人と一切衆生を自在に濟度するを現神通と云ふなり。入生死園示應化とは煩惱は因生死は果なり是を園に喻へたまふは園と云ふは果を樹ゆる所以なりとありて菓實を植ゆる處を園と云ふゆへに今生死は煩惱惡業の因によりて得る果なるゆへに生死園と云ふ然れば煩惱の林生死の園は我等が爲めには苦因苦果なれども菩薩は自娛樂とて遊び處になさるゝなり示應化とは隨類應同して種々の化身を顯はして衆生を濟度なさるゝが應化を示すと云ふもの近くは御和讃に「安樂淨土にいたるひと五濁惡世にかへりては釋迦牟尼佛のどとくにて利益衆生はきはまなし」とあれば釋迦如來の如く八相成道して應化身を示現し衆生を濟度し玉ふこときはまりなり或ひは長者に生れ或ひは童子に生れ濟度利生の働らきに色々なる姿た形ちを現することを示應化と云ふ昔し執師子國の西南の

海中に絶離島がありて、民家五百餘あり、皆な漁を業とす。佛法の名号は且つて以て知らず。然るに或る時、数百千の大魚ありて、渚に寄り來り、泳ぎて皆な人の物言ふ如く、南無阿彌陀佛と唱へる。人々更らに其所由を知らねども、魚の唱へる言によりて、阿彌陀佛魚と名付けた。漁師濱邊に向ふて、阿彌陀魚と呼ばず、漸々に近き來り、頻りに唱へて捕れば、はねもたどりもせず、殊に其味は外の魚とは各別よるしい。若し諸人集まりて唱れば、捕り得る所の魚の肉は味がいよく、甘くなる。少し唱へて得るものは、味も飽す。是に依りて、一處の漁師は、皆な日々阿彌陀佛の御名を唱へるを業にして居た。ある而るに、其中の年寄一人死亡して、三月の後、紫雲に乗じて、光明を放ち、濱邊に來りて、諸人に告げて云はく、我れはこれ先頃死亡したる年寄なり。元とは汝等の仲間の者なれども、阿彌陀の名を唱へし功力によりて、天上界に生を感ず。汝ちらが毎日漁取る處の大魚は、阿彌陀如來の化して作り玉ふなり。夫れは何故ぞと云ふに、我れらが愚惡にして、佛ども法どもしらす。殺生ばかりを

業として、惡業にのみふける故。大悲これに憐愍して、大魚と化身し、念佛を勤めたまふ。汝ちら若し疑ひあらは、其魚の骨を見よと云ひ、終りて空に上り、西方を指して行くは、どに姿た隠る人々、奇異の思ひをなして、彼の捨たる魚の骨を見るに、果して皆蓮花でありければ、彌々感應肝に銘じて、夫より南無阿彌陀佛を唱へ、西方の往生を願ふた。とある。是れを阿彌陀魚の因縁と云ふ。如是衆生濟度の爲に、隨類應同して形を種々に現じ、機にしたがふて、因縁を結び、遂には極樂へ引接したふ、方便の力用を示、應化と云ふなり。

本師曇鸞梁天子

常向鸞處菩薩禮

三藏流支授淨教

焚燒仙教販樂邦

上來天竺の高僧龍樹天親の二大士の御謂はれを聽聞に及びたるが、已下唐の曇鸞大師の御化導の趣きを知らせ、番々跡を繼いで御出現の高僧方一器の水を一器にうつすが如く、淨土眞宗の御安心を漏さず、御相承なさるゝこと

を述べて御催促下さる先づ本師曇鸞梁天子常向鸞處菩薩禮の二句は曇鸞
 大師の智徳行徳が勝れさせられたゆへに梁の天子蕭王と云ふが御皈依な
 されて曇鸞大師の御座なさるゝ處に向ふて曇鸞菩薩々々と敬ふて禮拜を
 なされたことを明して先づ其行化の御徳の勝れされたことを知らせ
 たまふ佛滅後一千四百二十五年の頃ろにあたりて北魏の承明元年丙辰に
 雁門と云ふ處に誕生したまひ十三四才の頃五臺山に登り靈蹤を見て心神
 歡悦して出家したまふとある本師とは本宗の祖師と云ふこと扱この正信
 偈では曇鸞源空の二祖に本師の言を冠せたまへども御和讃の方では龍樹
 曇鸞道綽源信源空の諸祖に本師との玉ふ然れば三國の七高僧は皆な本宗
 傳承の祖師なり梁天子とは梁は時代の名にして天子と云ふは王者の尊稱
 なり何となれば王は天を父とし地を母とすどありて天の子と云ふこと
 國王を天子と云ふ此梁の天子とあるは梁の高祖武帝のことにして御名
 を衍と云ひ字を叔達と云ふ御和讃に梁の天子蕭王とあるは氏なり此帝王

深く佛法を崇敬信仰あらせられ殊に曇鸞大師を篤く歸依したまふ續高僧
 傳の十九に云く帝亦九深く敬て常に侍臣を顧りみて云く北方の鸞法師は
 肉身の菩薩なりと恒に北に向て遙かに禮したまふと又九唐の弘法寺の加
 才法師の傳記の中にも神智高遠にして三國に知開す洞かに衆經を曉じ人
 外に獨歩す梁の國の天子蕭王は恒に北に向ふて曇鸞菩薩と禮したまへり
 と云ふ鸞處とは御和讃に魏の主勅して并州の大巖寺にぞねはしけるやう
 やくればりにのぞみては汾州にうつりたまひにきとあれば并州の大巖寺
 へ勅命に依りて住持したまひ御老年に及で汾州北山石壁の玄忠寺に移住
 したまふとみへたり梁の都よりは北方にあたる又和讃の上では梁の天子は
 かりでなく魏の天子はたふとみて神鸞とこそ號せしがおはせしところの
 その名をば鸞公巖とぞなづけたると仰せられて魏の國の天子孝靜皇帝も
 深く御歸依なされ神鸞と號したまひ其居地を鸞公巖と名け敬たまふとわ
 る時の天子がかく御崇敬なされたことからもへば其行化の高徳なるこ

と推して知るべきなり。
 三藏流支授淨教焚燒仙經歸樂邦の二句は大師が淨土門に入りたもふた因縁なり。扱この曇鸞大師は初め四論宗の御方あり。四論宗と云ふは日本には傳はらぬ宗旨やが三論に智論を加へて四論とし。即ち中論百論十二門論。智度論の四部の論に依て教へを立つるを四論宗と云ふ。曇鸞大師は此四論の理に通達したまひけるが或時大集經の註釋の書物を造り玉ふに半にして病ひ起る。依て種々療治なさるゝとき。思召には兎角何を思ふに付ても佛法の理を學びたりとも命ち短かくては叶ふまじとて。夫れより陶隱居と云ふ仙人の元へ往きたまひ。爰に三年の間は仙術を學び長生不死の法をねさめて。仙經十卷を携へて歸りたまふ。途中菩提流支に出遇ひたまふ。此菩提流支と云ふ人は經律論の三學に明らかなるゆへ三藏と云ふ。其時曇鸞三藏に向ふて問はるゝには。何と佛教の中に此土の仙術のやうな長生不死の法が御座るか。と尋ねさせられたれば。三藏大地に墮して云はるゝには。此土に

こそ長生不死の法はあらず。假令汝が今仙術を以て。しばらく長生を得るといへども。終ひに輪廻を免かれず。佛法の中にこそ眞實の長生不死の妙術あり。即ち是れなりとて。淨土觀無量壽經一卷を授けたまふ。賢師立處に廻心して。仙經を焚燒とやきすてさせられ。淨土念佛門に入りたまふ。是を三藏流支授淨教焚燒仙經歸樂邦と仰せられ。又御和讃に「本師曇鸞和尚は菩提流支のをしへにて。仙經ながくやきすて。淨土にふかく歸せしめ。きと仰せられた。是より今迄學んで御座りし。四論佛性の道理もさしれきて。本願他力に歸入して。自身も往生を願はせられ。又具縛の凡衆を導きて御化導あらせられた。時にこの曇鸞和尚を手引して。淨土門に入らしめられた。菩提流支と云ふ人は。本と北天竺の人にして。弘く三藏の學に体達したる人なり。魏の國永平年中。の初め。東夏に來りて。宣武帝の勅を奉じて。もろくの經論を翻譯したまへり。何んと各々方も曇鸞和尚が好い御手本。雜行雜修自力のこゝろをふりすて。とあれば。捨るに付て心る残りなく。未練の思ひのなひやうに入ら

す叶はず勤まらぬ心ろの惑ひ機のあつかひ立ち處に廻心懺悔とあやまり
 はて一心歸命の御願解にもとづきたきものなり如何さま仙術の長生とて
 も五十歩百歩の論にして遅かれ早かれ同じこと無量壽にくらぶれば千年
 でも万年でも日影まつ間の朝顔と異ることは少しもなひ阿彌陀如來は壽
 命無量の誓願を御成就なされたれば此阿彌陀佛に歸命すれば長生不死の
 神方なりとある名號六字を身に得たてまつり追付娑婆の御縁の盡き次第
 百寶莊嚴の淨土へ参り彌陀同体の無量壽は無衰無變とうつらすかはらす
 不生不滅の妙果をささる然れば壽命の最上此上なしとは阿彌陀如來の御
 壽命なり夫れに付て昔俊乘坊重源が奈良の大佛殿再建の時是れは迄の大
 伽藍建立するには命ちが短かくては成就しがたしとて近江の多賀明神へ
 参られて七日七夜籠らせられ祈願ありければ七日満する夜明神重源の手
 のひらへ延と云ふ文字を書いて授けたまふ即ち神冠は二十なり其下に延
 の字を書いたが延と云ふ文字仍て二十年生き延るとありければ夫より弘

く日本國中勸進して終に大佛殿を建立せられた是れで思ひ残すこともな
 し今は一日も早く淨土へ往生することねがはしけれと又多賀明神へ参籠
 し壽命の残りを返上するとありければ不思議なるかな直ちに其處で石に
 腰を掛けしまゝ往生せられた依て重源の腰掛石と云ふが今に明神の境内
 に残りてある此多賀明神の御神体には壽阿彌陀佛と云ふ五文字の名号が
 神体なり高祖現益蹟の最初に「阿彌陀如來來化して息災延命のためにとて
 金光明の壽量品とさねきたまへるみのりなり」と仰せられて阿彌陀如來は
 息災延命壽命の受持じやとあれば此佛けを信じまいらせて無量壽の御証
 りを開けとある先達が今の曇鸞大師なり。

天親菩薩論註解

報土因果顯誓願

是よりは曇鸞和尚が天親菩薩の淨土論を御講釋なされて論註と云ふ書物
 を御造りなされた其論註の意ろをつめて御催促なさるゝが今の偶文ち

や御和讃に「天親菩薩のみことをも、釋師とさのべたまはすば他力廣大威徳の心行いかでかさとりまじ」と仰せられて、天親菩薩の往生淨土論も、曇鸞和尚の御註釋がなかつたら、眞實の御意ろが顯はれぬ故に、今釋師の御手柄を知らしめて、今日の我れらが他力廣大威徳の御信心をいたゞいで、報土へ往生を遂げたてまつるは、ひとへに曇鸞和尚御化導の御蔭なるぞと知らせたまふなり。次に報土因果顯誓願とは、先づ報土と云ふは、報身所居の土と云ふことにして、別願酬報と世來上らせられた阿彌陀如來の極樂淨土を報土と云ふ。扱て因果顯誓願とは是れに二義ありて、一には佛に約して、報土を成ずるの因果と云ふ義なり。此時は報土の因と云ふは、法藏菩薩の因位の御修行を報土の因と云ふ。又た報土の果と云ふは、法藏菩薩願行成就したまひて正覺の阿彌陀となりたまひ、二十九種の御莊嚴を以て極樂淨土を建立したまひ。我れらの往生すべき所の出來あがらせられた處を報土の果と云ふ。然れば因も果も法藏菩薩の誓願より出來させられた故に、報土因果顯誓願と云

ふ。二には衆生に約して、報土に生ずるの因果と云ふ。意ろにして、阿彌陀如來の淨土へは自力の因ねでは參られぬ。彌陀の誓願不思議から顯はれた他力の御信心でなければ、往生は叶はぬとあることぢや。爰を御和讃には「安樂佛國にいたるには、無上寶珠の名号と眞實信心ひとつにて、無別道故」ときたまふとありて、此方から拵へた功德善根では參られぬ。阿彌陀如來本願他力の無上寶珠の南無阿彌陀佛。この南無阿彌陀佛の中に、我れらが淨土參りの因も果も御成就なされた程に、自力の執心をすてはかれ、疑なく他力本願を聞き分け、一心一向に彌陀を信するところ、がさだまらねば、往生は叶はぬ。此他力の大信心が、即ち報土得生の眞因と云ふもの。次に果と云ふは、極樂の御証り、如來清淨本願の无生の生なりければ、本則三三の品なれど、一二もかはることぞなき。因が無別道故ぢやで、御証りの果にも一二のかはらば、なほ佛因佛果と云ふもので、因も如來様からの下されもの。果も如來様の方に御成就なされて、我が計ひは少しもなほ、九々如來の願力なるゆへに、顯誓願と

仰せられた其因とは第十八願果と云ふは第十一願即ち論註の上では信
 佛因縁を因とし正定涅槃を果とすこの謂れを能く合點せぬと佛願をわや
 ぶみ我物で參るふとするゆへに功德善根の品物に眼を掛る往生の一段に
 付ては只深く本願を信じたてまつるより外はあい阿彌陀如來をたのみさ
 へすりや佛の方より往生は治定せしめたまふと御文章に仰せらるゝ通り
 然るに大方の人は念佛を稱へても其念佛に力が入りて此稱へる力らで參
 るふと思ふ故に似たることは似て是なることは是ならず他力の念佛を自
 力で稱ふれば直に二十願の機に落ちて方便具門の領解となり眞實報土へ
 は參られぬ往生の一大事は何も彼も彼尊へ打ち任せ信するこゝろも念す
 るこゝろも思ふのも稱へるのも稱禮念の三業ともに吾が計らひは少もな
 い阿彌陀如來の選擇本願の御慈悲の御心からたのませてたのまれたまふ
 彌陀なればたのむこゝろも我れとれこらして一切の衆生よ早くも吾れを
 たのみ片時もいとひで我淨土を願へと招ひて下さる御聲が届くゆへ御助

け候へど一筋にたのみたてまつり往生一定と願解決定の出来たのは皆本
 願の御手廻しの顯はれぢや自力根性の者は何も角も彌陀に任せと云へば
 手土産が無ひやうに思ふて何やら心る細く力ら無く思へども手土産を持
 て行くとは他人向きの挨拶ぢや今阿彌陀如來は我等が手元は能く御存じ
 尊无一善の土産のなひのは御承知ぢやゆへに衆生に代りて善根も功德も
 悉皆彌陀の方に御成就なされ我れら方には丸裸体其儘ながら疑ひなく信
 する一つで事はすむ機法一体の親様に御任せ申した上からは決して氣兼
 はさせぬぞ安養無爲の都入りには成さぬ願行身に具足して大善大功德は
 身に滿つる晴れがましい往生を必ず廻げさせてやるぞとあるが阿彌陀如
 來の御誓願ぢやとある。

往還回向由他力

正定之因唯信心

扱この二句は前の一句は天親の廣由本願力廻向の句を受け後の句は爲度

群生彰一心を稟けて唯信直入の旨を詳らかに明したまふ爰を御和讃に彌陀の廻向成就して往相還相ふたつなり。これらの廻向によりてこそ心行どもにほしむなり』と仰せられたれば此往還回向の御慈悲から御座の我れらに他力の信心を得させて下さる。扱往相廻向と云ふは阿彌陀如來の御方便に催ふされて他力の御信心を獲得して淨土へ往生を遂ぐるの相を往相と云ふなり。還相廻向と云ふは利他教化の果をほしめずなば諸有に廻入して普賢の徳を修するなりとあれば是二十二の願の御力から普賢の徳を修して娑婆世界へ衆生濟度に出かることを還相廻向と云ふ。然れば往相は第十八願の御力から還相は二十二願の御力らなれば皆如來の本願力廻向から働くゆへに往還の廻向は他力に由ると仰せられた。御開山の御言にも若しは往若しは還一事として如來清淨願心の廻向成就したまふ所に非ざるはなし』と仰せられた。他力とは自身の力らに非らず他の力らで喻へば道を行くに車に乗り海を行くに舟に乗り山道を行くに籠に乗る。是れらみな自

身の力らに由らずして他の乗り物の力らに由る。丁度日輪を見るには己れの力らにては叶はぬが日輪の力らで日輪を見る如く我れらが眼の力らはまことに僅かなもの其上へ年でも寄れば一間先のものも儘しかに見分が付かぬに誰しも日輪を提灯と見違へたものはなひ。然れば全く日輪の光徳向の力らで日輪を見るこれが由他力のいはれなり。次に正定之因唯信心とは此正定に付て二義あり。一には正定を現生正定聚のこととして正定聚に入るの因は唯信心と云ふ。二には往生決定の因此の時正定は報土正定之因と云ふ意なるなり。故に信巻に信樂を釋して『斯心者即如來大悲心故必成報土正定之因』と仰せらる。今は後義を正としかねては前義にも通ずると知るべし。因とは因種と申して種ねのこと。種ね程大事なるものはなひ。種ねさへあれば凡夫も佛けになれる。若に松は生ずる筈はなけれども種ねあれば岩の上にも千年の松が生ずる。依て種ねさへあれば御座の我れらも美しい佛けになれる。然るに其種ねは唯信心とあれば此御信心より外はなひ。是れを論

註には但以信佛因縁と仰せられた。此の唯と云ひ但と云ふ文字は餘のこと
をまじぬすたゞ此ればかりと簡ふ言ばて御互ひが報土へ往生を遂ぐる決
定正定の因種は他にあるとは思ふな。たゞこの信心ばかりと仰せらる。此
信心とあるが即ち凡夫自力の信心ではなひ。如來の他力の大信心でなけ
れば。往生はならぬに依てもろくの難行も難修も自力の計ひをも止めて
如來他力の信心を得よとの御催促ぢや種を蒔いたら必ず生へる。今も如來
の御手元から大信心の佛け種ねを衆生心中に蒔付てもろうたらいやでも
今度は佛けにならねばならぬ。御約束が正定之因唯信心のいはれなり。

惑染凡夫信心發 證知生死即涅槃

扱この二句は前の正定之因唯信心の句を承けて更らに一念の當体に不斷
煩惱得涅槃分の現益を獲ることを示す。惑染とは惑はまごうと云ふ文字で。
即ち煩惱の異名なり見惑思惑など申して。此煩惱は衆生の心身を惱亂

して。うるたへまごはせるゆへに煩惱のことを惑と云ふ。韓退之が師の説に
誰れか能く惑ふことなからんとある。其惑の字の註に胸中に疑ひありて未
だ散せざるなりと有りて文字の當り前で云へば疑が胸の中において解け
ぬをば惑と云ふ。全体疑ふゆへに惑ふ。惑ひは疑ひより起る故に疑惑と云ふ。
次に染とは汚れることで染汚と云ふ。即ち煩惱の爲めに身心をけがされ
て煩惱に染まりついたらるを染と云ふ。世間の上でも木綿を染むるに終ひ淺
染なれば又洗ひ落すことも出来。また洗ひ落すに左程手間もかゝらぬが黒
とか紺とか念入に染めると中々容易なことでは其染み付た色は抜けぬ別
けて黒などは染めるに物の地をあらしいためて染めたら抜けぬ。今御互ひ
の惑染と煩惱に染み付た有様は。黒染め處ではなひ。久遠劫來念入りに染め
込んだ故中々容易に此煩惱の染汚は抜けやらぬ。惡業煩惱の黒染めゆへに
惑染の凡夫と仰せられた。然るに今は如何なる仕合せやら。惑染の凡夫とあ
る汚れた穢なひ私しが。本願の御目的極樂の正客ぢやとある。信心發とは信

心は他方御廻向の大信心にして凡夫のわろき自力發起の信心ではなひ如来の他方のよき眞實信心のこと發とは能發の謂れにしてこれすと云ふことと是れに能發所發の謂れあることは先きに能發一念喜愛心の句の下に辨するが如し。古歌に「なかくに罪ある身こそうれしけれさてこそたのめ彌陀の誓ひを」と詠じたるが如く吾身の淺間敷きに付てもいよく如来の御慈悲にすがり妄念妄執のねてるに付てもかゝるものを御助けは三世に一佛恒沙に一体地獄一定のいたすらものが今度と云ふ今度こそは彌陀の淨土へ往生を遂げ光明放つ佛けとは如何なる廣大の御慈悲ぞと大切に喜ばねばならぬ生死即涅槃とは眞如体達の極理にして凡夫直ちに此理を證すと云ふには非ず信心を發し名號を稱すれば其名号たるや萬善萬徳の歸するところにして信心は全く佛智他方より發さしめ玉ふゆへ假令惡機感染の凡夫たりとも法の威徳を領するゆへに法徳として生死即涅槃の妙理に契ふなり。即ち相たは有漏の穢身にして感染の凡夫なれども信心の体は

是れ佛智廻向の信なれば自然と此理にかなふなり。蓮師の三首の御詠歌の初めに「ひとたびもほとけをたのむころこそまことののりになふみちなれ」と仰せられ是れが一念歸命の信心決定のすがたとあればまことののりに契ふとは。即ち今の眞實如常の妙理なり。煩惱即菩提生死即涅槃の法りに契ふなり。故に御和讃に「本願圓頓一乘は逆惡攝すと信知して煩惱菩提無二とすみやかにとくさとしむ」とあるは是なり。爰を氷と水との喩へを以て御念頌に御知らせ下さる。此時は生死其儘涅槃にして惱煩其まゝ菩提なり。罪障か功德の体となりて氷り多きに水多くさはりたはきに徳多し今日の我れら曠劫已來煩惱の寒氣にとぢられて冥より冥苦より苦と二十有五有界さまやうて出づる期のなき身の上が宿善の御慈悲に催ふされ佛智の恵みに暖氣をうけ閉ぢた氷りも何日しか解けて信心よるこふ身となりて。得涅槃分の日暮しは不斷煩惱とあるからは昔し邪魔になりた煩惱が今は却て功德の体となり御恩を喜ぶ手掛りと打て變はりし仕合は信心發得

の喜びなり。昔し加賀の千代女寺参りの途中花を求めて行けるに肴屋に出
合ひ幸ひに晝飯の菜にとて之れを買て行く相たを人答めて佛けに供へる
御花を片手に肴を下げたはいかゞとありしに千代女答へて煩惱と菩提と
一荷花と魚はどけに供養われは喰ふ用と口ちまみて答へしとなり所願
の信徳によりて不知く法りに契ふとは此謂れなり。

必至無量光明土 諸有衆生皆普化

さて初の句は往相廻向を結た御教化其往相廻向のれかけで淨土へ往生す
れば大悲と轉するゆへに還相廻向に出で諸有の衆生を濟度するこれを
次の句に示し玉ふ彼の矢を射るに的へ當りが強いと後へ戻る其戻るのは
行く時の勢ひに戻る力らを持て居るから其力らが顯はるるのちや今も丁
度其如く往相廻向の中に還相までを具へてあるゆへ御和讃には「淨土の大
菩提心は願作佛心をすくめしむすなはち願作佛心を度衆生心と名けたり」

と仰せられたれば必至無量光明土の中に諸有衆生皆普化の衆生濟度がこ
もりてある。これが往還廻向由他力で元より阿彌陀如來の本願のなされわ
ざじや入出不二往還一体行くも戻るも阿彌陀如來の御慈悲を離れたこと
は一つも無い。扱必至無量光明土とあるは必の言は決定の義で必然とくる
ひのないこと然れば信心さへ得らるればいやでもおふでも極樂淨土へ往
生するに間違ひのなひことを必と云至の字はいたるとよひ字で行きつく
處まで行き届いたことを至と云ふ若し化土の往生なれば半分道中途なる
ゆへに至るとは云はれぬけれども今の無量光明土は眞實報土阿彌陀如來
の御座處なるゆへに今は此の御淨土へ行き届く處を至ると仰せられた扱
無量光明土とあるは即ち眞實報土のこと平等覺經の中に「速疾に越て則
ち安樂世界に至るべし無量光明土に至れば無數之佛を供養す」と説かせら
れて佛けを盡十方無碍光如來と云ひ國を無量光明土と云即ち身土不二
の謂れなり之れに付て三義を辨すれば一に無量光明土とは彌陀如來第十

二願の光明無量の願に酬報して成就したまへる不可思議の智光なり時に
 淨土は智慧を以て体とす。即无量光明の所成の土なるが故に無量光明土と
 云ふ。是れは彌陀の御智慧に約して名くるいはれなり。二に彌陀は是れ無量
 光明佛なり。此佛の所居の土なるが故に無量光明土と名く。喩へば我日本國
 は天神地神神孫相承して御統しれさめ玉ふ國なるがゆへに神國と云ふが
 如し。三に無量光明は能莊嚴。主は所莊嚴なり無量の光明に莊嚴せらるる國
 主なるが故に無量光明土と云ふなり。
 扱次に諸有衆生皆普化とは。是れ還相廻向のはたらきにして。第廿二の願に
 依る願文に「開化恒沙無量衆生」と説きたまふ。此句の上にも必の字を付けて
 みるこゝろにして。必ず無量光明土に至れば。必ず諸有の衆生を皆な普く化
 すと云ふこゝろなり。利他圓滿の妙果とあれば。衆生濟度は必らず具はる若
 し此の還相の力用が付てなければ。實の証りと云はれぬ。諸有と云ふは廿
 五有界のことにて。此の二十五有界と云ふは四州と四惡趣と六欲天と梵天

と四禪天と四無色と无想天と那含天となり。之れを總じて三界六道と云ふ。
 然れば此二十五有界に有りて在らゆる衆生を普く濟度化益することなり
 衆生と云ふは多くの生類と云ふことにして。又有情とも云ふ。情識を有する
 もの生きとし生けるものを總体つかねて衆生と云ふ。即ち人間は勿論鳥
 畜類に至るまで。恒沙無量の生類が皆な濟度の目的となる。故に或ひは隨類
 應同して種々の形ちを示現し。或ひは八相作佛して。普く化益し終ひに淨土
 へ連れて行かんと。濟度するを還相の力用と云ふ。扱この「化」の字には種々の
 いはれがある。一に轉惡爲善。二に轉凡爲聖。三に轉迷開悟なり。一に轉惡爲善
 とは近く云へば觀經に於て一生造惡の下々品の惡人が南無阿彌陀佛を稱
 へた場處で「善男子善女人汝稱佛名故諸罪消滅」とありて。觀音勢至の二菩薩
 が爲其勝友と讚嘆したまふ。高祖は現生の利益として。轉惡成善の利益を示
 し玉ふ。二に轉凡爲聖とは煩惱成就のわれらが一念皈命の當体に正定聚の
 位ひに住じ。等覺菩薩と肩脊を並べ往生人定められ。穢土の假名人となる。

三に轉迷開悟とは平生のとき善知識の言の下に取命の一念發得せば其時を娑婆の終り臨終と思ふべし此一念の時に迷の命を終りたるを前念命終後念即生と云ふ是れ得涅槃分の密益なりいよく娑婆の縁つきて一息閉眼の夕べには大涅槃を超越すこれ轉迷開悟のいはれなり然れば今日の我れら曠劫已來生死に沈淪し無有出離之縁の身たりながら无始流轉の苦をすてゝ無上涅槃を証とるなり今迄六道の辻に迷ひ子が機法一体の假子と名乗り无明業障の大病人が本服全快の正定聚追付淨土の都入り願土にいたればすみやかに无上涅槃を証してぞすなはち大悲をたこすなりこれを廻向となづけたり横に十方豎は三世諸有の衆生を化益する濟度利生の働らきを知らせたまふなり

道綽決聖道難証 唯明淨土可通入

扱是れより七高僧の第四道綽禪師の自行化他の徳を明す先づ此道綽禪師

の御傳記は續高僧傳佛祖統記及び迦才の淨土論などに少づ異説はあれども全体傳記などは何れにもせよ少しづつの相違はあるものぢや今略して云ふは道綽禪師は唐の并州汝水と云ふ處ろの人十四才の時に出家し玉ふ最初は涅槃宗と云ふ宗旨で御學問をなされたが或時玄忠寺に於て曇鸞大師の碑の文を見たまひ扱ては鸞師の如き智慧の勝れさせられた御方でさへ四論の講説をすてゝ念佛門に歸したまふ況んや我れら如きの小智慧鈍の身として自力の修行はねほつかなしと思召し大業五年の頃より涅槃宗をやめ自力難行をさしなきて一心に淨土往生を願ひ常に觀無量壽經を講談せられて偏へに念佛三昧を弘通したまふ即ち安樂集二卷を御製述なされて聖道の法では逆ても末代の凡夫は証することは叶はぬはどに唯有三淨土一門可通入路たゞこの淨土の一門彌陀の本願ばかりありて極樂參りの道筋ぢやと御勸めなされた故此念佛の一門が盛んにひろまりて并州の晋陽大原汝水など云ふ處ろでは男女七才已上の人々は悉く彌陀を信

して念佛を唱へたどあれば七ツ八ツの小供までが念佛を稱ふるに小豆な
 どを斂取りにして上精進と精を出すものは八十石九十石宛も積み下精進
 とて根機のつたなひものでも二十石位ひは唱へたどある又禪師も觀經の
 御講釋を二百遍までなされたとある故に御和讃に「本師道轉禪師は聖道萬
 行さしたきて唯淨土一門を通入すべきみちとよく本師道轉大師は涅槃
 の廣業さしたるて本願他力をたのみつゝ五濁の群生すゝめしむと仰せら
 れた然るに貞觀十五年四月二十七日御年八十四才にして往生の素懷を遂
 げ玉ふ初聖道とは二義ありて一に聖人所修之道と云ふ此時は智慧のある
 才覺の勝れた聖者達か御修行なさるゝところの因道をさして聖道と云ふ
 二に聖人所得の道と云ふときは果道にして聖者が智慧により修行により
 て得るところの菩提を道といふ是れ難行にして愚鈍下劣の我らには及
 ひがたき道なり全体此句は安樂集によらせられての御教化ぢや其安樂集
 の中に問答を設けさせられて問て曰く一切衆生みな佛性あり遠劫已來ま

さに多佛に値べし何に因て今に至りてすなはち自ら生死に輪回して火宅
 を出でざるや答曰く大乘聖教によるに二種勝法を得てもて生死を排せざ
 るによる是を以て火宅を出す何者か二となす一に謂く聖道二に謂く往生
 淨土其聖道の一種は今時證しがたし一に大聖をさる遙遠なるによる二に
 理深く解微なるによる是故に大集月觀經に云く我が末法の時の中の億々
 の衆生行を起し道を修するに未だ一人として得るものあらず當今は末法
 にして現に是れ五濁惡世なり唯淨土の一門ありて通入すべき路なりとあ
 る御言を今の二句に結んで御知らせ下さるが今の偈文じや依て先づ安樂
 集の大体を合点せねばならぬ一切衆生みな佛性ありとは是れは涅槃經の
 中に説かせられた謂れにして一切衆生悉有佛性如來常住无有變易」と御
 演説なされてある扱この佛性の論に付ては中々八かましい議論もあるが
 一口ちに申せば佛けたねと云ふものを我ららにそなへてあると云ふこと
 じや此佛け種ねのある上に遠劫より已來番々出世の佛に逢ひたてまつり

御化導にもあづかつたであらうに何故今日まで三界の火宅に流浪して生死の迷ひを出でずに居るぞと云ふ問のこゝろ夫れに答へて二種の勝法を以て生死を拂はなんだもへに三界の火宅を出づることがならぬ其二種とは一に聖道二に往生淨土此の中で何れの法なりとも修行すれば生死の火宅三界の迷ひを逃れて涅槃の証りが開かるゝけれども其聖道の方は今時の者には証られぬ何故に証らぬと云ふに二色の分けがあるゆへに修行が古はぬ其二色とは一には大聖去ること遙遠なるによる時がねどるへてあるゆへに修行がならぬ世降り人つたなくしては難行の道路は通られぬとある然れば今時はこれ如来滅後三千年に近か付きて教理行果共に滅尽したる末法の只中じやゆへ聖道門は叶はぬと仰せられた二に理深くして解微なるによるとありて理深くとは聖道の法門義理甚深のことじや花は折りたし梢は高し機根最劣のものに難解難入とある故に御和讃には釋迦の教法まじませと修すべき有情のなきゆへにさとりうるもの末法に一人も

あらじと説きたまふと仰せらるゝ通り然る愛に難有は彌陀の本願末法五濁の惡世にも唯有淨土一門可通入路とありて法門は數々あるけれど凡夫が佛けになるは彌陀の本願ばかり時にかなひ機に相應したる淨土参りの近道は唯有淨土の一門ぢやほとに早く入れとの御化導ぢや。

唯明淨土可通入

扱前席に於て聖道門の証りがたきを決判なされし謂れを辨じたが今席に於ては濁留此經止住百歳と法滅末法の世までも彌陀の本願はいよく不可思議にさかりにして凡夫が極樂へ往生遂ぐる近道は外にあるとは思ふな唯この淨土の一門ぢやと知らせたまふ扱て此通入の通の字は横に十方に通じ豎に三世に通ず又此の通の字は塞に對すと云ふて不塞通入の義なり即ち往相還相入出自在の通入門なり喩へば大家には表向きの門と通入と云ふがある表向きの門は先づ客人の威儀殿をかにして立派な人が

通る身には綾羅をまどひ権威を以て通入する如く、聖道門は智慧の勝れた修行のつとまる威儀嚴そかに飛行をたもつ智者や聖人の通る門爰へは迎ても乞食非人は向ふこともならぬ然るに通用門の方は家内の者を初め出入の衆も皆心易く通る如く、唯有淨土の通用門威儀も作法もどよのはぬ、底下薄地の見にくひ凡夫が氣兼も入らず遠慮もなく自由自在に通入する。此聖道淨土の二門を分けてしらせて下されたは道緯禪師が初まりじや、今即此二門を分けて通塞を知らせたまふは意の廢立にあるなり。聖道門をすて淨土門に飯せよと教へたまふなり。何事も時ぞとねもへ夏來ては錦にかはる麻のさころもじや。夫に付て梅花心易の註をみるに、支那に占ひの達人がありけるが、或時極月の夜唯今で云へば九時頃るとも思ふ時分に隣りから物を借りに来たと見へてしきりに戸を叩く、仍で親子打寄りて何を借りに来たか占ふて見よふとて、彼の息子が占ひを初める可愛さうに門口では物を借りに来た者は雪の降るのにふるく振うて待て居るにもかよ

はらす占ふて居たが、今の息子が云ふには、短金長木の卦に當るによりて、多分鋤鉞をかりに来たのであるうと云へば、親父が之れを見て成程卦は短金長木にあたるが、何事も時を考へて判せねばならぬ。まあ今は何時じや冬の最中で、其上雪の降る夜分ではないか。此時分に鋤鉞の入用な筈はあるまひ依てこれは大方斧を借りに来たのであるう。尋ねて見よとあるゆへ戸を明けて内に入れば、隣りの親父が案の如くに申すには、まことに夜中御無心なる譯けながら、今日は薪に盡きましたゆへ木をこなさうと思ひますゆへ、何卒斧を拜借したいと頼みに来たとある。今も其如く釋尊一代の御說法も時が大事で能々考へねばならぬ。花嚴法華の鋤鉞も正法の春の時分なら、善根功德の田畑を耕すため入用なれども、今は何時じや五濁惡世の末法の冬の最中惡業煩惱の雪降りの中なれば、修行飛行の鋤鉞は役に立たぬ。かゝる三種五欲の雪中に生死をはなると薪をこなすは、利劍即是彌陀名号念佛の一法ぢやとある。依て法然上人の選擇集に「淨土の教へは時機を叩て行運に當

る』と仰せられて未代の我等が運にかなふれば、唯、有、淨土の一門に極まる。

萬善自力、貶勤修、圓滿德號、勸專稱

前の二句は二門の通塞を明し、今の二句は二行の得失を判するの意なるなり。爰を御和讃には「鸞師のねしへをうけつたへ、綽和尚はもろどもに在此起心立行は、此是自力とさためたり」と仰せられた。此婆娑に有て菩提心を起し、諸の修行をつとむるは皆な自力なりと云ふ、扱萬善自力とは、六度萬行等の修行のことで、即ち聖道の難行なり。此聖道の修行は我れと我が手で勤め勵むゆへに悉く萬善自力と云ふ、貶勤修とは、万善の法体は結構なりのであるうけれども、像季末法の愚鈍の衆生は、かゝる自力の諸善を勤修して、佛果を証すべき機に非ざるが故に、道綽禪師餘善をさらひすて、貶勤修と仰せられ、成らぬ無駄骨折るよりも、心易くして勝れた南無阿彌陀佛の名號力で、何の造作も煩ひもなく、淨土へ參るが近道じやとある。御催促ぢや、物体自力

の修行は成じがたいもので、自子菩薩は一念の瞋患の爲めに、六十小劫の修行が無に成りて、元どの白凡夫となられた如く、切角修行しかけても、少しのことでも跡戻りをする。上代、上智、上根の人でさ、是れじやもの増して、況んや未代、愚痴、下根の各々、方や我々に、何として勤まらう。逆ても、叶はぬ故に、思ひ切りて、彌陀の本願念佛門に皈せよとある御勤めじや。次に圓滿の德号とは、圓滿の二字はまどかに満つると云ふことで、少しも欠け目のないこと。丁度十五夜の月の如く、欠け目のないのが圓滿のこゝろ。今南无阿彌陀佛の名號には、一切の功德、一切の善根を御成就なされて、少しも欠け目がない故に、圓滿の德號と云ふ。德號とあるは至徳の尊号と云ふことで、先づ外典の上に於ても、舜の徳を至徳と云ふて、聖人の徳は常なみ人の徳とは異り、勝れてあるゆへに、至徳と云ふ。今阿彌陀如來の御成就なされた名号も、不可稱、不可說、不可思議の大善、大功德の攝まりてあるいは、れば、釋迦如來の四辨八音でも、説き盡されぬのが、阿彌陀如來の万行圓備の嘉号とある。南无阿彌陀佛の六字

じや、然に御和讃に「五つの不思議をとくなかに佛法不思議にしくぞなき佛
 法不思議といふことは彌陀の弘誓になづけたり」とありて阿彌陀如來の本
 願はど不思議はない。又は名号不思議の海水とも阿彌陀至徳の御名とも仰
 せられたとへ百千俱胝の劫をへて百千俱胝のしたをいだし舌とて无量の
 聲をして彌陀をはむるとも盡させぬのが南无阿彌陀佛の御開れなれば深
 く信せよとの御すゝめじや。專稱とは具さには專念稱名と云ふことで。其專
 念稱名と云ふは「一向專稱彌陀佛名。行住坐臥不問時節久近。念々不捨者。是
 名正定之業」とありて之れを道綽師の上では先づ御和讃に「一形惡をつく
 れども專精にこゝろをかけしめてつねに念佛せしむれば諸障自然にのぞ
 こりぬ」と仰せられた。時に此の正信偈の專稱の稱はとなへると云ふ文字安
 樂集及び今の御和讃では精進の精の字が書いてある。精の字は米邊に青ひ
 と云ふ字で物の純粹なるを精と云ふ。米を搗いてつきぬいたる處を精米と
 云ふ。今も其如くで雜行雜修の皮もぬかも洗ひ落して仕舞ふた。一向專念无

量諸佛のうつくしい願解に成りた處がまことの他力の御信心と云ふもの
 此信を得て行住坐臥たゞ一筋に喜ぶのが上々精米の他力打ぬきの同行じ
 や。扱又此正信偈に稱の字を書きたまふたも稱功をたのみ力らにするので
 は決してない。是れは行々相對に約して稱の字を知らせたまへども眞實信
 心必具の名号を取り出して唯一心に稱へ喜ぶとあるのじや。相手が萬善自
 力の行ゆへに其數多い自力の難修の行法に對して他力易行の念佛は唯一
 行にして其上行儀も作法も入らぬ心得易い行法なれば万行の難さを捨て
 一行念佛の易行の法に皈せよとの御催促じや。

三不三信誨懇懃 像末法滅同悲引

扱この三不三信の句は取り分け大切なる謂れで取り紛れると聽聞が致し
 にくい故肝要に心得ねばならぬ。先づ懇懃して大体から申さば此三不三信の
 御教化は元と曇鸞大師より御相傳の法門で源と論註の中に「稱名憶念无明

猶在不_レ滿_ニ志願_一如何如_レ實修行_トと名義と相應せぬ故じやと仰せられて其
 不如實修行と名義不相應と云ふは。如來は實相身なり爲物身なりと知らぬ
 故じやと仰せられた。又た三色の不相應がありて信心不諱と信心不一と信
 心不相續との分けがあるゆへに志願を滿さすと云ふて往生が叶はぬと仰
 せられた。其曇鸞大師の御教化を相傳して今念頃に御すゆめなされたゆへ
 誨慇懃とありて誨へ慇懃なりと仰せられた。夫故に御和讃では此三不三信
 が曇鸞大師の下にありて不如實修行といへること。鸞師釋してのたまわく。
 一者信心あつからず若存若亡するゆへに。二者信心一ならず決定なきゆへ
 なれば。三者信心相續せず。餘念間故とのべたまふとあり。又「三信展轉相成す
 行者心をとゞむべし。信心あつからざるゆへに決定の信なかりけり。決定の
 信なきゆへに念相續せざるなり。念相續せざるゆへ決定の信をなざるなり。
 決定の信をなざるゆへ信心不諱とのべたまふ。如實修行相應は信心ひとつ
 にさためたりと仰せられて順逆展轉を御念頃に述べさせられ。此正信偈で

は唯一句に三不三信誨慇懃とばかりある。是れ影略互顯と云ふもので互い
 に顯はして御知らせなされたものじや。扱其信心不諱と信心不一と信心不
 相應と不の字の三つある方を三不と云ひ。信心決定心相續心と云この三が
 三信と云ふもの。此分けを誨へて下さるが今の偈文の意なるなり。誨の字は曉
 教なりとありて心易ふ合点しようなら能く寐て居るものを夜が明けた
 らさあ起よとゆすり起して目をさめさするが曉教なり。无明の長夜に寐て
 れる。御座の我々を煩惱の目をさまして下さる御教化ゆへに誨と云ふ。慇懃
 とは委しく丁寧に念を入れること。盲目の手を取りて引くやうに。鸞師の御
 教化をもう一重打ち返して念頃に若し能く相續すれば。即ち是れ一心なり。
 只よく一心なるは。即是ち淳心。此三信具足して若し生ぜすと云は。此こと
 はりなしと事細かに御化導なされたを。今三不三信誨慇懃と仰せられた。此
 御教化の如く大体を合點して置て。夫より三不三信を細かに申せば。又三種
 の不相應がある。此不相應と云ふは阿彌陀如來の本願に相應せぬこと。善道

の御指南にも本願に相應せぬものは雜修の失で千人の中に一人も往生は
叶はぬぞと仰せられた。丸い箱に四角なる蓋は相應せぬ。曲た刀に直ぐな鞘
は相應せぬ。阿彌陀如來の御本願に相應した行者でなければ。淨土へは參ら
れぬとある。扱淳心とは淳の字は質なり朴なりと訓じて。山より伐り出した
丸木のまゝにて。けづらすみがかぬ其なりを淳朴とも質朴とも云ふなり。今
も彌陀の本願其儘を善知識の御教化の通りすなはにうけて行者自力の鈍
も用ひず。御廻向の山出しの儘を淳心と云ふ。然るに自力の不淳心は若存若
亡とて。且つは信じ且つは疑ふ。或る時は往生一定と喜び。或時は往生いか
どあやふみて。喜びが薄ひ。淺ひのが不淳心と云ふもの。二に一心とは一筋に
餘の方へ心を振らず。彌陀がたしかに信せられたのが決定心と云ふもの。三
に相續心とは他想間雜せず。餘念まじはらず。念々相續して。臨終まで喜びの
絶へぬのが憶念の心と云ふもの。如是く如實相應して。佛意に叶ふを三信と
云ふ。喻へば。膏に油をさして。燈心を入れて。置きたるに。中途にして消へたこ

れは如何なる譯ぞと云へば。水が雜りてあつた故ちや。正味油ばかりなれば
中途に消へることはなひ。これは雜りものがなくて。一つ油らの正味斗とヒ
や。今も其如く一念の御約束から臨終まで。往生一定の眞實信心の正味から。
急度相續する筈なれども。雜行雜修の水が雜ると相續はせぬゆへ。大事に心
を止めて御念頃なる御教化を信すべきことあり。

像未法滅同悲引

さて像未とあるは像法ねはりて未法万年の法滅の時分の衆生まで此本願
を以て導て下さるゝと云ふこと。凡そ正像未と云ふに付て。四通りの異説あ
りて。一には正法像法共に千年づゝとあり。之れ大悲經の説二に正法五百年
像法千年とあり。之れは大集經摩訶摩耶經賢劫經の説三に正法も像法も五
百年づゝとあり。之れは大乗懺悔經の説四に正法千年像法五百年とある。之
れは悲化經の説かくの如く經説まらゝなれども。眞宗相承の祖師方は皆

な正法五百年像法千年の説を取らせられた。扱この正像末の分けは教行証
 の三法具足したるを正法と云ふ。即ち釋迦如來滅後五百年の間は人の
 根機上根なるゆへに教への如く修行して證果を得ること。佛在世の時と同
 じきが故に正法と云ふ。二に像法の時とは像は似たりと云ふ。あり行あ
 り正法の時に似たるが故に像と名くといへども證をうるもの無し。三に末
 法の時とは已に正像の二時れはりて。末法萬年の間には時は末世になり世
 は五濁盛にして人の機下根となり罪は深く障りは多し。唯教のみありて行
 証かなはぬ時なれば。自力難行の道をつとめて証りうるもの一人もなし。大
 集月藏經にのたまはく「我末法時中億々衆生起行修道未有二人得者」
 の佛の未來記最も信すべし。扱其末法の中にも初の頃は教法ありといへど
 も終ひには經道滅盡と云ふ。三法共に滅盡す。この時には聖道の御法は悉
 く龍宮に隱没してしまふ之れを法滅と云ふ。是れは今からまだ間だのある
 ことこのやうに思ふと間違ふ。即ち今日只今が取りもなはさず法滅じや繪

像木像は有りながらも眞實に敬ふ者がない。敬ふ心も重んずる心もなけれ
 ば佛けと名を付た斗り御内佛と云ふばかり。江戸繪や土人形と同じことに
 思ふ。貴卷赤軸の御經文も經藏に納めたばかりで拜讀もせねば辨へもせず。
 他に教へて化益することもなく唯だ頭を剃り袈裟法衣かけたばかりでは
 誠の僧寶ではなひ悲むべきことなり。經道滅盡三寶滅亡とは此時じや然る
 に大無量壽經には「我以慈悲哀愍特留此經一止住百歲」と説かれたれば法滅百
 歳の末までも阿彌陀如來の御本願ばかりは殘させられて衆生を濟度した
 まふとある。同悲引とは同とは同等の義にして分け隔てのなひこと。悲引と
 は大悲引接と云ふこと。是に二義ありて。一には彌陀釋迦二尊の同悲引とし。
 二には導緯に付けて禪師の悲引とす。二尊の大悲衆生を隔てなく引接した
 ふこと論なし。二に導緯禪師の悲引と云ふも是れも今師に限ると云ふ事は
 なけども先づ聖淨二門分別して。當今は末法已に五濁惡世なり唯淨土の一
 門のみありて通入すべき道なりと教へ玉ふ。其道緯禪師の悲引と云ふも本

と御自身の御胸から出たのではない。願作佛心は即ち度衆生心で、逆門の御姿で云ふときは御自身の難有と思召す領解の喜から御化導なさるゝことなれども、若し本門から云ふときは七高祖は皆な浄土から御出ましなされた。遠相廻向の方々ゆへに相承の御教化が即ち阿彌陀如來の本願力廻向の御慈悲となる前に生るゝものは後ちを導き後に生るゝものは前を訪ひ、連続無窮にして生死海を尽さん爲めに唯有淨土の一門を教へて悲引し玉ふなり

一生造惡値弘誓 至安養界証妙果

扱この二句は安樂集に「縱令一生造惡臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺」とある。願文を引て御教化あらせられ、御和讃には「縱令一生造惡の衆生引接のためにとて稱我名字と願じつゝ若不生者とちかひたり」と仰せられた第十八願の御文では十方衆生とある。此十方衆生と云ふは智者

聖人や善人のことかと思ふが左様ではない。御本願の御目的は縱令一生造惡の御座の吾々がやうなる徒づらものをも目的正處被として御成就なされたと云ふことを知らさうとて、觀經の下々品を引き合せて一生造惡具諸不善の惡人が臨終の十念で火の車が轉じて紫金の蓮臺思ひもよらぬ往生を遂ぐることを知らせしため、一生造惡と仰せられた夫れに付て間違はぬやうに篤と聽聞せねばならぬは經文でも臨終の十念とあり、只今も臨終の十念と仰せられたゆへに惡う合点すると臨終にこの十念がそるはねば往生を仕損ずるやうに心得て臨終の正念を願ふやうなことになる。大なる了簡遣ひじや、觀經の御教化でも安樂集の御意ろでも臨終々々と仰せられたは、後生心のない徒らものを臨終の十念で御助けなさるゝと云ふことを知らしよとて臨終と仰せられたのじや平生に往生治定の領解を決定すれば夫れに過た難有ことはない。其平生に領解の定まつたものなれば臨終まつことなし來迎たのじことなし、息の切場にはたとひ一廻半句の念佛が

唱へられいでも往生に間違のある善はなひ一念の立處に於て佛願力の不思議として業事成辨と往生をさだめて下されたれば臨終に善し惡しの氣配りはいらぬ出入の息が止まり次第大涅槃に間違のなひが御當流の御教化ぢや。値佛誓とは本願を信すること耳にはとれはと聞ても心ろに信せぬものは値たとは云はれぬ雨に値ふたはぬれたが印るし本願に値ふたは往生一定と領解の出來たが値佛誓と云ふものぢや其信心願解の人が淨土へ往生を遂げて彌陀同体の証りを開くことを至安樂界証妙果と仰せられた此妙果を此の土で証るとあるが自力聖道門の教へ安樂界へ至りて妙果を証るが他力淨土門の御教化じや妙と云ふ字はこゝろもことばもねよばれぬを妙と云ふ故に極妙とも微妙とも云ふさあ同行中一生惡を遣れとも我等が現在の有様は昨日も煩惱に身を苦しめ今日も妄念に心を悩まし昨宵なせしも無間の業今朝作るも惡趣の因去年も今年も來年も煩惱に骨を折り罪業に身を苦しめ言ふも語るも惡道のたね思ふも巧むも地獄の根なり

煩惱に月日を送り惡業に日夜を過す淺間敷身なれども今度は如何なる仕合せやら宿善多幸にしてあひがたき彌陀弘誓に値ひたてまつり本願の證れを聞きひらき眞實信心を獲得すれば娑婆の御縁の盛き次第臨終捨命の夕べには即ち穢身すてはてし法性常樂の淨刹に往生を遂げ精微妙極非人天虛无之身无極體とある彌陀に異らぬ御証りを開かせて下さるが彌陀の本弘誓他力の不思議力なればいそいで信せよ彌陀をたのめよとの御催促と仰ひで信すべきものなり

善導獨明佛正意

扱是より下は眞宗相承の七高僧の第五番目終南の善導大師の五部九卷の御聖教の大意の惣括して弘願他力の御開れを念頃に御教導なるのぢや先づ此善導大師の御傳は異説が區々であるが今諸説を和會して辨すれば此善導大師は唐土臨緇と云ふ處の人にして佛滅后一千五百六十二年にあた

りて出世なされた。俗姓を朱氏と云ふ幼にして出家し玉ひ道禪師の御弟子となり玉ふ。貞觀年中に御師匠道禪師が九品道場に於て親無量壽經を御講釋なさるるを聴聞なされ大ひに御喜びなされて仰せらるるには此れ眞の入佛の津要なり餘の行業を修するは迂僻にして成しがたし唯だ此の觀經のみ速やかに生死を出づる要道なりとて夫より深く念佛門に入り玉ふ。扱この入佛の津要と云ふは佛けになる舟の乗り場と云ふことじや其の舟の乗り場を取り違へたを津に迷ふと云ふ京から大阪へ下りたいと云ふて桂川の邊から下り舟はないかと尋ね歩いても其乗り場が違ふてある故へ舟に乗ることには出来ぬやはり伏見の乗場に行かねばならぬ今御座の同行が極樂参りも船の乗場と同じこと自力聖道の處る違ひしたら決して生死海を渡ることには叶はぬ善導大師が道禪師の御教化に依りて弘誓の舟の乗り場を尋ね得て御喜びなされた通り今日の同行へ教へおいて下さるゆへに定散と逆惡とを哀て光明名号の因縁をあらはし弘誓の舟の乗り場

を教へて下さる。依て末代の者は善導大師や道禪師の御教化を尋ねしうて参れば門違ひするやうなことはない扱大師は夫より淨土門へ御入りなされ御修行なさるることは頭燃を拂ふが如く勇猛精進につとめたまひ又貴賤道俗を御化導あらせられた。又寒中でも身より汗の流るる程稱名を唱へて休みたまはず三十年の間は寐所へ入らせられず帯ひ解ひて御寐なされたことはない。又御行水の外は着物をぬがせたまふことなく又假りにも戯れの言を仰せられず無駄口云ふ間があれば稱名を唱へ眠る暇があれは念佛を修したまふ。又檀越より飲食を上ぐれば是れを大衆に施し御自身は餽食を用ひ又仰せらるるには大聖釋尊すら分衛したまふ我れ何を居ながら供養を受くべきやとて常に托鉢したまひ。願施物を以ては阿彌陀經を寫したまふこと十萬卷極樂の變相を畫きたまふこと三百幅に及ぶ其外廢れたる堂塔や伽藍を修營したまふこと數しれず念佛したまふ度毎に口より光明を放ち玉ふ。高宗皇帝敬感深して寺号を光明寺と賜ふゆへに又は光

明大師とも云ふ。而して永徳二年三月廿七日御年六十九才にして往生したまふとある。扱かやうに承る。何と難行の容に聞ゆるではないか。御當流の御教化とは異ふやうに思はる。が是れ畢竟佛恩の廣大深重なることを思ひしる。相たを見せて下さる。御手本ぢや。決して此れらの行儀を以て。往生の便りになさる。のではない。我等愚痴身とも仰せられ。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫とも仰せられて。偏へに佛願を信じ他方往生を願はれたは。御座の我れらと同じこと。領解の上に違ふところは少しもない。信後相續の上からは成るべく行儀も嗜みせめては心ろ一杯の御報酬をつとめねばならぬ。放逸が好いと云ふ御勤めは一つもない。藥りありとて毒好むべからずの御誠めなれば。信の上からは能く注意せねばならぬ。俗諦門の御育ては定めれかせらる。御掟命のあらんかぎり。娑婆逗留の間。たは及ぶたけ氣を付けるが難有こと。しや。扱箇様に勝れた御徳が具りし善導大師は。日夜稱名を唱へさせたまふに。十稱には十体の佛けが顯はれ。百稱には百体の佛けが顯は

れて念佛の度毎に佛体を現し。光明を顯はし玉ふとあれば。今日我れ等の念佛より幾層も勝れて居やうに思へとも。元と南無阿彌陀佛の名号は名体不二の御謂れなれば。善導ばかりではない。今日我れらが穢い口から申す念佛も一聲々々が光明なり佛体なれども。凡夫の淺間しさには。煩惱に眼こさへられて拜ぬけれども。信の上の稱名は夜の寐覺めの中から稱へる念佛も阿彌陀如來の御姿たと思へば。難有こと。しや。扱善導大師觀經の御講釋を御認めなさるとき。毎夜々々西方から一人の御出家が御出なされて。玄義の科文を御授けなされたとあれば。即ち阿彌陀如來の御指圖で。時機相應の要法を善導大師の御取次ぎ。大切に聽聞せねばならぬ。

其二

扱善導大師の御傳は前座に於て聽聞の通り。獨明佛正意とは。古今指定の御手柄を知らせ玉ふ。この獨の字に付て上み龍樹をはじめとして。天親。曇鸞。道綽。何れも皆此一宗を興行して。佛の正意を明らかにしたまふ。然るを善導に

限りて獨明佛正意と仰せられたは如何なる譯ぞと云ふに之れは七高僧の中
 で善導獨りと云ふのではなく元來より天台の二論主及び曇鸞道綽何れ
 に愚かはない故に上みには顯大聖興世正意と仰せられて七高僧は皆な佛
 の正意を開顯したまふ今善導ひとりと仰せられたは諸師に對すると云ふ
 て天台の智者大師を初めとして淨影大師嘉祥大師なぞと云ふ聖道門の歴
 々の方々が皆な淨土の觀無量壽經の講釋をなされたが根が聖道の自力版
 で見るゆへに本意凡夫の經意を知らず念觀阿宗の隱顯あることを解せず
 附屬廢立の深致を悟らず夫れ故に佛の密意があらはれぬ却て佛の本意を
 失ふ之れに依りて善導ひとり証誠を佛に請ひ毎夜一僧來ると阿彌陀如來
 直々の御指示によりて古今を指定して佛の正意を明らかに顯はしたまふ
 爰を御和讃に「大心海より化してこそ善導和尚とればしけれ末代濁世のた
 めにとて十方諸佛に証をこふ」と仰せられて証とは証明とも証誠とも申し
 て請合ひのこと散善義の中に「南无皈命尽虚空徧法界一切三寶等」とありて

善導大師觀經の御講釋をあそばすに付て十方の諸佛に証明を請ひたまひ
 今我が述るところの義佛の願意に契はゞ夢の中に其靈相を示し玉ふと日
 別に阿彌陀經を讀誦したまふこと三遍阿彌陀佛を念じ玉ふこと三万遍至
 心に發願したまふに不思議や其夜の夢に西方の空中に極樂の莊嚴ごとと
 しく顯現し其後ち毎夜夢中に阿彌陀佛來りて玄義の科文を指授したまひ
 其御指圖にまかせて四帖の疏を御製作あらせられたとあれば即ち如來
 の直説なり故にこの疏を寫す者あらば一字一句も加減すべからず佛經の
 如くせよと仰せ置れた斯の如く能く佛意に契當して佛の本意をあらはし
 たまふゆへに濁明佛正意と仰せられた畢竟する處ろ此獨りと云ふ字を望
 て云ふて見よふならば二通りがある一には今辨する如く諸師に望めて善
 導ひとりと云ふところ其ときは天台大師なぞも妙宗抄と云ふ觀經の講釋
 をなされ其外道綽善導の時分は唐土に於ても大曆此觀經が行はれたが兎
 角觀佛三昧とて觀念の念がれもになりて此經の隱彰の實義が顯はれかね

る故にこれらの諸師に對して獨りも御意あらせられたものじやと云ふが
 一義何程善導大師が觀經の御講釋をなされなれたら佛の正意があらはれ
 ぬ扱この觀經の中で大事な處が下々品の念佛往生じや是から本願の御手
 柄も佛の正意も顯て御坐の我々が第十八願の御働を見附る處じや天台大
 師も佛の臨終の十念で火の車が紫金の蓮臺と替り鉄卒が觀音勢至と成り
 て淨土へ迎ひ取るゝは散亂の念佛では是ほどの働はなひ正しく觀念の念佛
 の勝た功德じやと御見込なされた若し左様であるならば今日の我々は平
 生からが定水を凝すと雖も撒浪しきりに動き心決を觀すと雖も妄雲猶覆
 どありて片時も心ろの靜まる間はない況や臨終斷末魔の苦み半身火の車
 に腰掛けたものが觀念が出来るものではない仍て善導大師は御正意を顯
 して觀念の念佛ではない「汝若不能念佛者應稱無量壽佛」如是至心令念佛不
 絶具足十念稱南无阿彌陀佛等とあれば觀念のつとまらぬ散亂放逸の
 徒ら者が其機のなりで南无阿彌陀佛と稱へたら其の口稱の念佛で炭が焼

して清涼風となり火の車が化して蓮臺となり目出度往生を遂ぐることに
 や時に口先で稱へたばかりの念佛に其容な働らきの出来さうな善はなけ
 ども今の十聲の稱名に自づから十願十行具足して南无と云ふは飯命なり
 亦是れ發願廻向の義なり阿彌陀佛と云ふは即ち其行なり此義を以ての故
 に必ず往生を得ると仰せられて願行具足の南无阿彌陀佛ゆへ地獄へ片足
 踏み込んだものが思ひもよらぬ極樂淨土へ往生を遂ぐるぞと御催促なさ
 るゝのじや爰が獨立獨歩の場處で他宗の大師の夢にも御存じのない御教
 化ゆへに獨明佛正意と云ふ扱又七高僧と並べてたくときは御安心も御働
 めも少しも違ひはなければも觀經の上の佛の正意を顯したまふを獨りど
 云ふ成程淨土の觀經は相承の經で曇鸞大師も道綽禪師も觀經を據となさ
 れたが望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名と恐れげもなく付き出して弘
 願他方の本意を顯はしたまふたは善導大師じやゆへに獨りも仰せられた
 其譯けは此觀經は大經と違ふて六ヶ敷い御經じや三部經の説相で云へば

大經は丁度中秋十五夜の満月に。一天の村雲もなきが如く弘願眞實の月の丸出しが大經の姿た。此月に自力の村雲が掛りて月の笠をきたやうなが阿彌陀經の姿た。然るに觀經は弘願眞實の月を定散の村雲で隠してあるやうなのが觀經の説相じや。仍で此經には隱影顯密の義ありと云ふて上都に説けてれる顯説から云へば九で自力定散の觀念の經なれども隱影から窺へば定散の村雲の中から弘願眞實の明月がありと顯はれて是本法藏比丘願力所成と四十八願の影を増し念佛衆生攝取不捨と光りが圓かにあらはれ「汝好持是語持是語者卽是持无量壽佛名」と村雲がさりと晴れてある其の隱影の實義を見分けた人が少ないゆへに善導獨明佛正意と仰せられた古歌に「雲よりも高さ處に出て見よ少しも月に曇りやはせん」と云ふ如く觀經の下から見ると雲が懸りてあるやうなれども大經の雲の上に出て見ると明らかなる月が見へる愛を知らせて下されたのが卽はち御座の我れらの爲めじや故に未代濁世の爲めにとて十方諸佛に証をこふとある今は

其御骨折りが空しからずして定散自力の思ひを離れ一向專念の行者に成りたは生々世々の大仕合せ火の車が消へて觀音勢至爲其勝友と廿五菩薩に手を引かれ三世の諸佛に守られて報々光明の御淨土へ參るは信の得られた身の上なり扱て七高僧と並べた邊では善導大師より後ちは勿論其前の天竺の二祖雁門西河の御二人も御存じなひではなれども明らかに御示しなされたは今師ゆへ勝れた邊で獨明と仰せられたもの此佛の正意とあるが釋迦彌陀十方諸佛の御本意其の御正意の御勤めふりはと云へば一向專念彌陀名號一筋に阿彌陀如來を信し脇目をふらずに御慈悲にすがるが御正意に契ふ故十人は十人ながら百人は百人ながら往生に疑はないと仰せられた此御教化があるまいならば御座の吾々が定散自力の根情を離れて一向專修の美しい領解の得られやう筈はなれども遠くは七祖の御念頃なる御化導夫れを和らげて御催促下さる祖師善知識の御蔭げによりて安心決定の身になりて御恩喜ぶうれしさは何に交はる中からも只南无阿

彌陀佛く〜と唱へ喜ぶべきなり。

矜哀定散與逆惡

定散とは前席に申す通り。觀無量壽經の顯說にして始めに十三の觀念を御説きなされたら定善と云ひ次に三福九品を説かせられたを散善と云ふ其散善の中に就て上六品は善機なり下三品は十惡五逆の惡機なり定と云ひ散と云ひ善と云ひ惡と云ひ皆な觀經の利益に預かる機類じや他師の見込みでは此觀經の始めから終りまでを皆な觀念として上根上智の人の淨土參りを遂ぐる經じやとなされたを善導大師が佛の正意をあらはして古今を楷定して光明名号の因縁をあらはし下々品惡機の往生は本願他力の御手柄ぞと明らかに御知らせなされたことを矜哀定散與逆惡と云ふ扱立義の中に「定は即は息慮凝心散は即ち廢惡修善」と仰せられて定善觀と云ふは端坐して心を静め觀念の念を凝らして極樂淨土の依正二報の莊嚴を觀

想することじや其觀じ容を略して聽聞しようならば十三の觀念がある先第一が日想觀と云ふて極樂の方角を知るために日輪の隠れなさるゝ西方を觀じ「令一心堅住專想不移」と云ふて決して心を外へ移さず専ら其日輪の隠れなさるゝ方を拜み心を凝らして居ると終に閉目開目皆令明了とて目を閉じて居ても日輪が明らかに拜まれる是れが第一極樂の方角を知るための觀念で阿彌陀如來の御座なさるゝ極樂淨土は西方にある彼の日輪の隠れなくれなさるゝ處が往生の門口じやと觀じて極樂の方角を知るのが第一の日想觀じや次に水想觀と云ふは「見水澄清亦令明了無分散意」と云ふて水を觀することじや此水を觀するのは淨土の大地を觀する始まりでこの娑婆世界のやうな穢惡不善の不平等な衆生の業力から顯はれた處は矢張り衆生の意の不平等が依報と云ふ山川國土に顯はれて富士の山の如き高ひ處や湖水の如き深ひ處が出來る依て御和讃に「愛憎違順するとは高峯岳山にことならず」と仰せられた極樂淨土は阿彌陀如來の平等心

より御成就なされて高ひ低ひの無ひ御心から願はれた浄土ゆへ大地に高下がないことを水の面になぞらへて観察するのじや水の面は湛然寂靜と靜かに澄みわたりて少しも高ひ低ひが無ひもの故この水想觀を凝らして極樂の大地の平等なることを知る次に「既見水已當起冰想見冰映徹作琉璃想」と説かせられて氷が結で氷と成りた處を觀する氷は表裏映徹とて水精の如くすぎとはる其すきとはりた處で琉璃の想をなす是れ極樂の大地は此娑婆世界のやうに土や砂ではなひ結構なる琉璃と云ふべきすきとはる寶らしや故に氷になぞあらへて極樂の地面を觀想し夫より七寶金剛は其の琉璃の地上に建て黄金の繩を以て雜廁間錯して其の大地の上に七寶を以て界をなし百寶所成の宮殿樓閣其上にあると淨土の莊嚴を觀するのが第二番目の觀念じや此より次第に極樂の八功德の池を觀し池中の蓮花を觀し七寶の樓閣等を觀し或は觀音勢至の具身を觀す斯の如く十三通り

の觀念を成する是れを定善の十三觀と云ふ成程これは結構なることで極樂淨土の様々の御莊嚴から阿彌陀如來の御姿たまでを爰に居ながらいろくくに拜まれるなり難有さも深かるうが散亂放逸の我々が心では雲に掛橋霞に千鳥迎も一觀を成することも叶はぬ扱て散善と云ふは其意は散亂でも廢惡修善と云ふて諸の惡を止め善を修することじや是れが上六品の機類で善人仲間の衆じや下三品となると五逆十惡具諸不善觀念どころではない廢惡どころではない惡業煩惱で練りかためた徒ら者が臨終の念佛で紫金の蓮臺へ打乗りて極樂へ往生するぞと御説きなされた其定散の善人と下三品の惡人と比べたときは天地雲泥炭と雪似ても似付かぬ事なれど善導大師の御意ろでは觀經の本意本願の御目的は此の逆惡の徒らものが如來の正所被と知らせたまふ故今矜哀定散與逆惡と善機惡機を押し込めて定善散善の字に目を掛けず下品の惡機へ引き下し弘願他力の御慈悲にすがるやうに御勸めなされたのが大師御一生の御化導じや去りながら本願の手元から云へば惡人の往生が御目的じやが定善の人が惡いとは云

はれぬ。癡立の法門では實に定善十三の觀法より。一聲の念佛が難有けれど。も夫れを一概に心得て善人は惡るいと云ふ事になりては。却つて邪見となる。其善を杖にさへつかねば。往生の邪魔にはならぬ。夫を惡ふ心得へると。空也上人が一邊上人の念佛を見て。躍りはね稱へてだにも叶はぬに。居眠りしては何かあるべきと。これは散から定を誇りたのじや。一邊上人が空也上人の見て。躍りはねて庭に穂ひろう小雀が。鷄の心を何と知るべきと。是れは定から散を誇りたのじや。二つながら偏執がある。定散共に廻して寶國に入る。と開會したれば。手廣ひ如來の本願じやもの何の御漏しは有る筈がない。定も佛説散も經説なり。去りながら佛の正意を顯はすときは。逆惡の徒ら者を御助け下さるのは。阿彌陀如來の本願じやと云ふこと。扱粉哀とは。おはれむと云ふこと。おはれむとは。不便に思召と云ふこと。多くの人が皆定散に滞りて。十惡五逆の徒ら者は。本願に漏れはせぬかと。自暴自棄して居るゆへに。必ず御漏しはなさらぬぞ。其身其儘彌陀のためよとある。御親切なる御化導を

粉哀と仰せられた。凡そ物を哀むと云ふことにも種々あるが。其中で更らに寄り處のない。喰ふ物も着る物もないものを哀むのが。一番憐愍の勝れたところ。今も其如く定散二善の着るものもなく。善根功德の喰ひものにも。喝へ切た。必墮無間の地獄行きと落ちふれ切た。我々を哀れませらるゝは。善導大師の御憐愍の勝れた御化導じや。昔し叡山の正算僧都の弟子に。正圓と云ふて難有ひ御出家が在つた。或る年の冬寒氣が強い夜。あまり寒さが嚴ふて。寐られぬまゝ。ふと慈悲心を起し。様々に着物をきて。蒲團を敷き夜具を重ねて。さへ。このやうに寒ふて寐られぬに。さぞや森の中林の下に。延る一枚薦一重を着て。雪霜にまびれて居るものが。多くあるうが。不便な事じや。睡ぞや。寒くあるうぞと。思召。夫よりそろく。起きて。有り丈の着物をからげて。脊に負ひ山を下らせられ。乞食非人を尋ね廻り一枚づゝ與へて。終には御自身綿入一つになりて。御飯りなさるゝとき。叡山の寺近くに成りたれば。谷隠れに人の泣聲へが聞へる故。これは何んでも。山賊夜盜にでも出逢ふたか。但しは猪狼

みにでも喰はれたか扱てく不便な事じやと思召し道もない處を段々ど
 谷底へ下りて御出なさると一人の乞食が頭から足まで血まぶれになりて
 泣て居る故にやれく汝は何んとして此處に居るぞと仰せられたれば左
 れば私しは此の上の御寺の樹の下に寐て居りましたが余り寒さが殿しい
 ので眠られぬまゝ彼して此こと寐がへりを致す内踏みはづして爰へ落ち
 ましたが躰だ中は此容に疵が付て血が流れ其上疵口へ雪霜がしみこみま
 して苦しう御座ると泣々申すゆへ正圓さてく哀れな事じや何にしても
 其裸ではならぬ此着物を着よとて自身の着て御座る一枚の綿入をぬいで
 與へさせられたれば御蔭様で大分痛みも助かりましたが何卒御慈悲に其
 儒伴も着せて下されと乞ふ故安いことじやと自身は丸裸に成りて儒伴ま
 で施して遣られた今の乞食も大層に喜んで居ると正圓の仰らるゝには
 追付け夜明に間もあるまい私此裸のままでは夜が明けては寺へ飯られ
 ぬ又た明日來て見舞ふてやるから此處に待てれと仰せらるゝと扱ては

彼方は慈悲の届かぬ人じや此の躰の痛む私しを一人此の谷底へ殘して往
 かふとは仁げなひことじや何卒夜の明くまで傍に居てくだされたいと云
 ふ故慈悲深ひ正圓なれば成程尤もなることじやと思召て夜の明るまで傍
 に付いて居てれやりなさんと彼の乞食が云ふには扱てもう夜も明けまし
 たはどに何卒私しを負ふて此上の道まで連れて下されと云ふに依り無據
 脊に負ふて血まぶれの乞食を穢なひとも思召さす木の間をつとふてやう
 く上の道まで出させられたら爰で下してくだされと云ふゆへ下へれる
 してどうじや疵は痛むかと振り返りて尋ねさせらるゝと乞食ではなくて
 師匠の正算が年頃御安置なされた十一面觀音が光明照らして御立ちなさ
 れた正圓は大きに驚いてやれく忝や我が心を引き玉ふ爲め大慈大悲の
 善巧方便不思議の御姿を拜みたてまつることの嬉しやと涙と共に喜び
 なされ其尊像を三井寺の正算の昔しの庵室へをさめられたと選集抄に書
 き殘せり是れ眞に物を哀れむときは我身を捨てゝ人を救助するのが哀

れむと云ふもの夫れに付ては難有きは皆人も知る如く今上皇帝陛下皇后陛下の御製徳日夜に人民を憐れみ玉ふこと今に初まらぬことながら恐れ多くも昨年は明治二十四年

御製 冬ふかさねやのふすまをかさねても

をもふは賤が夜寒ひなりけり

皇后陛下 綾にしきとりかさねてもをもふかな

寒むさをほはん袖もなき身を

右兩陛下の御製歌我々國民たるもの拜聴の度毎に唯だ感涙の外なきなり。今善導大師御座の我れらを哀れみ玉ひ一味に浄土の御手引を鈴哀定散與逆惡とは仰せられた。

光明名号顯因縁

諸佛の所証は平等にして是一なれども若し願行を以て來し收むるには因

縁なきにしも非ず然るに彌陀世尊もと深重の誓願を發し光明名號を以て十方を攝化したまひ但信心をして求念せしむとある往生禮讚の御言を和らげて光明名号の顯因縁と仰せられた佛けの御証りから云へば釋迦も藥師も阿闍も法性も証りに二つはあけれども衆生を濟度なさるゝに其方便に種々ありて釋迦は釋迦で衆生濟度の御方便があり藥師は藥師で度濟利生の御方便がある今阿彌陀如來は光明名号攝化十方とて南无阿彌陀佛の名號と無碍難思の光明との二つを以て十方の衆生を濟度し極樂淨土へ參らせたまふなり其名号は淨土參の因にして光明は淨土參りの縁とある然れば名號六字は父親の如く光明は母親の如し父なくして誰れかたのまん母なくして誰れかたのむ凡そ生きたし生けるものに父と母との因縁のなきものはあらじ若し父母の因縁がなくば生れることはならぬ今淨土へ生るゝも此道理で徳号の慈父在さずんば能生の因かけなん光明の悲母ましまさずんば所生の縁をひかん南无阿彌陀佛の父親がなく光明の母親が御

座らすは蓮花化生と往生することば成まいぞと御意なさるゝ扱御開山の御釋には此上にもう一重ありて内外因縁和合するとも信心の業識あらずんば光明土に至ることなしと仰せられて父母の因縁はありても宿るべき業識がなければ生るゝことがならぬ其業識に御諭へなされたが信心のことで即ち光明と名号の御因縁を以て此私しを極樂へ参らせて下さると思ひ定めて疑ひのはれたのが信心と云ふものじや世間に於ても父母がありても子の無いものがいくらもある夫れは子となりて生るべき業識がなきゆへじや光明名號の因縁は佛の方に御成就なされてありても極樂へ参るべき信心の種ねがなければ往生は叶はぬ又参りたひと思ふても光明名号の因縁がなければ自力の信心では参られぬ故に但使信心求念とありて一心一向唯一筋に他力の不思議にすがり御助け候へと彌陀を信じたてまつれば光明名號の御約束で必ず往生を遂ぐるに疑ひなひ夫れに付て惣じて人の胎内に宿るにも男子は母に愛着して宿り女子は父に愛着して宿る。

其愛着心がなければ宿ることは出来ぬ夫れに付て雜譬諭經の中に昔し一人の羅漢がありて山中に住し小僧をして毎日〳道人の方へ食物を取りに遣りたまふに其途中大河の邊りに堤がある此處に來れば小僧かならず倒れて食物に土砂がつく仍て小僧河に下りて之れを洗ひ師の羅漢に授け故に師匠之れを咎めて何故に斯くは御飯を洗ふぞ肝心の飯の味を洗ひ捨てし仕舞ふと仰せられたれば去れば殊更に洗ふには非ずとて事の由を告げられたば師の羅漢禪定に入りて之れを見たまふに龍神の所作と分りしゆへ直ぐに彼の河の邊りに到り杖を以て打つはどに龍神老人の姿たになりて顯はれたゆへ羅漢のいはるゝには汝ち何故に小僧を日々此處にて惱ますぞと云へば龍神答へていや決して惱ますにはあらねども可愛らしい御小僧じやと其姿を愛する斗で御座るが又何故に毎々此處を通らるゝにやと尋ねたれば彼れは我が爲めに道人の家に食を求むるものなり然るを汝ちのために此處にて倒れ土砂に穢すゆへ之れを洗ふと云ふ今後は決し

て愛すべからずと仰せられたら夫れは氣の毒の至りなり然れば今後は私
 しが御供養申すは邊に外へ取りに遣はさるなどあるゆへ之れを受納あり
 て夫よりは毎日床の上に有りながら入定すると忽ち身を没して龍宮
 に入りて齊を受けて飯らせらる始の間は小僧之れを知らずに居たれども
 或日御鉢の飯を二三粒口ちへ入れて見るに香味比ひなし世間の食物に非
 す師に之れを尋ねたれば師匠は小僧の迷ひの因ねと思ひ其譯を語らざれ
 ば小僧は其の味ひを忘れ兼ね或日師匠入定の時高座の下に隠れて其足に
 すがる禪定力の故を以て師と共に龍宮に入り七寶莊嚴の宮殿に坐して供
 養を受けたるに其龍神の結構なる快樂及び龍女の美麗なるに愛念を起し
 何卒此容なる處に居住したきものぞと思ふたれば師匠定より出で其れ
 を不便に思召し龍には三熱の苦みあることを知らせ必ず愛執の心を去る
 べしと念頃ねんごころに論まをしたまふといへども一念に龍宮のことを思ふて居たれば
 死して忽ち畜生道ちくしやうだうに落ち龍りゆうに成りしと説いてある夫故道心の堅からぬ若

い坊主には長者の榮耀は見せるなど云ふ然れば是一念思ひ付た愛着から
 忽ち畜生道へ落たどある今は是れと引きかへて能發よくいねん二念喜愛心にのうきあしんとあれば
 淨土依正二報を聴聞し極樂參りを喜ぶ愛心あしんが起れば忽ち淨土へ往生する
 其喜愛心あしんをば善導ぜんどうは但信心たしんをして求念もとねんせしむと仰せられ高祖は信心の業
 識しと仰せられた然れば他方の大信心を得れば光明名号の因縁によりて必
 ず淨土へ往生を遂ぐると知らせたまふ謂れなり

開入本願大智海

扱この開入と申すに能所の謂れがありて先づ開入と云ふことを能化に約
 すれば開は開示開導の義なり即ち經文に「教語開示」とも「隨機開導」とも仰
 せられた亦た入は引入の義にて此時は弘願他方の法門を開き示し導びさ
 て引き入れ玉ふことなり次に開入の二字を所化に約せば開は開悟入は歸
 入の義となる即ち能化の方に開き示して導びき玉ふ處へ這入こみ其教

の如く佛智を解了することを開入と云ふ然れば開入の二字の謂れは能化
 の方にも就き所化の方にも就くなり故に今は開の字は能化に約し入の字
 を所化の我れ等が方へつけば辨すべし能化の方にて開き示したまふは何
 ものぞといへば即ち本願の大智海なり在座の我れらが歸入と入りこむ
 場處は何處といへば其開き示して導き玉ふ彌陀本願の大智惠海へ入りこ
 ひより外はなひ扱其彌陀の本願を海に喩へたまふこと先きに唯說彌陀本
 願海の句の下に辨するが如く海には種々の徳がある依て善導大師禮讚に
 は「彌陀智願海深廣無涯底」と仰せられた實に彌陀の本願は廣大無邊にし
 て唯佛獨明了とあれば述ても二乘などの境界では測量しはかりしること
 は叶はぬ其廣大無邊の願海には無量の功德が充滿してある是れを御和讃
 には「功德の寶海みちく」と仰せられた然るに其功德の寶海とあるは取
 りもなほさす南无阿彌陀佛の六字の名号のこと故に一念多念証文に云く
 「功德とまふまは名号なり大寶海はよろづの善根功德みちきはまるを海に

たとへたまふこの功德をよく信する人のこころのうちに速かにとくみち
 たりぬとしらしめんどなりしかれば金剛心の人はしらすもとめざるに功
 徳の大寶その身にみちみつがゆへに大寶海に喩へたるありと御意あらせ
 られた況かくのごとく彌陀本願功德の大寶海には恒沙無量の寶が充滿し
 てあるゆへに金剛心を得て歸入すれば知らず求めざるに速やかに疾く其
 身に満足するなり御和讃に「五濁惡世の衆生の選擇本願信すれば不可稱不
 可說不可思議の功德は行者の身にみても知らせ玉ふなり然るに入り容
 をしらす又た入り容が悪いと寶を身に得ることが出来ぬ喩へて申せば
 爰に一人の馬鹿者ありて海の中には種々珍らしき寶が澤山有るさうじや
 が如何にもして其寶を得んと思ひ色々に工風を爲せし上一の大徳利をが
 らすにて拵へ扱友人を頼みて云ふやう我れ日頃海中に入りて多くの珍寶
 を得んと思ひ様々に工風を考へたるが唯た水中に入れば第一目口鼻等へ
 水がはいるに依り此大徳利を出来へたり我身を此中に入れて海中に入り

珍寶を得ん所得は汝方に願つべければ何卒汝方舟に乗り此徳利の繩を持
て果れやらよと頼みたれば友人も之れを承諾して次の日海に行き船に乗
りて沖に出で扱此邊には寶あるべしとて自身徳利の中に遣入りて海中に
下る暫くして繩を引き上げ何と寶らを取り得るかと思ぬるに如何様海底
には珊瑚を初めとし其他種々の寶有るを見たれども如何にせん身は徳利
の中に在りて手を出すこと叶はぬ故に見たばかりにして一も取り得ぬと
戻りたど申した何と是れは能々の馬鹿の仕業と云はねばならぬ去りなが
ら是れはついの嘘なれども如何じや折角海中へは入りながら入り容が悪
ければ寶らは取られぬ今も本願の尊ひ謂れを聴聞して無量の功徳が充
満と知りても自力の徳利の中に居りては功徳大寶海の寶らは得られぬ耳
に聴聞して聞いた事りて取り得られねば所詮がなひ依りて定数諸機各別
の自力の三心ひるがへし如來利他の信心に遣入せんとねがふべし今善導
大師の御教化は此本願の大智海を開き入り路を知らせて我れらを導き引

入したふ故其の教導の如く一筋に歸入すれば天善大功徳は身にみつるな
り扱此本願海は自力では迎へ入ることばならぬ難中之難无過斯の寶海な
れば如來の御慈悲の御手引でなければ入られぬ夫に付て昔し雄略天皇の
御宇に丹後の國に浦島と云ふ漁師がありしが或日舟に乗りて海に往き釣
を垂れてありければ大きな龜が何處ともなく浮み來りて舟端に寄り着
を顯はして是れに乗れよと云はぬばかりの様子ゆへ浦島なにぞなるなく
打乗りたるに暫く彼方へ遊ぶよと見し間に不思議なるかな忽ち波間が開
けて一道の路が顯はれ直ちに龍宮に達す彼の龜は即ち龍神の使ひにし
て浦島を龍宮に導びき大海の水中を難なく龍宮に至りて八百餘年の星霜
を歴て還り七世の孫に逢たりと云ふ物語り昔人の能く知るところなり同
じ海に入るにも龍神の使ひとして大龜に導かれ無難に龍宮に入りし如く
今も開の字は彼方から開ひて導き玉ふゆへ歸入するに造作も面倒もない
恐れながら大心海より願はれたまふ善導大師は即ち極樂淨土より彌陀

如來の使ひとして我れらを導き無漏法性の都入を案内したまふ御化導なれば其教の如く歸入すれば我が計らひは更らにあくして今度は芽出度淨土へ往生を遂げやがて還相の働らきは七世の瑞どころではなひ有縁の衆生を悉く濟度するのが信心の身上なり

行者正受金剛心

扱この御文に行者とて指しなされたは取りもなほさず御座の我れらがこの正受の正の字は邪に對すると云ふときは邪はよこしまと云ふことで本願のれ謂はれを横しまに聞きなし自力雜行の雜はるを邪心とも邪定聚の機とも仰せられた今は此の自力雜行の邪心を離へず正直正當に佛意に契ふを正と云ふ受の字は信受と云ふて如來の方より御廻向下さるる金剛心を其儘我が心に受くること即ち本願他方の御信心を眞實に眞受けにするを正受と云ふ茶椀に水を受け杯に酒を受るとさも傾いては翻してしま

ふ。如來御廻向の他力の信水を行者飯命の茶椀に受くるも横しまに受けては翻してしまふて我物とはならぬ故に眞直に受けて喜べとある御化導じや扱金剛心と云ふは如來の方より御廻向下された他力の大信心が堅固にして動かすたじろかさるところを金剛心と云ふ金剛は御喚へで金剛とは黄金の中の精牢なるを名けて金剛と云ふ然れば喚へ百年の間だ火の中に入れても焼けもせず融けもせず千年の間だ水に入れて置いても朽ちぬのが金剛の徳じや今行者正受の信心は堅固不動なるゆへに善導大師は此心深信由若金剛不爲一切異見異覺別解別行人等之所動亂破壊と仰せられた又御開山は信の卷に「本願力廻向の大信心海なるが故に破壊すべからず等」と仰せられたれば凡夫自力の信心には非ず他力廻向の大信心なり今善導大師が金剛心を御知らせなさるるに付て四重の破人を擧げて此心深信堅固にして破壊動亂せざることを知らせたまふ先づ初め人ありて云はく我れは一切の經論釋に就て念頃に見ねたれども何れの經論を見ても其方

の如き罪業深重の徒ら者が往生する法はない夫れは假設じや方便じや程に念佛をやめて外の修行をせよと云はうと儘上其時行者答へて御前が北容に經論を引て証據にして仰せでも私しが心は決定疑心は起りませぬ夫れは何故ぞなれば私しが信する淨土經は同じ釋迦の佛説でも處別特別對機別とありて處も違へば時も異なり相手の機類は上根上智の人ではない韋提希夫人と云ふ女性が相手諸佛に捨てられた五障三從の女人を所對にして五濁惡世の衆生の往生することを説かせられた經説を信するゆへに聲聞緣覺菩薩方が御出でなされて往生ならぬと仰せられても私しは疑ふ心ろは微塵も起りませぬと決定して喜べ夫から次に初地已上の菩薩が顯はれて口を揃へて往生ならぬと仰せられても夫れを聞入れず一念の疑心も起さず佛けに眞實決了の義佛語に虚妄なし御前方が眞實の菩薩なら佛けの教へに違はぬ善じや然るを如來が往生すると仰せらるゝに參られぬと仰せらるゝ御前方はまことの菩薩ではあるまいと菩薩が云ふても疑は

ず又次ぎに佛け方が顯はれて往生かなはぬとありても一佛一切佛なれば佛けと佛けの御仲間に通ひはない善じや然るを釋迦如來が往生するを仰せらるゝに往生ならぬとある御前方は眞實の佛けではあるまいと更らに心ろのたじろがぬを金剛の信心の委たじやと仰せられた斯の如く堅固の領解が何として自力で生ずる譯けはない御和讃に「信心すなはち一心なり一心すなはち金剛心金剛心は菩提心この信すなはち他力なり」とありて阿彌陀如來御廻向の信心なればこそ誰が何と云ふても動かすして往生一定御助け治定の領解に基いたのじや。

慶喜一念相應後 與韋提等獲三忍 卽証法性之常樂

扱慶喜と云ふは歡喜と云ふと同じことにしてよるこびくど書いた文字で上の慶の字は身の喜び下の喜の字は心の喜び即ち信を得れば身も心もよるこびと云ふこと然れば憶念相續が心のよるこび參り下向や禮拜恭

敬三業に發願する行作は身みのよるこびと云ふもの心と云ひ身と云ひ慶喜けいきの出るのは皆往生治定の願解から願ねがれる故に共に信心しんの相たと云ふもの思おもひ内うちにあれば色外いろほかに顯あらはるゝの道理道理じや一念一念とは信心しんの体たいで往生一定せい御助け治定ちぢぢと思ひさだめた境處きやうじよを一念一念と云ふ此一念この一念の處ところに具もはる慶喜けいきなるが故ゆゑに慶喜けいきの一念一念と云へとも慶喜けいきの相あひを見ることにはあらず慶喜けいきの姿すがたたは後々相續あひつぎの上うへに於おて顯あらはるゝなり後念ごねんに顯あらはるゝ慶喜けいきなれば必ず一念一念の當体あたひに具もはるべきこと道理道理必然ひつぜんなり故ゆゑに成就じゆじゆの御文ごぶんには開信かいしんの一念一念を指さして信心しん歡喜くわんぎと仰おほせられた之れを御和讃ごわさんには若に不生ふしう者もののちかひゆへ信樂しんらくまことにとさいたり一念慶喜一念けいきするひとは往生わうじやうかならずさだまりぬとある相應おたふしあひとは函蓋相稱くわんがいさうじやうと申して圓まひ器うつは圓まい蓋かた四角しやうかくなる器うつに四角しやうかくなる蓋かたをすればしつくりと合あはする如ごとく阿彌陀如來あみだにょらいの御本願ごほんがんには自力じりき難行難修なんぎやうなんじゆの四角しやうかくな蓋かは叶あはぬ圓融えんじゆう圓滿まんまんの法ほふなれば如實にょじつ修行相應じゆぎやうおたふしあひは信心しん一つにさだめたりとあればもろゝの難行難修なんぎやうなんじゆ自力じりきのこゝろをふりすてゝ一心いしん

向むかの御願解ごげんげでなければ佛意ぶつゐに相應おたふしあひはせぬ後ごと云ふは之れに二義にぎありて一義いちぎでは同時どうじ中に且かつらく前後ぜんごを立てゝ一念一念後ごと仰おほせられた即すなはち懸鈔けんじやうの中ちゆうには信受しんじゆ本願ほんがん前念ぜんねん命終めいしゆう即得すなはち往生わうじやう後念ごねん即生すなはち玉たま如ごとく是れ一念一念中の前ぜん後ごにして本願ほんがんを信受しんじゆするを前念ぜんねんとし即得すなはち往生わうじやうを後念ごねんと知らせたまふ喻たとへば日出ひいででゝ開ひらみ去さると云ふが如ごとく明來めいらい開去かいきよは實じつに同時どうじなれども開ひらの去さるは日光ひやくわうの方かたらなれば日出ひいででゝ後開ごかいさるなり今いまも往生わうじやうの定ぢやうまるは信しん一念一念の即得すなはちにして更さらに問とに髪かみを入いれざる極促ごくそくなれども往生わうじやうは今の信力しんりきに依よりてとあれば本願ほんがんを信受しんじゆするの力ちからにて佛ぶつの方かたより往生わうじやうは治定ちぢぢせしめたまふ信しんせざれば往生わうじやうは定ぢやうさらぬ此こゝの理りを以もての故ゆゑに前念ぜんねん命終めいしゆう後念ごねん即生すなはち同時どうじに前後ぜんごを立てゝ知らせたもふなり是れ一義いちぎ次つぎには不相應ふたふたの信前しんぜんに對たいして相應おたふしあひ一念一念の場ばを後ごと云ふ章提ぢやうだいとは具もはるに章提ぢやうだい希夫人しきふじんと云いふ即すなはち頻婆沙びんばさ羅王らわうの御后ごごうさなり佛意ぶつゐは契當けいぢやうし本願ほんがんに相應おたふしあひする信しんの行者ぎやうじやは此こゝ章提ぢやうだい希夫人しきふじんと同じく三忍さんにんを獲とると知らせ玉たまふ扱あて三忍さんにんと云ふは喜忍きにん悟忍ごにん信忍しんにんのこと

是れを總じて一口にいへば無生法忍と云ふ。觀經には「應時即得无生法忍」と説かせられ、又た「廓然大悟得无生忍」とも説かせられた。此三忍を獲ると云ふことは中々深妙の謂れにして、昔佛智不思議のなしわざなれども、今心易く申すば、先づ喜忍と云ふは、聞其名号信心歡喜と本願の謂れを聽聞し、昨日までは律敵法敵となり、徒ら者が後生の大事が身にしみて、名号六字の謂れを聞きひらき、即ち信心さだまりぬれば、淨土の往生は疑ひなく思ふてよるこふ心を喜忍と云ふなり。悟忍とは明信佛智と明らかに、佛智を全領したる味ひを悟忍と云ふ。次に信忍とは信心成就のすがた、是れ皆な如來の御慈悲から我れらに得させたまふなり。ゆへに御開山の御言に「金剛の信を得るものは、即ち韋提とひとしく、喜悟信忍を獲得すべし。此れすなはち往相廻向の信心総倒するが故に、不可思議の本誓によるが故に」と仰せられた。生死罪惡の凡夫下根愚痴な我々が得らるべき善はなけれども、他力超世の強縁によりて佛の方より得せしめ玉ふなり。自身の念から、韋提夫人の眞似しよ

うと云ふては、人柄も時代も違ふて迎ても出來る譯ではなければ、今は他方本願の御手廻はしから、御慈悲の強縁に遇ひたてまつりし故に、釋迦如來の御在世に於て、生身の御化導直々に聽聞なされた。韋提希夫人と同容に、此三忍を獲得する上は、未來も異らぬ淨土の往生彌陀同体の御証りを開らかせていたゞくに疑ひはなひ、何と仕合の身の上と喜ばねばならぬ。扱この韋提希夫人が得忍せられたは、種々議論のある處なれども、善導の御指圖に依りて伺ふに、第七華座觀に於て見佛得忍とありて、住立空中の尊体を拜見して得忍の益を蒙るなり。今日我等は聞信一念の立處に、韋提と等しく三忍をうる。是れが見聞一致の謂れなり。然れば釋迦韋提方便して淨土の機縁熟すれば、兩行大臣証として、開王逆惡興せしむと、十惡五逆の罪人も、五障三從の女人に至るまで、此の本願に皈すれば、必ず安養の往生を得せしめ玉ふと知らせ玉ふ先達にして、ひとへに我等が爲めの御手引と喜ばねばならぬ。

即証法証之常樂

扱前座に於て驟聞に及びたる獲三忍は此土にて信一念の時うる利益今の
 即証法性之常樂とは極樂へ参りうつくしき佛けになる御利益を知らせた
 まふなり即ち善導大師の御釋に「此穢身を捨てて即ち彼の法性の常樂
 を証る」とあり法性とは眞如とも實相とも申して法の道理に体達したる妙
 境界を法性と云ふ常樂とは涅槃の四徳と申して大般涅槃の御証りに常樂
 我淨の四つの徳が具はる然るに迷ひの我れらは是の四つを逆様に心得へ
 て居る故に四顛倒の妄想と云ふ先づ常と云ふは常住不變のこと然るに此
 世は有爲轉變無常遷流なるもので常住なるものは一つもない愛を遣如様は
 「人間は不定のさかいなり極樂は常住の國なり」と仰せられて實に此世は不
 定の境界なるを常住なるものさやうに思ふて居るを常顛倒と云ふ今度御
 淨土へ参れば無衰無變とうつらずかはらぬ無量永劫一立古今然の御証

かゆへに實に常住であるまことに此世の有様は弘法大師が四十八字に知
 らせらるゝ如く色は香へと散りぬるを我世を離れ常ならん諸行無常の春
 の花も是生滅法の風に散る之れに引きかへて淨土の莊嚴は七寶樹林の花
 も香も皆な是れ常住不變にして生滅の無いのがまことの常と云ふもの次
 に樂とは今日の我れらは苦を樂と心得歡樂極まれば苦みとなり會て喜ぶ
 裏らには必らず別れの哀しみがあり盛んで榮花の後ろには衰へて憂ふ
 生れて祝ふは死ぬ悲しみの初め是れを樂顛倒と云ふ然るに淨土へ往生す
 れば「但有自然快樂音このゆへ安樂となづけたり」とも又經說の上では但受
 諸樂故名極樂」とありて苦しみの名さへも聞せぬとあるが阿彌陀如來の眞
 實報土じや我とは今日の我れらは煩惱の束縛につながれて一の自由を得
 ることなし然るに淨土へ参れば神力自在の身になるを我との玉ふ淨とは
 清淨このどにしてけがれのなさを淨と云ふ我れらば穢を淨と思ふて執着
 を起す先づ人間の体だに付て云へば此身は三十六物の不淨の入れ物是れ

をかりに紅粉の整ひをなして愛着をなす。是れ顛倒の妄想なり。是れに引きかへ淨土の証りは紫磨黄金の肌には應報の妙服。煩惱もなければ不淨のものは更らになひ故に眞實清淨じや。涅槃經に此常樂我淨の四を説いて「煩惱なきゆへに名けて淨とし。煩惱なきときは業なし。業なきが故に名けて我とす。業なきがゆへに報なし。報なきが故に樂と名く。報なきときは生死なし。生死なきときは常となづく。常樂我淨一實諦と名く。一實諦は是れ實相なり」と説き玉ふ。今の行者臨終の夕彼の安養界に至れば。即疾に此の法性の常樂を証るとあり。高祖の御言に「入涅槃門。值眞心。必獲於信喜。悟忍得難思議往生。人即証法性常樂」と仰せられ。慶喜一念相應すれば。娑婆逗留の其内から意提希夫人と同じく三忍を成就し。露の命の切れ次第極樂淨土へ往生を遂げ法性眞如の都へ入り。常樂我淨の御証りを開き。安樂自在の果報を得ると知らせたまふが。此偈文の意なり。

源信廣開一代教 偏販安養勸一切

上來七高僧の中天竺の二祖。大唐の三祖の御教化を尋して辨したるが。扱是より已下は我朝横川の源信僧都。御一代自行化他の御化導を知らせたまふなり。先づ源信和尚の御傳記は。元享釋書に委しく出たり。佛滅後凡そ千八百九十年の頃。即ち人王六十一代朱雀天皇の御宇。天慶五年大和國葛城郡常麻の郷良福寺村と云ふ處に誕生したまふ。父は正親母は清原氏なり。姓を卜部と云ふ。御両親尾高寺へ祈りて。一人の僧美玉を與ふと夢みて妊むとありて誕生したまふ。七歳にして父上に別れ玉ふ。父の御臨終に遺言して汝必ず出家して我が菩提を吊へとありければ。御年僅かに七歳なれども。此遺言を堅く守り夫より高尾寺へ詣りて出家の願望を立てし。祈念せらるる程に或時夢に高尾寺の藏中に入りたれば。數多の鏡ありて大なるもあり又小なるもあり。其中には明らかなるもあり曇れるもあり。然る處一人の僧ありて其

中の小なる曇れる鏡を源信和尚に與へらるる故に信師夢の中にありながら仰せらるるやうは同じ下さるならば大にして明らかなるを下されたしとありければ彼の僧の云くいやく是を持ち販りて横川の水で磨かれよとあるはどに夢さめればりぬ母に事の次第を告げ玉へば母の云はるるには鏡は智慧の相なり然るに其方は幼少にして未だ智慧なし丁度小なる曇りたる鏡の如し然るに之れを横川の水に磨けとあるは都叡山に横川と云ふ處あり彼處に至りて心の鏡を磨けとの指圖に相違なしと念頃に教へたまふ其後或時河の邊りに大勢の小供と遊び戯むれて居らるる處へ叡山の僧通りかゝりて右手の濁りたる河にて鉄鉢を洗はるるゆへ僧都小供ながら之れを見て御出家其河水は濁りて穢れたるゆへ此方の河にて洗はれよと教へたれば僧の云るるに淨穢は元と不二なれば何を清濁あらんやと申されれば僧都答めて淨穢不二にして清濁あしと云はる其鉄鉢も又た洗ふに及ばすと云ふて此方に向きて遊んで居らるる内に小石を集めて數取

りしてありければ彼の僧大に驚き此小兒の智慧を試みんとて傍に寄り今汝は其石の數取りを爲すに一ツ二ツと九ツ迄の字を付くるに十に限りてつの字を付けざるは如何と問ひたれば僧都答へて先きにいつと五の處につの字を二つ用ゆるゆへに十に付けずとありければ彼の僧いよく其非凡なるに驚き夫れより同道して家に至り母親に向ふて右の様子を語り此子を此處に捨て置くは惜しいもの何と出家にしたまはずやと云ひければ母子共に日頃の願望なれば大に喜びて何分宜敷ふたのほどありて直様叡山に連れ歸り懇篤に教育ありければ其勉勵尋常ならず蓋雪の功を積み切礎琢磨怠りなく十三歳にして得度したまひ夫れより甚深の法門を究め終に一代藏經を五邊まで御覽なされ大乘小乘顯密諸經の奧義を明らかに玉ふ依て源信廣開一代經と仰せらるる扱この一代經とは釋迦如來五十年の御說法大小乗の諸經律論總じて五千二百五十四卷とある斯の如きの大藏を五返まで開見したまひ其申より念佛の一門をひらきて往生極樂の教

行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤たれか歸せざらんと仰せられ念佛往生の御法りは五濁惡世の衆生の爲めには目なり足なりと知らせたまふ。此目足とあるは今日世上の事にしても人間の無くては叶はぬ大切なもので殊に道を歩み行くには此の二つが体た中での大切なるものじや。今も我れらが往生極樂の途に上るには智慧の眼と修行の足とが無ければならぬ。然るに今時の我れ人は此智目行足の欠けたる身の上なれば我れらが淨土へ往生する目足は他力念佛の一法にして餘の法にあることなしと御勤めなされた。依て御和讃には「本師源信ねんごるに一代佛教のそのなかに念佛一門ひらきてぞ濁世末代たしへける」と仰せられたり。然れば一代佛教の其中から撰擇して念佛の一門こそ末世相應の要法なりとてひとへに御化導あらせられ貴ひも賤いも在家も出家も此念佛門に入りて淨土の往生を遂げよとて御自身も智慧や學問をば打ち捨てて手が如き煩悩のものと仰せられ在坐の我々に肩脊ならべて一味に念佛に歸したまふ。此源信和尙の選述

したまふ往生要集は實に難有御聖教にして唐土に渡されしに宋の周文僖と云ふ人之れを國清寺の經藏に納めたるに彼の寺の藏に三層の架あり上は佛經中は論藏下は師釋と次第して納めたくゆへに今の往生要集も第三の師釋をのせる架に上げ置きたれば何の間にか自然と上層の佛經の架に有り取りなほして本との處に置くこと又第一層に移る斯の如くなること度々なりければ此集佛經と相應するゆへに然るなりとて人々東に向ひて日東初嚴院源信如來と稱して拜せりと云ふ。寛仁元年六月十日七十六歳にして往生したまふ臨終の奇瑞希有なり。天樂空中に響き異香四方に薫し山中の艸木皆西方に靡く。又白雲に乗じ三井寺の慶祐阿闍利に告て云く我れは是れ故佛靈山の聽衆化緣已に尽くるゆへに今本土に還るとあり。是れを又讚に「源信和尙ののたまはくわれこれ故佛とあらはれて化緣すでにつさぬれば本土にかへるとしめしけり」と仰せられたり。

專雜執心判淺深

報化二上正辨立

扱このエ句は我れらが今度淨土へ往生するに付て肝要なる御化導なり。專とは專終のこと。雜とは雜修のこと。即ち文の上で申せば專修の人は執心牢固にして眞實報土へ往生し。雜修の人は執心不牢固にして眞實報土の往生は叶はぬとある御催促じや。其專修と雜修とは因なり。報土と化土とは果なり。扱この專雜の判釋は善導己に知らせたまふと雖之れを報化二土に係て詳らかに辨別し。其得失を念頃に明かされしと。今師の力らなり。此專雜の得失は篤と聽聞いたさねばならぬ。若しも此處に誤まりがありては眞實阿彌陀如來の御膝元別願酬報の御淨土へ參ることは出來ぬ故。大切に心得ねばならぬ。先づ此專修雜修と云ふことを心得るには源と善導大師の正雜二行の謂れから聽聞せねばならぬ。其正雜二行とは善導大師の散善義の中に淨土參りの正行に五種を立てさせられて。一に讀誦正行二に觀察正行三に

禮拜正行四に稱名正行五に讚嘆供養正行とある。此五種の正行を除くの外一切の諸善萬行を悉く雜行と名く。仍て第一の讀誦正行と云ふは専ら淨土の三部妙典を讀誦すること。若し餘經を讀誦するに於ては雜行なり。二に觀察正行と云ふは専ら極樂淨土の依正二報の莊嚴を心にうかべみるなり。其餘の觀念の如きは雜行なり。三に禮拜正行とは専ら阿彌陀如來一佛を禮するなり。其餘に於けるは雜行なり。四に稱名正行とは一心專念に南无阿彌陀佛の名号を稱するなり。其餘の稱名は雜行なり。五に讚嘆供養正行とは専ら彌陀如來一佛を讚嘆し供養したてまつるなり。其餘は雜行あり。扱斯容に正雜二行を分別して。其上に五種の正行と云ふ中に。助業と正業との區別を心得ねばならぬ。前三后一を助業とし。第四の稱名行を正業とするなり。喩へば老人が杖を付くが如くにして。杖は助業。足は正業なり。決して杖で歩くには非ず。歩行は足なれども。其足の力らを助ける爲めの杖なれば。唯杖だけありても。躓りや腰拔は歩くことがならぬ。今も丁度其如く。第四の稱名正行は我

れらが浄土参りの足しや。左りながら是れは行々相對と申して。行と行との
 廢立を立てたまふ法門なるゆへに。稱名と云ふなり。一概に心得ては大間違
 ひとなる。善導元祖の御取扱ひは。行々相對が主になりてあるゆへ。能く明師
 の指南を仰がねば。稱名正因の異安心となる扱て。前三後一と云ふは。讀誦正
 行。觀察正行。禮拜正行の三と。讚嘆供養正行の一となり。是れは杖の容なも
 にして。助業と云ふ此助正の分際を辨へずして。讀誦も禮拜も讚嘆供養も皆
 浄土参りの因ねにするを雜修と云ふ。又御和讃に佛号ひねと修すれども。現
 世に祈る行者をば。これも雜修と名はたり。千中无一とさらはるゝと仰せら
 れたれば。南無阿彌陀佛の名号功力をたのんで。現世の福徳を祈るや。からは
 是も雜修の人と云ふなり。專修專念の行者なれば。十即七生。百即百生。十人あ
 らば十人ながら。百人あらば百人ながら。必ず眞實報土に往生することを得
 るに間違ひなく。雜修の人は千中无一とも。萬不一生とも。仰せられて。千人に
 一人も萬人に一人も。眞實報土の往生は叶はぬとある。夫れは何故ぞなれば。

先づ雜修には十三の失がある。一に雜修亂動して正念を失はすが故に。二に
 佛の本願と相應せざるが故に。三に教と相違するが故に。四に佛語に隨順せ
 ざるが故に。五に係念相續せざるが故に。六に憶想間斷するが故に。七に回顧
 惡重眞實ならざるが故に。八に貪瞋諸見の煩惱來りて間斷なるが故に。九に慚
 愧懺悔の心なし。十に相續して佛恩を念報せざるが故に。十一に心に輕慢を生じ
 て業行を爲すと雖も。常に名利と相應するが故に。十二に人我自から覆ふて。
 同行善知識に親近せざるが故に。十三にこのみて雜縁に近き。往生の正行を自障
 り他するが故に。斯の如くの失ある故に。眞實の報土へ參ることが叶はぬ
 是れに引かへ。專修專念の行者は。外の雜縁亂動せずして。正念を得る佛の本
 願に相應し。釋迦如來の教勅に隨ひ。十方諸佛の語に隨順する。故へに往生
 に間違ひはない。何と同行衆法然上人の御誡にも。何ぞ百即百生の專修をす
 て。千中无一の雜修を執着するやと。仰せられた然れば。雜行や雜修は如何
 程つとめても。元と本願に相應せず。阿彌陀如來の御意に契はぬゆへに。參ら

れよう等は無い速やかに専雜の得失を聞きわけもろくの雜行雜修自力のこころをふりすて。一心專念の願解にもとづくべきものなり
 扱次の一句は上を承けて専修專念一心一向の行者は執心堅牢にして報土へ参り之れに反して雜修の人は信心が淺きゆへに化土に生ると知らせた
 まふなり然るに御和讃に「報の淨土の往生はねはからずとどあらはせる。化土にむまるゝ衆生をばすくなからずとねしへたり」とありて誠に專修專念の同行眞實報土の往生人は稀れなりとある。依て蓮師は國に一人郡に一人とも仰せられた程に能く聽聞して御開山様の御跡をしたうて眞實の報土へ往生を透げねばならぬ扱大經には「易往而無人」と説かせられて淨土へ参るは易きことなれども報土の信者は多からず往生は今の信力によるとある他方の御信心を取るはとまれれば往きやすい参りやすい御淨土へ往くものがないと仰せられた時に此報化二土のことを略して申さば報土とは別願酬報の淨土と云ふ義なり化土とは眞に對する言にして眞實報土に

非ざる所を化土と云ふ今は懈慢界を指して化土と云ふ即ち觀經顯說の九品の如きは化土なり扱この懈慢界とは元と處胎經の説なり懷感禪師の群疑論の釋に依りて今即正しく專雜の得失を判じたまふ即ち雜修の人は此懈慢界に生れて眞實淨土に至ること能はずと知らせたまふなり何となれば懈慢とは懈怠緩慢の義にして執心不牢固の至心精進ならざる疑感中悔の雜修の人が生るゝ處なり又邊地とも申して眞實淨土より遙るか脇の片隅の邊鄙なる場所と云ふまゝなり報土とは第十八願念佛往生の行者が参る所ろで無量光明土とも又は蓮花藏世界とも名く一寸喻へて云はゞ報土は日本第一の都會にして天子様の御膝下なる東京の如く邊地懈慢は田舎の片隅不自由極まる邊鄙の如し今も眞實報土は十方世界の都會にして本師法皇の阿彌陀如來の御座處なる無漏法性の花の都と云ふ然るに在座の我れ人は此度は如何なる仕合やら歷々の聖者方でさへ自力で往かるゝ處ではないに況んや末法に生れ後れた唯知作惡の徒らものが娑婆の

御縁の尽き次第、眞實淨土の阿彌陀如來の御膝元へ直ぐ付けに往生を遂げ
但受諸樂の大果報を得たてまつるに疑ひのないは、万劫の初事生々世々の
大幸なれば、是れに就ても廣大の佛恩を念報せずんばあるべからず。

極重惡人唯稱佛

扱この一句は往生要集に「觀經云極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂」
とある文の意を御教化なされた。是れは觀經の下々品の往生を總結した
御言で觀經に此通りの御言はなけれども、五逆十惡具諸不善の惡人が臨終
に火の車の迎ひを受けて、半分地獄へ落ちたものが、汝若不能念佛應稱無量
壽佛乃至稱南無阿彌陀佛」とありて、其臨終刹那の危急に及び、觀念處で
はなひ汝ち念すること能はずば、正に無量壽佛と稱へよと教へたとき、如是
至心と南無阿彌陀佛を稱へるなり、火の車が轉じて蓮花となり、炎が變りて
清涼風となりて、往生を遂ぐるとあるが、觀經の説相之れが極重惡人無他方

便で斯る罪惡の凡夫に至りては、處詮他に方便は無い、唯稱彌陀得生極樂で
唯南無阿彌陀佛より外に手立はない。扱極重とは極惡深重と云ふこと、極と
は此上なしと云ふ文字なり、惡人と云ふても色々ある、然るに惡人と云ふ惡
人の中で、此上なしの大惡人とは、外のもの、を指したのではない、此御座の我
れらのことじや、重と云ふ字は一口に云へばかさなると云ふ文字で、一つや
二つではない罪業のかさなりくたものと云ふ意、是れに付て涅槃經の
中には「四重禁を犯し五無間業を造るものを極重惡と名くる」とある、因みに
四重禁とは、殺生、偷盜、邪淫、妄語の四つなり、是れを斷頭罪と申して、譬へば草
木を切れば木幹は无くなるも、其根があれば又芽を生じて元の如くにな
れども、人間の頭を一度切れば再び生ぜざるが如く、四重禁を犯せる罪人は
再び成佛せすと云ふ、又五無間業とは五逆罪のこと、之れは先に辨じたるが
如し、唯稱佛とは唯佛を稱よとあることじや、爰に心得ねばならぬことが
ある、蓮師の御文章にも「口に唯だ稱名ばかりをととなへたらば、極樂に往生す

へきやうにれもへりそれははきはきははつかなき次第なりと仰せられて
 唯稱へたばかりでは往生はならぬとある是れは一寸聞くと相違するやう
 に思へども能く伺へば同じ御教化なり夫れは如何と云ふに御文章にたゞ
 と仰せらるゝは徒らにと云ふ意で空しくと云ふことじや故にいたづらに
 明し暮すはこれつねの人の習ひなりとありて先づ世間でもいたすらに
 らすと云ふは何事もせず食ふては遊び寐たり起たりして何の所作もなく
 空しく日月を送ることじや今も其如く口にはばかり稱名をとなへても心
 底を探りてみれば空しく信心の無いことをたゞと仰せられた口ばかりで
 は往生は叶はぬ又耳ばかりに聞いて居ても往生はならぬ或る人が浄土へ
 参りた物語りと云ふを聞くに先づ浄土へ参りたら向ふに一つ蔵が有る故
 之れをのぞいて見たるにまぐらげが一抔入れである是れは何事ぞと尋ね
 たら娑婆の同行達の耳じやと云ふ又隣の蔵には數の子が一抔ある故へ是
 れは何物ぞと問ひたるに娑婆の坊主達の舌なりと聞たとある是れは坊主

の不信心と同行の不信心とを誡しめたる誠まことに面白い話じや蓮如様も御文
 章の上に御念頃に御誡めなされた如く師弟共に一味の安心に住さねばな
 らぬ今唯と仰せられたはたゞ口ばかりたゞ耳ばかりではない此唯の字は
 一向専念を顯はすの言にして餘の方へ心をふらず一心一向に彌陀をたの
 み他力の信心を深くたくはへて如實に喜ぶ姿を唯稱佛と仰せられた。

我亦在彼攝取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

扱この三句は往生要集に「彼一々光明遍照十方世界一念佛衆生攝取不捨我
 亦在彼攝取之中煩惱障眼雖不能見大悲無倦常照我身」と仰せられたる
 文の意なり又御和讃には「煩惱にまなこさへられて攝取の光明みざれども
 大悲ものうさごとなくて常に我身をてらすなり」との玉ふ即ち阿彌陀如
 來の心光攝護の御慈悲のふかさごとを知らせたまふなり我れとは源信和
 尚御自身を指したもふ言亦の字は人もまたと云ふ意なれば我れも人も一

味に彌陀を信すれば心光攝護の御利益を蒙むるとなり。扱この心光攝護のことは先きに攝取心光常照護の句の下に辨するが如し。然れば今日の我人も本願の謂はれを聞き分け一心一向の願解決得すれば立處に此阿彌陀如来は深く喜びましめて其御身より八万四千のれはきなる光明を放ちて此光明の中に其人をねさめいれておきたまふべしとありて光明に攝取せらるると雖も娑婆逗留の内は煩惱の爲めに眼を覆はれてるゆへに拜じことはならぬ。拜まぬと云ふて御照しなされぬではなひ覺めた時初めて来たと思ふまじ。昏から醒る母の手枕と云ふ如く我れ等は煩惱の夢を見て君るゆへに攝取光明を拜まぬと大慈悲なきことなくして常に我れら照したまふ。此倦と云ふ字は倦怠などと申して俗にいふうみつかれてはつとしたと云ふこと。是れをうじともものうしとも云ふ。衆生が煩惱に覆はれて御光明は拜まぬと御退屈もなされず愛想を盡したまはずして我れ等が蓮臺へ登るまで。此光明の懷るで守らづめにして下さることを常照我と仰せられた人

間の有様は淺間敷もので人の見ぬ處知らぬ處では懈怠にもなり退屈もするが我れらの根情私しが此れはとまでに働らき勤めても彼の人には知らぬさうな。此働さふりを見ぬさうなど直きに心に怠慢が生ずる。今阿彌陀如来の御慈悲には左様な影日向はなひとあるのが常照我の謂れなれば信心治定の身の上は御恩を喜ぶに影日向なく見せかさりの心を止めて御冥見御見通しと云ふことを心得て大切に喜ばねばならぬ。又凡夫の慈悲は淺はかなもので充分世間には慈善家として人にも云はるゝ人でも先方が何とも思はぬとか一向此方の仁げを知らぬと云ふ時はこれ程に迄世話をして遣ても彼の人は何とも思はぬ餘りと云へば愛想の盡きた人よと直ぐに倦怠の心が生ずる。昔し光明皇后と云ふは心願ありて千人の垢を洗ひたいと云ふ願ひ事を立てさせられ御手づから風呂をわかし玉ひ。公家衆を初め武家の人々は云ふに及ばず町人百姓でも入り往きさへすれば勿体なくも一天の國母と云はるゝ御身が御親切に体を洗ふて下さる。去るはとに九百

九十九人すぎで、今一人で願みつると云ふ時一人の乞食躰を見れば、慮りか
 けた瀕病やみが来りて承はれば結構なる功德をなされまますさうなが私し
 のやうなる病人は常の風呂へは入れ手もなし、病氣で難儀を致しまするは
 必に何卒御慈悲に入れて下されたと申したれば、其むさくるしさ見れば
 もかりでもうたてければ、之れを断はれば折角の願望も水の泡破れて仕
 舞ふがかなしさに、風呂へ入れて洗ふてやらるゝは必に其病人が申すには、
 誠に難有き御慈悲の御恵みに逢ひました。が今一つ御願ひが御在る此容な
 業病は如何はと醫藥を盡しても平愈は仕らぬが、或る醫の申すには慈悲深
 き人をたのみ頭から足まで膿血を吸ひ出してもらへば、此病ひが愈ると云
 はれましたが、今日世上で慈悲深ひ入と申したら、彼方様御一人より外には
 有らせぬ、何卒御慈悲に吸ふては下されませぬかと願ふ故、唯見た斗り
 さへ穢いに其容なことが出来る筈はなけれども、大願成就の御心願破れる
 ことのかなしさに如何にも吸ふてやるとありて、即ち足裏まで膿血

を吸ふて遣はさるゝと今の病人は大に喜び難有し辱なしとて、一禮述べ
 去らんとするゆへ袖をとらへてこれ乞食上、其方の願によりて膿血を吸ふ
 ては遣はしたるが必ず光明皇后に膿血を吸ふてもらうたとは言ふまい
 どと仰せられたれば、不思議や俄かに紫雲が稠ひき、音楽が聞へ、光明輝くと
 思ふは必に今の病人忽ち紫雲に乗じ、空中に顯はれたまひて仰せらるゝに
 は、我れも其方に膿血を吸ふてもらうたとは云はぬは必に汝も必ず阿
 闍佛の血を吸ふたとは云ふまいと御意あらせられたとある、然れば是れ
 は必に慈悲深ひ皇后でも、如き穢れた病人に逢ふては愛想が尽きては
 つとなされ、つらいものじやと思召す、然れば今日の我れ人の如きに至りて
 は、其淺はかなる事は話しにならぬ、相手が悪るけりや、嫌になり愛想が尽る
 今大慈无倦常照我とは阿彌陀如來の廣大なる御慈悲にて、一念歸命の其時
 から臨終の夕べまで、无明業病の穢れの身諸佛でさへも愛想の尽きた私し
 を光明の懷ろに抱き上げ、大悲の脱身を一寸も離さず常住不斷に御照し下

さるゝを大悲ものうきことなくて常に我身を照すなりと仰せられた

本師源空明佛教 憐愍善惡凡夫人

已下は本朝念佛の元祖黒谷源空聖人の御化導を聽聞に及ぶ先づ源空聖人の御傳は拾遺古德傳元亨釋書等に出たり今略して云はゞ御生國は美作國久米の南條稻岡の庄と云ふ處に誕生したまひ父は漆間の時國と云ひ母は秦氏なり八皇七十五代崇徳院の御宇長承二年四月七日に御出生なり其時天より二流の旗が下り西方よりは一筋の光明來りて産處の内を照したとある今師九歳の時父の時國は明石の源内武者定明の爲めに害せらる父の遺言にまかせて其歳出家して菩提寺の住職觀覺の弟子となり其後十五才にして叡山西塔の北介持寶坊源光の元に至る源光見て歎じて神器なりとて功德院の皇圓に付して十一月受戒したまふ三年の後黒谷の叡空に就て修學したまふ法然坊源空と名けられたり十八歳より廿六年の間だ一代

經を五遍まで披覽したまひ承安五年四十三歳にして黒谷を出で吉水にうつりたまひ大ひに念佛を弘通し淨土の正宗を開らたまふ南北學徒の効奏によりて七十五才の御時南海に遠流せられたまふ建暦元年勅免あり再び京師に歸りたまひて翌年正月二十五日八十歳にして入滅したまへり滅後に至りて其徳いよく盛んにして化益あまねく四海に滿てり勅して圓光大師と諡号を賜ふ其後寶永八年大師五百年忌の時に東漸大師と加諡あり又た寶暦十一年五百五十回忌の時には慧成大師と加諡せらる人皇八十代高倉の院空師を深く崇敬あらせられ終に圓頓戒を授りたまふ又九條殿下兼實公の願ひによりて選擇本願念佛集の御製作あり其他聖道の歴々たる師主みなもろともに歸依せられて一心金剛の戒師としたまふ因みに此の一心金剛の戒師とは遠く釋迦如來より師資相承して傳はる一貫圓頓菩薩戒なり師はち空師は釋迦如來より十九代の御相承の戒師となりたまひしなり又或時月輪殿に參られ淨土の法門閑談數梵の後退出の砌り地上

高く蓮花を踏みたまひ又頂上には金色の圓光あらはれて輝やけり兼實公
 は眼前これを拜見せられたりとある元と智慧光のからより顯はれたまう
 とおれば本地を尋ねたてまつれば大勢至菩薩の化身にてまします即ち
 御座の我れ人へ早く來れの御催促阿彌陀如來の御使ひとして衆生濟度の
 ために此土へ度々御出現まします先づ天竺に於ては舍利弗と現し居士に
 ありては善導と示し我朝にては源空とあらはれたまふ依て往生みたびに
 なりぬるに此度びことにとびやすしと自から御意あらせらるはとなれば
 御在世に於ても諸人靈感すること甚だ多し或る人は聖人を釋迦如來なり
 と感し或人は彌陀如來とみる又は大勢至菩薩と拜し或は文殊菩薩と見又
 は道綽善導と知るとあり其他御在世の奇瑞これ多しと雖も擧げて數ふる
 に遑あらず具さには諸傳の如し憐愍善惡凡夫人とは一代佛教に明達して
 時機をかんがへ堪不堪を察して末世相應の要法たる弘願念佛の一門をひ
 らき道俗貴賤を導びきてひとしく淨土に引入せしめたまふ殊に七高僧何

れに傳かはなければも取り分け今師は高祖の御師匠有縁の大善知識なれ
 ば御化導も一層難有く御念煩なる御手引なれば大切に聽聞いたさねばな
 らぬ

眞宗教証興片州

撰撰本願弘惡世

善導源信すくひと本師源空ひるめすは片州濁世のともがらはいかでか
 眞宗をさとりまじたどへ善導大師源信僧都の御教化は有りたりとも此法
 然聖人の御苦勞が無くば今日濁世に生れたる我々が弘願眞宗の法りに迷
 ひたてまつることば叶ひがたしと仰せられた扱眞宗と云ふは當流の宗名
 じやが凡そ宗名と云ふものは天竺にも大乘宗小乘宗と分れ其の小乘宗の
 中にも二十部の宗旨が別れてあり又唐土に於ても南山北山など云ふて
 種々に宗派が別れてある我日本でも八宗九宗と分れてあり其宗名を付く
 るにも色々譯がありて先づ花嚴宗と云ふは所依とする花嚴經に就て名け

天台宗とは唐し天台山に於て智者大師の弘め玉ふ宗旨なるゆへに天台と名け眞言は示す所の經は眞實の言教と云ふ意味から名け禪宗は主とするところの行法から名くると斯容に名を付るに皆譯のあることとやが今御當流に於ては御文章にも示したまふ如く世間に施布して一向宗と云へども成程一向に淨土を願ふ宗旨なるが故に一向宗と申して子細なきに似たりども本宗より唱へ出したる宗名ではないと仰せられた然れば其本宗より唱へる名目は即ち淨土眞宗と云ふ名目じや扱此眞宗と云ふに付て殊の外難有ひ謂れがあまりて先づ眞とは假に對するの言にして眞實の義なり是れに重々相望と云ふことがありて儒道に對しては佛教を總じて眞宗と云ふ是れは圭峯の宗密禪師が孟蘭盆經の講釋に「眞宗いまだ至らざるによりて周孔且らく心をかけしむ」と書かれたを靈芝の新記に釋して眞宗とは即ち佛教なりと示された此時は周公や孔子の教に對して惣じて佛教を眞宗と云ふ意も扱又其佛教の中に於ても細に吟味すれば小乗教に對しては

大乘教を眞宗と云ひ權大乘に對しては實大乘を眞宗と云ひ其大乘中に於て大乘無上法とある淨土門を眞宗と云ひ其淨土門の中に於ても十九願二十願の要門眞門の方便假門に對して第十八願の念佛往生の法を眞宗と云ふ今法然上人の御勸めなると選擇本願と云ふは即ち第十八願のこと往生之業念佛爲本とあるが取りも直さず眞宗の教行と云ふもの此淨土眞宗こそまことの中のものにして眞實の至極なるがゆへに大經には「惠以眞實之利」と説かせられ阿彌陀經には「説誠實言」と仰せられ釋迦彌陀二尊の眞實十方諸佛のまことにして惡人女人が成佛の近道此上はない實に一天四海に比類なき御宗門なるが故に淨土眞宗と仰せられた御和讃に「念佛成佛これ眞宗万行諸善これ假門」と仰せられたり此眞中の眞たる弘願一實の法門を開顯したまひしは法然聖人なり故に眞宗の元祖と崇めたてまつる日本淨土門の祖師と云ふたら今師に究まる次に教証とは具さには教行信証と云ふこととじや七言の文句をかざる故に四法の初めと終りの教証を舉

げて行信を中間に攝したまふことなる先づ教と云ふは能證の言教と申して
 即ち淨土の大無量壽經所説の眞實の教法なり行と云ふは法体の大行に
 して第十七願の名号信とは第十八願の三信証と云ふは十一願の必至滅度
 の御証りのこととや。是れ皆佛因佛果で我が物として一つもない。故も行も
 信も証も皆ことごとく本願の御成就如來他力の御仕上げなれば聊さかも
 凡夫の計ひはあく丸々他力の御仕立なれば是れを他力往生淨土門と云ふ
 なり。片州とは我日本國のこと何故に此日本國を片州と云ふぞなれば片は
 一片なぞと申して雪のちらくを降るを雪片々と云ふ全休花びら一つの
 ことを片と云州とは海中の島國と云ふこと同じ島國と云ふても大きな島
 國もあるが我日本はまことに小さい島國で丁度大海へ花びら一つ散り落
 ちた如く極小さい離れた島國ゆへに片州と云ふ又は粟散片州とも申して
 粟つぶのちりたる如くじやとある御和讃に本師彌空世にいでも弘願の一
 乘ひろめつゝ日本一宗ことごとく淨土の機縁あらはれぬと仰せられて日

本國に於て初めて淨土門をひらきたまひ六十餘州へ普く御弘めなされた
 はひとへに法然聖人の御苦勞じやと知らせたまふ

撰擇本願弘惡世

撰擇とは取捨の義即ち法藏菩薩の因中に於て國土の微妙善惡を取捨
 したまひ。即ち能惡なるをぬらひすまて善妙なるをゑらひとりたまひて本
 願とし。五劫に思惟し永劫に修行して成就したまひたる本願なるがゆへに
 撰擇の本願と云ふ是れ超世不測の願海なり。即ち第十八願念佛往生の誓
 願のことなり。空師能く時機を察して末世相應の要法たる彌陀超世の本願
 を五濁惡世に弘興したまふ。即ち撰擇本願念佛集は禪定博識月輪兼實公
 の告命によりて選述したまふことなる。是れ取も直さず末世の我れもに
 往生の肝腑一宗の骨目たる他力往生の旨を明し玉ふ。惡世とは五濁惡時惡
 世界のことで丁度今時の有様で五濁増時多疑謗とて誠に修行あるものを見

ては膿毒を潰き破壊す念佛の行者や善人を見ては、誇りたりあなせりて邪見を起し、妨害をなすが末世の淺間敷ひ成行きじや、故に法然上人や御開山をねたみにくみて、遠流に處す。如斯の惡世邪見増盛の最中へ御出會なされて、御化導の御苦勞あらせられたを機が付かば、邪見な根性もひるがへし、回心懺悔の思ひに住されねばならぬ。昔し唐土に長禪と云ふ者が一人の母に事へて至孝なり、元より家貧なれば、格別の世話も届かねせめては、親の心を痛めぬやうに心懸け、父母います時は遠く遊ばずと、何事にも氣を付けて出入の折柄も心配のかうらぬやう、平素孝行な人でありしが、或時所用ありて他所へ行き、戻り道に山中に行き暮れたるに、山賊三人に出逢ひたれば、長禮が申すには、私は御覽の通り貧乏人で、金銀の所持はなく、着類と申しても見らるゝ如くの籠服ではあり、何一つ其方達の役に立つものは無いによりて、何卒ゆるして此處を通じて下されと云ふに、彼の三人の盜賊われらは數年此業を以て生活をすする者なれば、金銀の有無は見たばかりで承知するが

此頃中は不仕合せで三日間も食物がない。之れによりて金銀よりも先づ汝らの命らが貴びたい。人肉なりとも食して生活をなさんと思ふなりとありければ、長禮も之れを聞きて大いに驚きたれども、如何にせん相手は三人の強の者、所詮助かる見込もなければ、覺悟を極めて申すには、如何にも夫れは氣の毒の至り、又我れども何れ一度は死なねばならぬ、跡たゆへ、晩かれ早かれの違ひなれば、命らは汝ら等に與ふべし。世には虎狼の餌食となりて死するものさへあるならば、今汝ららの爲めに殺さるゝとも、更に厭はねど、今一つ願ひあり、夫れは餘の儀にもあらず、我れ家に一人の母あり、平素他出でて歸りがたそくなりても、門に立ちて案じ煩らひ待詫びたまふ。今番もさそや心痛して待たるゝに違ひはない。今生の暇乞ひ一目母に逢ふて來たいは、とに決して虚は云はぬに依りて、暫時の間を待て、呉れとありければ、盜賊共も之れを聞き、氣の毒に思ふて、夫れならば母に逢ふて來るがよいと許しければ、大に喜び、急ぎ家に戻りて見れば、案に違はず、門口に立ち出て待詫び

たる様子にて長禮の姿を見らるなり喜びて好くこと戻つた。今日いひに
 い遅いともゆへ。若しや途中で難儀をするか。但しは病氣でも發りたか。案
 じ煩ふて居りました。やれ嬉しやと喜ばるゝを見るに付けても胸一杯涙は
 はせき上げて来るを押へくてもう母様男と云ふものは外へ出ますると
 思ひがけない用事が出来て思はず今日も遅くなりました。何卒ゆるして下
 さりまし。左りながら何卒是からは御待ち下さるな。人の命らは俯てになら
 ぬもの。何處で死ぬやら分らぬもの。餘り御心配が過ぎるは御身の毒必らず
 く待ては下さるな。今夜も是から據ない用向で一寸其處まで参ります。が
 今も申し上る通り。何處で死ぬるやら知れぬとして見れば一度々々が母上
 の見たまめと母の顔を見て涙を流す故。母も長禮に向ふて是れいつにない
 物思ひの様子。何を其様にさびしいことを云はるゝと云はれて涙を押拭
 ひ本につまりぬ事を申しました。是から一寸往て参ると他ながらの暇乞ひ
 して。夫より彼の盜賊の處へ往き。私しが頼みを聞て呉れたゆへ母にも逢ふ

て参りました。もう心残りは何にもないゆへ此上は御前達の思ひのまゝに
 なされませと云へば。盜人三人も互に顔を見合せ誰れも返事をしてがない
 暫くありて盜賊共の云ふには。扱もく御前は眞どの人間じや。かゝる人を
 何として殺されよう。如何なる人でも殺すと云ふ處を逃れて再び殺されに
 來るものはない。然るに御前のやうな孝心深ひ人も世にはあるものを。私し
 らがやうなる大悪人。他の物を奪ひ掠めるさへあるに。斯程な人を殺して食
 物にしよう。とまで思ひ付た心根が淺間しい。前眞實に面じて私しらは
 今日限り盗みを止め。眞人間の仲間入が致したい。就ては縁あるれ御の事ゆ
 へ。何卒今日から兄弟分にして下されたし。其母へは四人して孝養を尽さん
 と懺悔慚愧のまことをあらはし。誤り入りたる物語りに。長禮も夢かどばか
 り喜びて。四人連れ立ち家に歸り事の子細を母にも語り。夫より四人が心を
 堅めて働くは。どに家計も次第に有福になり繁昌したと申すこと。餘計な話
 しの様なれども。盜賊人殺しの大悪人が長禮の眞とを感じ來にくい處へ再

ひ戻りた眞實に面して慚愧を起したは能々の仕合もの今も恐れながら安養の御浄土から大勢至菩薩の化身を示して此土へ度々來らしむ好い時節とか好い世界とでも云ふことか五濁惡時惡世界邪見熾盛の只中へ御出世なされて身は四國の端までも例へ海中の藻くすと成りても厭はぬと眞實まことを顯はして御化導なさるゝ御慈悲の程が知られたら此御座限りに廻心懺悔とあやまりはて法然様と同一念佛無別道故の兄弟とあり極樂まで御供して阿陀彌如來の親様へ御禮の孝養を尽さねばならぬ。

還來生死輪轉家 決以疑情爲所止 速入寂靜無爲樂

必以信心爲能入

扱この四句は選擇集三心章に基きて信疑の判決を明したまう實に此選擇集は眞宗の簡要念佛の奥義斯に攝在せり希有最勝の花文無上甚深の寶典なり一部十六章段ありと雖へども肝要は三心章にあり此三心章は「當知生

死之家以疑爲三所止涅槃之城以信爲三能入一等」とある信疑の判決を以て眞宗の奥義選擇の極致とするなり法然上人御生涯の御化導此外にあることなし此選擇集の御付屬を以て師弟一味の御化導番々有縁の善知識且暮の御教化も唯此の謂れにして如來の本願を疑ふな大悲の眞實を信せよと仰せらるゝより外はなひ然れば祖師聖人御相傳一流の肝要は今この四句の文の意に究まる扱生死輪轉の家に還來するとあるは先づ諸大乘の經論に生死と説くもの二種あり一に分段生死二に變易生死其分段生死と云ふは勝曼經の中に虚偽の衆生身上にあると説かせられて分々段々に二十五有界を迷ひ地獄で死では餓鬼道に生れ餓鬼道で死では畜生道に生れ又相たは天上界に生れては美しい姿となり又は角や鱗の逆立つ恐しい姿たにもなりてさまよひ廻るを分段生死と云ひ變易生死とは初果より二果へうつり十信より十行へ轉じ初地より二地へかはるを變易生死と云ふなり今は正しく分段生死を云ふなり生たり死たりする處を家と仰せられ其生死の

初め終りの知れぬ有様を輪轉と御意なさるゝ丁度車の輪の廻はる如くに
 して「生れゆき生れゆきて六趣に輪轉し死に去り死に去りて三途に沈淪す
 我を生し母も生の由來を知らず生を受し我身も亦た死の去るところを悟
 らず過去を顧みれば冥々としてその首を見ず未來を臨めば漠々としてそ
 の尾りを尋ねず」と二教論に云へるが如く。かつて生々の先を知らず更らに
 世々の終りを辨ゆることなし。泥の川瀬の水車「展轉五道無有出期」とありて
 前生又前生來世なほ來世と生死の辻に迷ふ有様を輪轉と仰せられた次に
 家とは住家と云ふ意で我れらが生死に安住して更に出離を求むるの心ろ
 なし。喻へば魚の水中に住家として浮みつ沈みつたのしんで居る如くにし
 て結構ある寂靜無爲の城のあるをしりもせで五道六道の恐ろしい處ろ
 を住家として又しても戻り又しても廻る淺間敷ことを知らせたまふ。夫れ
 を還來と仰せられて是れは他の事でもなく外の人でもなく即ち在座の
 我れ人が有様じや。扱此容に又しても又しても又しても生死の家へ戻り來るは何故

じやと云へば即ち疑情を以て所止とする本願にも迷ふことがかなはず
 助かり逃るゝ法が無くて迷ふなら是非もないが佛法繁昌の時代に生れ結
 搦な尊とひ易すらかなる教法に逢ひながら元どの住家へ還りては情けな
 い事じや高祖の御言にも「若しまた此たび疑網に覆蔽せられれば更らに曠劫
 多生を遷歴せん」と仰せられて生死輪轉の家に舞ひ戻るには手引がある。其
 手引と云ふは疑ひじやとある。流轉生死のきはなきは疑情のさはりにしく
 どなき。夫れに付て三つの疑あり。一には自を疑ふとて我身は底下なり必ず
 しも道器に非すと自ら疑ふ。二に師を疑ふとは此人身口我ころにかなは
 ず。何ぞ必ずしも能く深禪妙惠あらんやとて師を疑ふ。三に法を疑ふとは所
 受の法何ぞ必ずしも理にあたらんやとて法を疑ふ。是れを喻へて申さば先
 づ初めに自身を疑ふて我身は底下の凡夫罪惡生死の身なれば佛道を修行
 して證りをうべき器量に非すとして我れと我身を疑ふは丁度病人が我れ
 と我が病ひ重くして治し難しと疑ふ如し。次に師に逢ふといへども此人我

が心に契はずとて智慧も徳もあるべからずとして疑ふは病人の醫師にあ
いて此醫師は下手にてやあらんと疑ふが如し。又法を疑ふとは藥りを疑ふ
が如し。此藥りにて此病を治するや否やと疑ふ。斯の如くにしては病の治
することなかるべし。今日の我れら无明の業病に悩むといへども自から我
が機を疑ひ善知識を疑ひ法を疑ふては出離其期はなかるべし。極惡最下の
機の爲に極善最上の法を教へ超世の本願不思議の佛智は如何に罪ふかき
機なりとも佛の大慈大悲を以て必で救ひ玉ふがゆへに機の有様に目を掛
けず其儘ながら彌陀に任せよとある教勅を信じてかゝるものを御助けと
疑ひの心の晴れ次第長の迷ひの暇乞して寂靜无爲の都に入りは追付けぞ
と知らせ玉ふなり。

速入寂靜无爲樂 必以信心爲能入

扱速とは速疾とも頓速とも申して手早いことを知らせるの言なり。即はら

聖道及び要門などの漸入に對して横超速疾を思はずなり。御和讃に「五十六
億七千万彌勒菩薩は年をへん眞どの信心うる人は此度さとりをひらくべ
し」と是れが横超の直道速疾悟入の謂れなり。又要門眞門の如きは或は疑城
胎宮とか邊地解慢などに往生して五百歳が間花に含まれて三寶を拜ひこ
とが出来なんだり。又は十二大劫の間蓮花が開けぬとあるが弘願眞實の
往生は速入にして命ちが終るなり淨土に往生するなり。往生即成佛の理り
なれば時もへだてず立處に彌陀同体の証果をうるを速入と云ふ。次に寂靜
无爲の樂とは選擇集には涅槃の城と仰せられて即ち無上涅槃の御証り
を開く處を寂靜无爲の樂と云ふ。寂靜とは涅槃の異名にして妄念の動亂を
しづめ心にさはがしきことなきを寂靜と云ふ。无爲とは有爲に對するの言
で此娑婆は何事も有爲と云ふて爲作造作より生ずるゆへに又壞滅する生
者必滅の有様で咲いた花なら必ず散り建た家なら終には破れ歡樂極まり
て哀情多く樂しみ盡きて苦み來る「情世間の轉變を觀するに哀傷の涙袖に

あまり静かにこの身の浮生を思へば憂懐の悲しみ肝に銘すこれが有爲轉
 變の世の有様じや然るに極樂无爲の樂土には八功德の池も水も人手をか
 けて掘りしにも非ず寶林寶樹の立木とて造作をかけて植へたではない音
 樂のしらべも降り下る花も皆四十八願の莊嚴より起り阿彌陀如來の大願
 業力のなせるなり依て御和讃に「安樂佛土の依正は法藏願力のなせるなり
 天上天下にたぐひなし大心力を歸命せよ無作の妙願力より顯はれたの故
 に滅することも變ることもし無衰無變常住にして替らぬは寂靜無爲の
 樂なり之れを善導は西方寂靜无爲樂とも極樂无爲涅槃界とも仰せられた
 扱この寂靜無爲の樂に入るには必ず信心を以て能入とするのである此が法
 然上人信心正因の御主意にして選擇集の骨髓なり此法然上人の御腹底を
 汲み取りて信心正因の旨を開き顯はしたまふが我が御開山様じや依て相
 承の御代々信を本として勤めたまひ祖々相ひうけて疑ひを誦め玉ふ上來
 七祖の論釋に依て肝要を知らせたまふ南天の信因稱報今正信偈の繕るを

卷く處にて信疑の決判あるを見れば信心正因は七祖傳承の骨目なり初め
 に南无歸命を擧し終りに信心爲能入を明す正信の名義これに合はざる若
 し此信心未定の輩は決して本宗の門徒たるべからず高祖御臨終の御遺言
 には「淨土の蓮臺にて一味の同行相待も申すべし候」とあり願力成就の報土
 には自力の信心にては參ることかなはず必ず他力廻向の御信心を以て速
 やかに寂靜无爲の都へ入り久し振りの御拜顔を得てまつるは信心の身
 の上なり

弘經大士宗師等 拯濟無邊極濁惡 道俗時衆共同心

唯可信斯高僧說

三月正當三十日風光我別告時身其君今夜不須睡未敢曉鐘猶是春と長
 長の間だ花を詠めて樂しみられたるも春のまもしるは長い日を短う
 暮して今日は三月の晦日じや今年の花は來年も有らふけれど春身は不

定の世の中に暮せば年々歳々花相似たり歳々人同しからず機程かな
 からへて見ん山櫻花よりも命ちと思へば今宵は夜と共に春を惜ま
 日は暮れても夜明けの鐘のなるまでは矢張り春の内七やと云ふて三月晦
 日に春を惜んだ詩の意は花を惜む風流人の心る持ち今御法義大功
 に喜ぶ同行の身の上も其の通り長々の間た座を重ねて聴聞に及んだ正信
 偏は今席を以て御名残りじや御法義は何日もあるうけれど明日をも知
 れぬ吾身じやと思へば名残惜む心を起し退屈の念を拂ふて御苦勞の程を
 念頭に聴聞して喜ばねばならぬ切この四句は正信偈百二十句の結句の
 御文で愈々結び止めの御教化じや弘經とは弘は弘通の義で御弘めなさる
 うこと經は淨土の三部妙典なり此三部經を精にして天竺で御弘めなされ
 た龍樹天親を大士と仰せられた龍樹菩薩は難行易行の道れしへ流轉輪廻
 の我れ人を弘誓の舟に乗せたまふ天親菩薩は廣大無畏の一心をあらはし
 て思鈍の我れらを通されたまふ故に弘經の大士と云ふ又た宗師とあるは

大僧から法然聖人までの高僧方を指した言はなり斯の如く天竺の二大
 士大唐の三祖我朝の二祖みな御銘々に此中來聴聞の如く御念頭に往生淨
 土の旨を断はしたまふ故に御和讃に三朝淨土の大師等哀愍攝受したまひ
 て眞實信心すゝめしめ定聚の位ひに入れしめよと仰せられたり拯濟无邊
 極濁悪とは即ち我れを哀愍したまふ御慈悲のこと道俗時衆共同心とは
 善導の歸三寶偈の御言で道と云ふは道心堅固の出家達坊主衆のこと俗と
 は在家止住の輩ら他力往生の御化導は出家發心のかたちを本とせし捨家
 棄欲のすがたを標せずたゞ一念歸命の他力の御信心を決定すれば更に男
 女智愚貴賤老少をわらばざるものなり頭を剃りて衣をも着たのが手狎で
 もなく在家止住で孫子の手をひき世路にあせるが戻りたでもない法然聖
 人の仰せには在家で念佛が申されずは出家になれ出家で念佛が申されず
 は在家になりて念佛をとどなへよとある遠江の善性房は坊主をやめて大
 工になりて御慈悲を尊んだとある蓮如上入御成八十五歳山科の御坊に於

ひて御往生の時その一月二十四日のことを仰せられたるたまはく。蓮如は彌
 爾明日は淨土へ往生を遂げたてまつる。最早今生の御暇乞に御本尊様を始
 め御眞影様へ御暇乞が致したる程に平生用意の箱をこれへど仰せらるる
 に依り實如上人其箱を御枕元へ持参せられたれば其箱の蓋を取れよと仰
 せらるるにより蓋を取らせらるる。内には小紋の紋付の御召物あり。夫れを
 着せかへてくれよとありければ實如上人申し上げらるる。には今生の御暇
 乞とあれば白無垢に御法衣を召されてこそ然るべきに在家の着する小紋
 の御召物とは云何で御座ると御尋ねたなりたれば蓮如様は両眼よりはら
 くくと涙をこぼさせられてこれ實如今日迄は如來の御代官をつとめさせ
 ていたしゆへ法衣に袈裟はかけられたるも心の内は在家のものより劣
 りはてた庵末な心中じや彌陀の本願は出家より在家が正客ゆへに彌陀の
 淨土へ参るには委たも心も在家になりて日出度淨土へ往生を
 遂ぐるなりと御意あらせられたれば實如上人を初め其座に居りたる御弟

子方も一同に感涙にむせびたりとなる。時衆とは御在世の同行から今日の
 我られのこと共同心とは一味同心と仰せられた。即ち七高僧の御化導の
 如く一味の安心に住して往生を遂げよとある。然れば一味の廻心一味の深
 信一味の往生一味の歡喜一味の相續一味の攝取一味の恩徳を喜び信心の
 かはりたふておはしまさん人々は吾が参らん淨土へはよも参りたまはし
 よくよく心得らるべきものなりと仰せられし如く此世ばかりの同行では
 残り多し當來の親友とあれば後生まで此御座へ寄り合ふたる如く淨土で
 諸上善人俱會一處と一味に手引くのでなければ眞實の同行ではない。難
 可信斯高僧説とは唯とは他の事をいふ言で自力の人師の御教化や他宗
 の智者達の妙法せらるることを聞て。悉ふな他方弘願を正當に御相承あら
 せられた。此の七高僧の御教化を信上たてまつれどの御能促しや。悉しけな
 くも三國の祖師たの。此一宗を眞行す愚弄すむるどころさら私し
 なしと仰せられ。又御文章には「さあれ親鸞めづらしき仰をひろめず如來の

教法を十方衆生にときさかしむるときは、只た如來の御代官をまうしつる
 ばかりなりと仰せられて、三國七祖の弘教によりて我れらを一味に手を引
 き玉と逢ふた時語り盡さうと思へども、別れになれば獲ることの業「正信偈
 百二十句の御思召九牛の一毛大海の一滴を汲みて自信の喜びを以て教人
 信の一端に供す同心の行者ありてこそ、愚者が本懐報恩の万一に契ふ聴く
 人々手が足らざるところは補佐したまひ短針深井を汲み難し先業の指南
 に依て愛樂佛法味の助縁とす。

正信偈講話下巻終

明治廿八年五月拾九日印刷
 同年同月廿五日發行

著者相續人

本多 賞道
 東京橋區築地三丁目
 三十九番地

發行者

清水 精一郎
 京都油小路北小路上ル
 五本町第六番戸

印刷所

山口 恒七
 大阪西區阿波堀通貳丁
 目六番隣

版權所有

發行所

興教書院
 京都油小路北小路上ル

欠

MISSING